

明治三十三年三月五日發行

北辰會雜誌

(非賣品)

第貳拾六號

第四高等學校校友會

北辰會雜誌第二十六號目次

論 說

美の説明

西田幾太郎

テニソン管見(續)

西川犀堤

老子管窺(續)

月聲迂人

雜 錄

俚諺雜話

紫 影

謂れ因縁

三 諸

紅葉に就きて

市 村 塘

漢文の應用

村 上 函 峰

閏年の循環に就きて

北 條 時 敬

厭世雜觀

璞 哉

詩壇批評的解釋

石田墨子軒

文 苑

不満足物語

新体詩松葉集

和 歌

俳 句

長野縣師範學記

義經景時爭逆櫓論

俱利伽羅記行

讀說難篇

漢 詩

批 評

第廿五號の批評及希望

學 山 人

雜 報

新年辭。冬天の快。北辰會小會記事、秋季陸上運動會、柔道紅白勝負。其他數件。

よ、ち、生
白 貴 子
紫影、諸同人
紫影、諸同人
村 上 函 峰
明 石 華 陵
醉 墨 居 士
竹 溪 孚
梅塲、月聲迂人、

北辰會雜誌第二十六號

論 說

美れ説明

西田幾太郎

美とは如何なる者乎先づ之を感情的方面より考察せば美感として一種の快樂に外ならず故に美は一種の快樂を與ふる者とし美感を以て私慾的快樂と同種なりとなすはパーク以來主として英國の心理學者が主張せし所に於て此說も幾分の眞理なきにあらざると雖美の定義としては未だ不完全たるを免れず美感は快樂なり而も快樂は尽く美感ありと云ふを得ず名譽、財産、飲食、等の如き如何に大なる快樂を與ふるとあるも吾人が之に對して寸毫も美と云ふ考を有するとなきは誰も認むる事實なるべし近來マルシャルと云ふ人あり「苦樂と美學」なる一書を著し大に美感か一種の快樂たるを詳論せり氏の説く所に由れば美的快樂とは其感したる當時のみならず後より回想しても同様に樂しき快樂なり一言にて云へば不變的快樂なりと氏の説は大に事實に適合し頗る見るべき者あるが如しと雖も其基礎に至ては全く前説と異ならず單に時間的不變を以て美感の特性とせざる者にして之を以て果して能く美れ性質を説明し了れるや否や余は未だ以て完全なる説明ありと云ふ能はざるなり然るば美感とは如何なる性質の快樂なるや美感の特性は如何カント以來獨逸理想學派の説く所に由れば美感とは自己を離れたる快樂なり一身の利害得失を忘れたる時の快樂を

此の無我の一事は實に美感の要件にして若し之を欠く時は如何なる快樂も決して美感を興ふるをなし古にも罪なくして配所の月を見んかぞ云へる語あるは能く之の消息を洩したる者ならん故に如何に天才秀拔なる美術家にも其心事の陋劣なる者にして能く大家となり得たる者古來未だ之のあらざるなり之に反し洒々落落胸中毫も私念の拘束するなき時は獨り快樂なる者が美感を興ふるのみならず元來は以て不快となすべき所れ者と雖皆一變して美的快樂を興へざるはかゝる吾人が悲曲を讀み其惡むべき者愈惡むべく其悲むべき者愈悲むべくして益其美的快樂を感ずるとの深きは職として之に由るなり獨り外物れとのみにあらず全く私慾の念を離れたる大人豪傑にありては自己の一盛一衰も亦皆一種美感を興ふるに至る君子行くと所として樂しからざるはなしと云ふ者は是れ故に人若し真正の美感を得んと欲せば高潔なる無我の境界を以て物に臨まざるべからず其美術の所謂神來 *Inspiration* がある者にして美感は唯之の要件の下に生しうるなり

美感は右に述べたる如き者なりとせば此の如き美感を興ふる者は如何なる者あるか即ち吾人が美と稱する者は如何なる者を云ふか美は眞理若しくは理想れ現實 *Reality* に顯はれたる者なりとは誰も能く云ふ所あるが美の本たる眞理或は理想ある者は嘗てライブニッツ學派のバウムガルテン等が唱へし如く論理的眞理若しくは理想と同一視すべき者にあらず若し此の二者を以て同一なりとせば最も能く事實に 解剖圖の如き者美術の第一位を占むることからん天下豈かゝる滑稽なる理あらんや美の本たる眞理とは思考力に由て得たる眞理にあらず直覺的の眞理なり前に云ひし如き無我の境界に於て心の深底より忽然とて刺激し來る一種の眞理なり吾人がハムレットの

獨語を讀みて何となく一種の眞理を感じ轉た同情の念に堪へざる者あるは唯にハムレットの言が能く心理學の理論に合ふの故にあらず直接に吾人が心底の琴線に觸る者あるに由るなり此種の眞理は固より言語に由りて人に説明しうべき者にあらざ實にゲーテの所謂公開の秘密 *Offen Geheimnis* と稱すべき者はなり世人往々徒々に論理的眞理を重んじ此の如き直覺的眞理は一概に詩人の空想ありとして之を排するの者ありと雖も余の考ふる所に據れば此の眞理は吾人が自己を離れ能く物と一致して得たる所の者即ち神の眼を以て見たる眞理にして反て深く宇宙の秘密を穿ち夫の思慮分別を勞して外より推測したる論理的眞理に比して更に深且つ大なる者あるを知るなりカントやヘーゲルの大哲學も他日學者の一顧だに當らざる時は來るもゲーテやセキスピヤーの書は人心の鏡として百世に傳はるならんか

上に云ひし所を總括すれば美の感情は無我の感情にして之を起す所の美其自身は思慮分別を超越せる直覺的眞理なり是美が高尙なる所以にして此点に於て美は此の差別界を棄て、無我の大道に合する一種の解脱にして實に宗教と同一種に屬す唯其深淺大小の別あるのみ美は無我は一時の無我にして宗教は無我は永久の無我あるなり道德も其由來する所は固より無我の大道にありと雖も道德の要件たる義務の念とは自他善惡の差別の上に建てられたる者にして尙是差別界に屬す未だ美術宗教の妙境に及ばざる者あり但道德を行ふの厚き年積の功熟して遂に孔夫子の所謂浴乎沂風乎舞雩詠而歸の域に達せば即ち道德が進んで宗教に入りたる者にして道德宗教兩般あるとなし

テニソン管見

西川 犀 堤

The poet in a golden clime was born,
with golden stars above,

Dowered with the hate of hate, the scorn of scorn,

The love of love.

THE POET.

思をバイロン熱烈の炎に燃して常に疑の子とならんとは、はた又心をキーツ血涙の嵐にさらして常に死の兄弟たふんよりは、旬日の夢をウワイト島の丘岡林影に迷はせて、岸邊を洗ふ新潮の、のせくる春のいぶきに酔ひ、空にたゞよふ行雲に、紫表碧袂を翻して緑を織れるサルローの姿を忍び、霞を出で、雲に消ゆる雲雀の歌の妙なるに、去に詩人が金玉の餘韻をかかんうな、

アルフレッド、テニソンの生れしは一八〇九年、サタニクの魁首バイロンは佛國革命の餘烟を浴び、謀叛のなだれを負ふて大陸漫遊の途に上り、彼を以て一夜の中に名をかきしめたる、チャイルド、ハロルドの一篇に、噴火の面影を書き初め、ヒューマニチーは領袖、ヴィクトル、ユーゴーは、幽寂靜平のフロキアンチヌの草に、美はしきアデルフオーセーと共に、花を摘み蟻に戯れて、幼なき詩想を自然と人間とによりて養ひし頃ありき、

此時に當りて、嘗て徒に想像の淵にのみ沈みて朦朧不明け夢を語り、性理哲學の裡に其身を葬りて冷索單調の生涯を送り、極端より極端にのみ走りて一時旋風の如く天下を席捲せし詩人の一群は、漸く凋落の姿をあらはし、ここに一代の風潮を傾倒せしサタニクの一派も今や方に世人の倦

怠を招き、國民は過度の攪亂と炎熱とに喘ぎて、蔭樹と清泉とに其疲勞を醫せんことすること切かりき、テニソン天に寵命により、空に黄金の星を戴き、當時の希望と恐怖とを真理の光に闡うんとて此の暗黒の裡に現はれしもの、蓋し偶然に非る也、流麗明暢ある調の上に、清新れ思想を歌ひ初めし彼の詩は、愛らしき夏の夕の光の如く、日中の熾熱に洩みし薔薇乃花の面を擡げ、森影に白づく日光の熱火にもえし牧場丘陵を照らす如きもれありき、

テニソンもとより彼の先驅者となり、彼の爲めに其道を備へし多くの詩人の感化を蒙り、深く當時の時代精神に鼓吹せられ、バイロンの呼吸をすひ、セルレーの血を享けしと雖も、其明麗ある頭腦はよく此等を自己の暖うき胸底に融和し、調和し、新に一家をなせし所以のものは、真に其偉大ある天才の現はれし所にして思想の他に卓越するものなるを證する所以也、されども彼はバイロンの如く一朝にして其名をなしたるものに非ず、緩歩徐々として室に入りしもの、其初めて詩作を公にするや、批評は嘲笑となり、嘲笑は冷罵とあり、あはれヴィクトリア朝の桂冠詩人も十年の間沈黙無言の中に時機の到るを待たざるを得ざりき、されば彼の暢達ある才筆は夙に非凡なる文士の炯眼に觸れ、一八三〇年ウオーズウォルズは、文學の花さく時期はテニソンに因て開るべしといひ、一八三三年コレリッチは其卓上談片の中に述べて、予は未だテニソンの詩を全讀せずと雖も、見たりしもの、みに就ていはしめば、善美れ作といふべき也、只惜むらくは彼未だメイトルの何たるを知らずして詩作を初めたりと、かくの如く當時知名れ文士より褒辭を受けし彼の詩は、一時世人に認められざりしに拘はらず、一朝其眞價の世に彰はるゝや、名聲急に高まり

數年ならずして其位置容易に動かすべからざるに至り、四十一歳にして既に桂冠を戴き、高潔深沈バイロンに優り、沙翁以來未だかくれ如き完全なるものを見ずとうたはれ、一八五二年アイディルス、オブ、ゼ、キングの出版せらるゝや、彼の詩の完全を疑ふものは宛も異端視せらるゝに至れり

テニソンの詩に接するもれば先づ其女性を畫くよこせ巧あるに驚かずんばならず、婦人其變化多様なる情緒を平滑圓滿に描き出たるもの未だ斯の如きを見ず、宛も美はしき花束にて、角のなき額面と縁どり、寶石珠玉を鑲めたる中に畫られたる美人の如く、獨り女性そのもの、美あるのみに非ず、其美は四邊に色彩と相反映して一段の光を放つを見る也、かの眞率玲瓏の薔薇紅臉を寫せしリ、アンの歌や、重たげに面をたれたる百合花の上に、朝日と光の照らすが如き、アデラインの幽思を歌へる、はた又うつくかなる夏の朝に生れたるエリアノルの姿をよめるが如き、詩趣豊富にして春雨の響も之に如しと思はる、殊にプリンセスの一篇に、アイダ姫が、ノルスの國に社會革命の礎を定めんとて、多くの女學生を集めける一段の如き幽麗婉美、天來の絶品といはざるべからず、テインの如きは詩人は婦人の神經を有すとさへいへり、すぎ透おぼりの大なる目を開きて、默思幽想せるアデラインを畫けるに

Whence that aery bloom of thine,

Like a lily which the sun

Looks through in his sad decline,

And a rose-bush leans upon

Thou that faintly smilest still,

As a Niad in a well,

Looking at the set of day,

さては又アデラインの飛ぶが如き變化を寫すに

Frowns perfect-sweet along the brow,

Light-glooming over eyes divine,

Like little clouds sut-fringed, are thine,

Ever varying Madeline.

あやいこめでたし、うくの如き逸美の思想を有せし詩人は、其日々の生活に於ても亦己が畫きし詩の如く美はしき生涯を送りぬ、フレッシュウォーターの小村に、世の塵烟を離れて、鬱鬱繁茂せる樹影に清楚脱俗の寓をト、ソレント江灣の絶景に、典籍と花草との裡に俯仰し、軟かふる南風に平穩の夢も暖くなりけり

Where, far from noise and smoke of town,

I Watch the twilight falling brown

All round a careless ordered garden

Close to the riage of a noble down.

暮靄の遠く罩め来る清水門の春潮どこしなへに蘆荻の間に迫り、ヤール川の流湍は今も尙碧空れ
秀麗を千古の翠に宿すどかや、テニソングの如き自然に放適して悠悠其詩思を養ひ、歌ふこと
ろは春の使の鶯の音に媚ぶるが如く、董の花の朝霞に綻ぶが如く温雅優麗、冬の日の愛すべき趣
を備へしと雖も、詩人として欠くべからざる熱烈赤誠の情は此の平和ある詩人の胸裡にも其蟠伏
をわやまたざりき、かのセルレーが心よりの嬉笑れ中にも痛苦れ煩悶は溢れ、蜜の如く甘き歌も
却て悲哀の極みを告ぐると歌ひけん如く、精細ある注意を以て詩人の心に潜みし暗潮を窺ふも
は、清く月を宿せる水底に、必ず波の咽ぶ音を聞くあるべし、既に戀愛の高潮を歌ひ、平穩無
事の田舎を詠ずるもの、中にすら、熱烈の火焰折々に燃えて、其鋭き光を金句玉章の間にもくせ
しこと屢々ありき、凡そ宇宙の森羅萬象、吾人は常に之に馴れて毫も清新の趣を感ずることなく、
百年の昔に山より海に流れ落つる水も、今日の流も只繰り返し行く平凡の姿あるに過ぎず、
太古より生ひ繁りたる森林も我等が目には大なる園に生へる大なる樹々の群に異ならず、花の麗
はしきも、草の匂へるも、さばりこは思はず、げにソロモン王が、さきに有る者はまた後にあ
るべし、さきに成りし事は又後に成るべし、日の下には新らしきものあふざる也といひけん言葉
も宜なりけりや、吾人は常に宇宙は大美觀の前にあるが故に、却て宇宙は莊麗秀絶いるばかりな
るやと知らざる也、かの日輪の上るや其容何ぞ世の混沌を照らし初めし時と異ならんや、悠悠た
る水の流も、芽ざり初むる草木の眺めも、何ぞ其世に現はれし時の姿に異ならんや、はた又何ぞ
吾人が初めて之を見し時の眺めに異なることあらんや、吾等が見て單調平凡ありとする此の宇宙

は實に永劫の活氣を有し事物常に新しく吾人の前に横はり、自然の不朽なる心臓の鼓動は絶間
なくうつことを止めずと雖も、吾人の蒙昧は之を見之を聞くことを許さず、時に明光の心眼を照
らして僅の之を見聞するを得ることあれども、未だ其觀想を把住すること能はざる也。唯詩人
こゝに神秘の靈覺を有して時に折に其心鏡に映ずる清新ある宇宙を捕捉し、其眼前にあると凡ゆ
るものは、宛も盲人の目を開きて、光彩陸離れ四周を望むが如く、事々物々皆陳唐倦馴の趣を脱
して其玲瓏の詩思を動かし、詩人はこれなり、常に若く、常に處女あり、テニソンの詩克己抑尊、
其婉曲ある筆は痕、注意周到警戒最もつとめたるは蔽ふべからざるも、其一旦此の靈覺に捕へら
るゝや、縦横奔逸、滿腔の熱血をそゝいで餘蘊と止めず、其情緒の奔放するや、自在無礙、熾烟
れ迸しるが如く、江河の決するが如く、吾人をして果して之れテニソンなるかと疑はしむるもの
ありて存す、ロックスレー、ホルルの如き、更に進んではモードの一篇の如き、何れの此間の消息
を語らざるべき、事に滑なる海面の如く見えたりし詩人は、こゝに聲をあげて號哭し、こゝに
悶えて涕泣し、こゝに嬉々として笑ひ、こゝに怡々として悦び、狂亂騷擾殆んど人と愕りすもの
あり、彼はライフに對する觀念を述べて、其慘憺たる有様を叙して曰く

For nature is one with rapine, a harm no preacher can heal;

The maybly is torn by the swallow, the sparrow speard by the shrike

And the whole little world where I sit is a world of plunder and prey.

(Mand IV).

靜穩平靜テニンソンの胸中猶のくれ如きものありしり

「モード」と不幸に遇ふて幽鬱煩悶せる男子がモードある名の少女を戀ふて互に相歡悽せしか、少女の兄弟の誹謗を受けて決闘の慘劇を演じ、戀人を失ふて倫敦の飄零となり、怡々たる鳥の歌に少女と馴れ樂みし天地一變トて、陰暗失望の深淵に陥り、更に絶望の深壑より、勇氣の力に蘇生するてふ物語を寫せしものにして、其描ける事實はもとより日常のありふれたること共に過ぎざれども之に纏はずに絶妙の詩趣を以てし、事實は眞と穿てること、ヂッケンス、サッカレーの散文も之に及らざといふ、而して此の一篇はこれ實に詩人熱血の流露にして、詩人の一生を通つて、此の如き喪心の爆烈は之を以て終りとあらず、人は之を以てバイロンの摸擬にしてサタニック一派の謀叛的調子を歌へりと叫び、其平滑宛轉を失ふて過度に失せるを悦ばず、再び靜穩は舊調に復へることを望めり、詩人心裡の嵐今や又漸く其猛烈を和らげ、陰翳の雲いつしうに消えて、うらうなる蒼苔は山角に一端に現はれ初めぬ、乃ちロックスレー、ホールに次でプリンセスを歌ひ、モードの黒雲晴れてアイデイルス、オブ、ゼ、キング現はれたり

プリンセス、及びアイデイルス、オブ、ゼ、キングは共にシバリー時代の煙霧模糊の間の事柄を詠せるもの、イム、メモリアム的一篇プリンセスに次で出でたれ共、寧ろ哲學的にして通俗的れども之に非ず、高尚にして純乎たる叙情に屬す、これ詩人に對して餘り好まらざりし題目に非ず、天折せる友人の爲めに痛哭する彼は今一段の熱情と複雑とを要す、プリンセス及びアイデイルス、オブ、ゼ、キングの二篇の如きは詩人に取て好個の題目也、夫れ詩は想像を尙ふ、場所、事實、

及び人物の實在は讀むもの、情緒にふるゝことあらゝかにして、例ふれば高樓のおぼしきに優にやさしき姫君は爪琴を聞く趣を失ふて却て太鼓銅鑼の音を聞くが如き感なくんばあらず、日和よき春の野の、草の匂にまどろみて、夢の如き思の中に、想像は想像を逐ひ行ける、蜜の如く甘く、露の如く潔き詩作をこそ望ましけれ、地につけるもの、みにては我等が詩思に嘔氣を催さしめ、限られたる場所の中をみ、かして引き廻はされて、いつも同トき景色に接するは、氣倦み足疲れてものうき心地す、詩は常に人を地上に置くべからず、時に天上に擧げ、時に地上に下すを要す、かの彩雲の輕裾を引くところに地以外は世界を形作らざるべからず、うの穹窿の雲層に宮殿を造營せざるべからず、人を高めて無形の世界に棲ましめ、夢幻の宮殿に住ましめ、雲に包まれ、露に蔽はれたる人物と交際せしめざるべからず、あくの如きものにして始めて清高崇美のものを得べく、吾人はこれにほゝほみ、おゝに樂しむるべし、是れ詩人をしてシバリー時代の作物あらしむる所以にして、夢幻的世界と之に伴隨せる、崇高、高尚、純潔皆ふゝに纏はり、歐人の心情に順適せる戀愛、戰爭、冒險、眞實は彼等の最も愛する叙事詩の上に、華やうなる聲調を以て歌はれたり

プリンセスの一篇、サウス國の王ガマの花羞のしきアイダ姫はノルス國の玉の如き王子と幼きより許嫁なりしが、高貴の我儘と習ひ覺れたる學藝に、傲慢の風汀渚にわれて、鶯鳥の夢を驚おし、自のら女生を集めて大學を起し、女權擴張の企を始めたり、葡萄蔓のはひらゝり、花草の咲き亂れたる其校舍へは些うに男性の足踏を許さゝりければ、王子は二三の從者と女装して之にまぎれ

込み、姫の溺死を救ひ、姫の之を禁錮せしより、戦争となり、王子の重傷となり、可憐の姫君は傲岸の角を折て王子を介抱するなど、波瀾あり、活氣あり、殊に校庭の中に女生の嬉遊する様を畫ける優にめでたしといふ、高欄に凭りてうらゝの空に嘯ける貴女を畫ける

Leaning there on those balusters high

Above the empurpled champagne, drank the gale

That brown adove the foliage underneath,

And sated with the innumerable rose

Beat balm upon our eyeids ————— (Princess, III)

又姫が王子に病床に侍りて、ものゝ本を讀むるの中に

Myriads of rivulets hurrying through the lawn,

The moan of doves in immemorial elms,

And murmuring of innumerable bees. ————— (Princess, VII).

の如きなりくにうるはし、殊に第二に引けるものゝ如きは、音樂的の口調にも秀でたるものあり、聲調の美はしきは此の詩人の卓れて長せし所にして、格調の整正して言辭の排列の巧きは、實に一奇觀あり、技術の秘密は人格の秘密、ドレーン博士はテニンンの此の巧妙を評して、*Curiosa felicitas, — a curious or wonderful good fortune in choices of speech. 又激賞せり、又*

The broad embrasial aisles of lofty lime

の如き其音樂的なる前者に譲らざ
Made noise with bees and breeze from end to end. ————— (Princess: Prologue).

プリンセスの一篇は優に詩人をして完美の域に達せしめんと雖も、後に著はれしアイディルス、オブ、ゼ、キングの一篇は實に詩人をして千古に活かしむるもの也、アイディルス、オブ、ゼ、キングは、エーニッド、ビッサン、エレーン、ギエチヅヒール等の叙事詩を包捨せる總名にして、アリスリアン、サイクルなる名の下にある、アール王の古譚を歌ひ一部分なり、アリスリアン、サイクルの中には尙ホーロー、グレルルあり、或はアール王の來去を詠せるあり、前者は一八五九年に、後者は一八六九年に出版せらる、此のサイクルの全く終を告げしは一八七二年、ラスト、トルナメントト一篇と、ガレス及びリチットにて完成せしものにして、實にミルトンに失樂園以來第一の叙事詩にして詩人が最大傑作あり、ダルグライシニ博士評して曰く

The fine polish and sweetly varied music of the blank verse in which the poem are written show Tennyson to be a master of that noblest form of English metre.

格調の秀で、麗はしきはもとより、詩人心裡の理想、道念、人生觀悉く此中にあはる、殊に其時代は所謂『鳶と鳥との戦争』の頃、マコーレーが二つの眞理の時代が一つの小説的時代を挾むといひける時にして、羅馬の政威衰へてアングロ、サクソン族が瀕りに英國へ侵入し、ホルサ、ポルチゲル一輩は其威を逞ふせる昔なり、是れ既にエビックを畫くに好箇の時代をなすや、而して、篇中の主人公アール王の如きは其存在せしや否やはもとより明ならず、只吾人は歴史上アール

サルある名の二三の英雄を知ると雖も、是れ眞に實在せしものなりや疑はし、マコーレー氏の如きは其英國史中に述べて

But Hengist and Horsa, Vortigen and Rowena, Arthur and Mordred, are mythical Persons whose adventurer must be classed with those of Hercules and Romulus.

とさへ明言せり、かくれ如くレゼンダリー、エーデレ偉人は皆アーサーの如く朦朧に傳はるは常のことあり、又吾人は詩に於て其明のふらざるを悦ぶ、且つ詩人の無窮に生くる所以は決して史的眞理にあらず、精神的眞理にふれ憑依す、アーサーに關して只大切あるは、其影の如き名の周圍に、想像と期望との美はしき形、——遊狹、剛徳、尊嚴、克己、純潔等の理想を纏綿せるに在り、吾人の尙ぶは理想にあり、是れ社會道德の進歩に強大なる貢献を供ふるもの、士人の教育に非常なる影響を及ぼすものなれば也

一篇の梗概を述べれば、アーサーはブリトン王ウーサルの子と稱すれ共、其果して然るや否やは明のあらず、此世に出づるや瓢然として來り、法術師メルリンなるものによりて輔翼せられ、法劍エクスカリブルを湖水の中に獲て、之を以て天下を平定し、最も熱心なる基督信者として、アングロ、サクソンの異教徒を防ぎ、金甌の王國を建設せしが、アーサーの死に至るまでもと誓ひし、皇后ギヨネール一朝アーサー部下の勇士ランセロットと通じ、事顯はれて王のランセロットを致むるや、隙を窺ひて叛を謀りし王甥モードレッドは、サクソンの異教徒を味方に誘ひて謀逆の旗を翻へせり、王之を撃てモードレッドを殺せしも身亦重傷を負ふて死せり、されども其死する

や何處に去りしり又明のあらず、これ一篇の梗概あり、之を黙綴するに、色あせたる絹をまどひて殘酷なる夫の前に馬を驅れるエーニッド、愛らしく信實なるエレインの情人の置き去りし楯を眺むる、奸婦なるビアンビアンの老たるメルリンを呪ふ、又はアムテスベリーの尼院に煩悶してアーサーの足下にひね伏す皇后ギヨネールなど諸篇の趣味盈々たるものを以てし妙趣盡くる所を知らず、今篇毎にこゝに詳説するの暇あらず、心ある人々は自のら繙き見給ふべし、惟ふにアーサーの如き明主がランセロットの如き勇士を得、ラウンド、テール諸士に輔弼にあり、以て天下を一統し、殊に、絶世の美人ギヨネールの如きを皇后とし、忠實なる基督教徒として堅固に王國を立てしもの、是實に理想的境界に非ずや、されども金甌の如き此の王國は瓦解はランセロットと皇后とに初まり、王朝一代にして朝の烟と消え、ラウンド、テール須臾にして滅ぶるは是又人間の最弱点を示せるものに非ずして何ぞや、塵毫の罪業はよく百代の偉業を覆へず足るべく、髮漂の惡念は實に千古の明德を誤る、され思はざるべらざることにして人間の人間たる所以のもの又眞にこゝに存せずんばあらず、

アーサーの一代を通觀して先づ吾人の注意を喚起するは、詩人が基督傳てふ粉本をひらへしことあり、アーサーの出現、其事業、其行爲、其亡滅、何ぞ基督の生涯其もの、如く爾るや、基督は大工ジョンの子、アーサーはウーサルの子、而して基督は精靈によりて生るといふに對するアーサーの出現は如何に

And down the wave and in the flame was borne

A naked babe, and rode to Merlin's feet,
Who stoopt and caught the babe, and cried, 'The King!' — (The coming of Arthur)

ユーサル王嗣なくして死せし夕、メルリン波と火焔の中より嬰兒を拾へりといふ、基督教の此の教を疑ふ人の如く、其娘を懇望せられたるレオドグラン王も、王の爲めに其物語を語り、イーゲルンも共に初めは之を信せざりき、詩人はメルリンをしてトリプレットに語法を以て叫ばしむる

Rain, rain; and sun! a raindow in the sky!

A young man will be wiser by and by;

An old man's wit may wander ere he die.

Rain, rain, and sun! a randow on the lea!

And truth is this to me, and that to thee;

And truth or naked let it be,

Rain, sun, and rain! and the free blossom blows;

Sun, rain, and sun! and where is he who knows?

From the great deep he goes. ——— (The Coming of Arthur)

眞理は眞理、彼は大深より來り大深に去る、是れ基督教の信仰あり、又メルリンの師ブレースが言葉の

'And this same childe', he said,

Is he who seigns; nor could I part in peace?

の如きは是れ宛然たるシメオンの頌歌なり、シメオン幼なき耶穌を母マリアの手より抱きとりて、神を讃めていひけるは

Lord now listest thou thy servant depart in peace, according to thy word.

For mine eyes have seen thy salvation. ——— (Luke II. 29, 30.)

其他りくは如き例を擧げ來ればなかくは多く、煩はしければこゝにいはず、今の幕語の影いと臆ろにしてアムネスベリーに僧院、晝猶暗きところ、ランセロットを撃ちて歸り、王は不義の皇后の罪を許すが如きは、基督が辻婦の罪を許すと何等の異なる所を、反逆モードレッドは王の近親あり、奸奪ユダは基督の十二使徒たりき、モードレッドのサキソンの異教徒を誘ふてアーサルを攻むるは、ユダがバリサイの一派をして基督を捕へしむると何の異を所あらんや、ゲッセマテに祈禱、十字架上の苦悶はアーサルの死際に又之れ有り、其モードレッドを撃つや天候未曾有の奇變を呈せしは基督の死するに方りて世の暗黒とありと撰ぶ所なき也、殊に詩人はアーサーの勇士ベグイーザルと基督の愛弟ジョンに比し、彼をして王の死するまで其側に侍らしめ、ジョンが多島海の島影に、波巨巖を噛んで高懸の白玉を砕くを望み、冥想黙念黙思録を書きしが如く、彼をしてパッシング、オブ、アーサルを物語とめたり、而して基督の道々傳ふるや僅のに三年、アーサルは

And Arthur and his knighthood for a space

Were all one will.....

にして暫時の間に過ぎざる也、又基督は復活及び再現説は詩人に因て次れ如く示さる

he will not die,

But pass, again to come; and then or now

Utterly smite the heathen underfoot,

"Fill these and all men hail him for the King?"

故にアーサルの墓銘には *hie jacket Arthurus Rex quondam Rexque futurus* と刻し、其時の王たり、
未來の王たるアーサルなるものこゝに横はる、とありといふ、

テニソンの作に對して嚴酷なる批評を試むる一輩は、此のシベリー時代の作物を取て、其作物の
上に表はれたるナイト、貴女は、マロリー氏に因て現はされたるナイト、貴女に及がすと稱す、
しへらく、マロリー氏の描ける人物は眞に其時代の人の如く舉動言語す、然るにテニソンのそれ
は近代の英國紳士貴女の如き趣ありと、乞ふ少しく之を論ぜん、凡そ一邦土、一時代の國民的行
爲は理想とされるも、佛國にローランあり、西班牙にシッド、コムベートルあり、英にキング、
アーサルあり、ローランの歌、シッドの詩、中世時代の士氣を鼓舞し其國民的行爲の理想を満足せ
しめたるもの決して尠少に非ず、され共國民的行爲の理想は時代と推移し、時代に伴隨する國民
の性情慣習に従て變せざるべからず、蓋し國民的行爲をそれ自身は既に時代の性情慣習と推移すべ

ければ也、吾人にして今日ローランを見る、稍粗豪の感なき能はず、シッドの極端なる忠誠は今日
にして之を倣ふは無謀の擧に過ぎず、雖然これローラン、シッドの時代に於ては最も高尚なる理想
にして且つ欠くべからざるものたりや明かあり、時代は廻轉して今は常に昔に非ず、もし夫れ
ローラン、シッド後世の詩人に因て翻案改削以て今日に残るあれば、其バイタリチーは必ずや狭小
なる一時代にのみ限られざりしからん、テニソン英國古昔の古譯を拾取して之を新らしき思想を
以て婉曲なる聲調れ上に形現す、其人物の今日のもの、如きは必然に理に非ずや、是又其作物は
社會を影響する獨り今日に止まらず、必ず後代に及ぶ所以也、

テニソンが詩人として、殊に國民的詩人として優に成功の域に達し、十八九世紀雄偉の才を以て
簇出せし多くの詩人を綜合せし所以のもの、其思想の他に卓越せしによるはもとよりなりと雖も
又整正せる格調を以て、過激に走らず、因循に失せず、適度なる情緒、適度なる色彩、適度なる
樂調、迫らず急がざるの作、深く國民の性情に適合せしに因らざるばならず、夫れ英國の風土、
氣候、習俗、性情、宗教、政体に最もよく順適せる未だテニソンの作の如きも非ず、社會と人
生とを對して何等の謀叛的調子を歌はず、神を畏敬し、靈魂の存在を語り、尊嚴にして愛情深く、
詠ずるところ自然を以て始まり自然を以て終り、理想とする所は人生に解意と技藝の範圍に過ぎ
ず、之を繕けば心怡々として飽れ如く、口邊何となく微笑を呈するが如き感あくんばあらず、か
くの如き詩作の英國人民は嗜好に適する固より也、世界の嗜好に適する固より也、而も彼は多く
は英國詩人中最も英國的にして、其得意なるクラシック、及び宗教的問題に關せざる限りは彼の撰

びたる題目は概ね英國的題目也、セント、テレマック、セント、シメオンの如きクラシック併に宗教的題目に於てすら其表はされたる思想は英國的にして其景物も亦英國的也、レコレクシオン、オプ、ゼ、アラビアン、ナイトの如きすら其英國的なることアイデルス、オプ、ゼ、キングに譲らず且つ夫れテイソンのいへるが如くテニソンの詩は英國の習俗に順て、貴族的の優美豊富を歌ふこと多く概ね上流社會のことにある、故にテニソンは此点に於ては、近世二大國民的詩人の一なる佛のド、ミニョーの平民的口調に劣れりといはざるべからず、テニソン二三下層の悲歌困苦を歌ひしものかきに非ざれ共、未だ深遠なるものと稱すべからず、要するにテニソンの詩、其奇警斬新を以て秀てたるに非ず、高潔淡泊の思想、傲ふべからざる文字の精練を以て傑出したるものあり、世往々にして彼の詩を評して冷やかなりとするものあれ共、其冷やのあるは、寶石の光の如き冷やかさありき、金剛石瑪瑙の光の如き冷やうさありき、法劍キヌカリブルの柄を飾りしウリムの珠れ如き冷やうさなりき、實に彼と時代を同ふせる教育ある英米人にして一人として多少の感化を彼より蒙らざるはなかりしといふ、

世の詩學を論ずるもの、或は音調の舊則を全棄して形式的美に關しては何等の取捨を要せずといふものあり、或は之を否として詩歌の功績は感官的美に専らなりと斷ずるものあり、一は乾燥なる唯物論に屬し、他は幽妙なる審美學に屬す、蓋し此等二派の中間に立て之が牛耳をとるものは乃ちいはん、世は詩歌的なる詩歌を愛すと、何を然りとせず、音樂的且理想的なるものは測隱恐怖戀愛の情人心に觸發して生ずる愉快を傳へ、之を解くに無窮のグローリーを以てするは

是れ詩の最美なるもの也、我がくの如きものを稱して大詩人とおさん、大偉人とおさん、テニソンは大詩人なり、大偉人あり、其スタイルの美麗高尚あるは偉人なり、其大類同情の無邊なるは偉大あり、其當時の希望と恐怖とを解説するに眞理を以てせるは偉大なり、而して其更に大なるものは不朽の戀愛と基督教に信依すべき大反應を當時の人心に喚起したる喪心に存すべし、宜なり當時歐洲の諸大家一生を暗して之が研讀に従事すること沙翁ミルトンにも譲らざることをや、

老子管窺

月 聲 迂 人

一、老子の政治論 (續)

それ道は無より轉じて有となり、喜怒衰樂の萌に發して禮樂刑政の備に達す、其極りて反せず、化々として窮まるところなくんば、愈以て道を失うに至らん乎、これを譬ふるに、颯々の嬰兒漸く成育し、成育すると共に人偽これに伴生して、日々に繁延の度を高むるが如くからん乎、看よ三代の衰頹や、人情の變移や、日に滋く、月に甚し、其作さんと欲するに方りて、上の人天下と與にみな風靡す、これに於てり其衰や變や、勝て言ふ可からざるものあるに至る、苟もその作し不爲の動に方りて、遂に無名の撲を以て、これを鎮靜する夫れ庶幾乎、故に曰く、

道常無爲而無不爲、侯王若能守、萬物將自化、化而欲作、吾將鎮以無名之撲、無名之撲、亦將不欲、不欲以靜、天下將自正、

或學者、ふれを以て仁義を絶棄するものとなし、叫んで曰く、「老子槌提吾仁義、而小之也」と、然

れどもこれ未だ、老子の眞意を了せざるものにあらざるかき乎、老子更にこれに明解を與へて曰く、

民之饑、以其上食稅之多、是以饑、民之難治、以其上之有爲、是以難治、民之輕死、以其求生之厚、是以輕死、夫惟無以生爲有、是賢於貴生、

一夫の耕は、以て數口を糊するに足るときは、奚んぞ飢餓に至らん哉、その飢饉に至るものは、上の食稅の多きを以てにあらず耶、庶民は織りて衣、耕して食ふ、自富、自撲、自化、自正して飢へず、餓せざるに於ては何りあらん、こゝを以て、老子以爲く太古醇樸の世や、聖賢無爲好靜、无事無欲にして國治り民安んず、星霜こゝに重り、世は澆淳に赴くに當りて、人情浮薄、學問巧利、益々本然を遠かるに至れり、これに於てか、一躍太古の聖世に復し、自然の生命に安んずるにありと、老子は堯舜の聖治を羨望しぬ、

以正治國、以奇用兵、以无事取天下、吾何以知其然哉、以此、夫天下多忌諱、而民彌貧、人多利器、國家滋昏、民多技巧、奇物滋起、法令滋彰、盜賊多有、故聖人云、我無爲而民自化、我好靜而民自正、我無事而民自富、我無欲而民自撲、

天地の大、世俗みれを見て眩惑す、而してこれを知らず、蓋し福は禍に倚り、禍は福に隱匿す、これを譬んか、老辨生死は相繼ぐが如し、未だ始より止まることあらず、而して迷ふ者は知らず、それ惟だ聖人萬物の表に出で、其終始を攪り、其大全を得、而して其小を遺つ、これを察視し閔々として明なるとあるなきが如くにして、其民醇々として各其性を全ふす、

其性悶々、其民醇々、其政察々、其民缺々、禍兮福所倚、福兮禍所伏、孰知其極、其無正邪正復爲奇、善復爲妖民之迷、其日固已久矣、是以聖人方面不割、廉而不肆、直而不肆、光而不耀、

君子の道に於ける、以て心を割かざるべからず、心割て而してあまり無く、萬變前に陳すと雖ども、わが静を撓すに足らず、夫れ何をか施して畏れん哉、

使我介然有知、行於大道、唯施是畏、大道甚夷而民好徑、朝甚除、田甚蕪、倉甚虛、服文采、帶利劍、厭飲食、資財有余、是謂盜誇、非道哉、

又曰く、爲學日益、爲道日損、損之又損、以無於無爲、無爲而無不爲矣、故取天下者、常以無事、及其有事、不足以取天下、

失道而後德、失德而後仁、失仁而後義、失義而後禮、失禮者忠信之薄而亂之首也、前識者、道之華而愚之始、是以大丈夫處其厚、不居其薄處其實、不居其華、

又曰く大道廢有仁義、慧智出有大僞、六親不和有孝慈、國家昏亂有忠臣、

あ、それ、老聃自然を以て道と論ずるや此の如し、それ天下の政に於ける、因應無爲の理に遵て唯一の原則とあらずや此の如し、周末の文弊、虛文縹亂、紛紜の日々に滋きを慨してこれが更張改革の意ある、また此の如し、

昔之得一者、天得一以清、地得一以寧、神得一以靈、谷得一以盈、萬物得一以生、王侯得一以天下貞、其致之一也、天無以清得恐裂、地以寧得恐發、神無以靈得恐歇、谷無以盈得恐竭、

萬物無以生得恐滅、侯王無以爲真而貴高、得恐蹶、故貴以賤爲本、高以下爲基、是以侯王自稱孤寡不穀、此其以賤爲本邪非乎、故臺數車無車、不欲瑋々如玉、落落如石、

これ聖人無爲な以て、人民を統治するに於ては、人民も亦無欲にして天下長へに治平あり、然るに知者小慧を弄し、却りて天下を擾亂す、嗚呼、治世の訣はそれ無爲にある乎、

按するに、戰國時代に於ける政治的思想は、今日の如く道徳を分離したるものにあらず、政教混淆にして政治の功化は、全く道徳の應用に外ならざるものとあり、道徳脩ふれば民は治むべからずと、然れども固く個人と團體とは同一のものにあらず、故に治むるに亦法ありて存す、決して脩身と政治と混同すべきにあらず、蓋し此点に於て老子は、少く脩身と政治との分類してこれを論述せり

善建者不拔、善抱者不脫、子孫以祭祀不輟、脩之身其德乃真、脩之家、其德乃余、脩之郷、其德乃長、脩之國、其德乃豊、脩之天下、其德乃普、故以身觀身、以家觀家、以郷觀郷、以國觀國、以天下觀天下、吾何以知天下之然哉、以此、

要するに老子の政治とは、社會的の道徳(?)を意味するに外ならず、よの故に老子は唯だ、君主若くは宰相たるもの、人民を治めんとする心術如何を論じたるものにして、其他は彼の論する所にあらずき、而して孔子は古來より存せる政治上に自家の哲理を應用し、吾主はよろしく實体に合一し、一氣の徳を守り、學問政法に頼らず、民として自然に化せしめざるべからざるものなり、

老子身衰周に生れ、勝文浮質の弊に堪へず、遙に上代淳朴の風を理想して、自ら懷を遣り、戰國紛争の際、悠然として時流の表に聳立し、褐を被り、王を抱いて懷抱を上代に托し、遺生を太古に寄するもの、其襟胸の清曠蕭遠なる、吾人をして欽慕に堪へざらしむるものあり、有名なる道徳經第八十章は、老子が理想的國家として見るべきものあり、

小國寡民、使有什伯人之器而不用、使民重死而不遠徙、雖有舟輿、無所乘之、雖有甲兵、無所陳之、使民復結繩而用之、甘其食、美其服、安其居、樂其俗、隣國相望、雞狗之聲相聞、民至老死不相往來、

われ思ふ、秦皇の六國を平定し、天下を統一するや、詩書を罷め、禮樂を廢し、法律を嚴にして學士の口を鉗し、農桑種樹の業を勵し、游子の徒を禁むるの政略を執りしは、そもくこゝに、胚胎せるにあらざるなき乎、

民不畏死、奈何以死懼之、若使民常畏死、而爲奇者、吾得執而殺之、孰敢、常有司殺者殺、夫代司殺者殺、是謂代大匠斲、夫代大匠斲者、希有不傷手矣、

これ天下を治むるものは、殺を尙ふべからざるを誠めたるものにして、かの秦皇の天下を一にし、更張改革の擧を爲せしは、則ち善かりと雖も、徒に其跡を革めて其心を革めず、峻法苛征、天下を毒するもの甚だし、多かれ其二世にして亡ぶる所以ならず耶、

これを要するに、老子の政治論たるや、其哲理より脱化し來れる道徳説と同しく、無欲無爲の純二簡潔を以て自然の功化に放任するに外ならず、故に政治は先づ無爲自然を要す、これを以て治

者自然あれバ、被治者自然に清淨あり、而して老子は從來支那政治思想の如く、獨裁君主政治を尙びたるもれかり、而して老子は其主權を説くや、敢て異説を立てず、天より命ぜられたる有徳の人を以て元首となせり、即ち有徳にあふざれば、其主權を夫ふことを説きぬ、故に曰く「道大、天大、地大、王亦大、域中有四大、而王處一焉」と、これを以て老子の君主とは、有徳の人にして其主權は徳の有無に由て得喪するものあり、

費以賤爲本、高以下爲基、是以侯王自謂孤寡不穀、此其以賤爲本耶、非乎、この故に、君主其主權を失はざらんと欲せば、よろしく徳を蓄へ、卑きに就き、敢て人爲に走らず、無爲自然なるにあり、老聃政を論するや深遠廣大、非才奚んぞ夫れ窺ふを得んや、たゞ聊う卑見を述べ謹て大方君子の教示を仰がんのみ、乞ふ進んで老聃が倫理觀の卓見を窺はん、

(未完)

雜 錄

俚 諺 雜 話 二

紫

影

諺語を類別するに、種々の方法あり或は主觀的に其内容如何によるもの、或は客觀的に其外形によりて、いろは別又は文主別によるもの等、孰れも一得一失にして、此等の方法を併せ用ふるにあらざれば、到底完全なる索引法を得ざるべし。此等既に行はれたる方法以外に、修辭上より

類別せんも、亦多少の興味あきにあらず、俚諺は概して其形體短小あれども、修辭の方法を巧に應用せるもの頗多く、諺をのみ引例として、一部の修辭書を作らんも、さまで難事ならざるべし。今記憶中より、其著しき例を、少しく列擧すべし。

諺は一種の警句なり、演説家文章家がこの助によりて、語短くして意長く、能く人の肺肝に浸漸せしむるを得るは、一に之が賜なり。されば俚諺が修辭家の所謂警句 (Epigram) に富むは、固より言ふを待たず、論語よみの論語知らず、論より證據、油斷大敵、小利大損、樂は苦の種の如き、日本語のあらん限りは、永く人口に膾炙して、忘れざるべきなり。

比喻と諺との分界は、極めて曖昧あれども、通常諺と稱する者の中には、比喻あるが多し。明喻 (Simile) の形をさせるは、偷言汗の如し、童に花もたせたる如し、鶯に油揚をさふはれたる如し、海鼠を糞でくゝるが如し、闇魔が塩辛嘗めたる如し、猫が糞を隠したやうななどあり。暗喻 (Metaphor) に屬するは、猫に小判、犬に錢、奈良の大佛に糞兒、鬼に金棒、虎に翼、立板に水、糠に釘、豆腐に鎧、提灯に釣鐘、大海の一滴、九牛の一毛、犬と猿、雉子と鷹、雪と炭、(或は墨の意かりや明のなはず)、寐耳に水、足下から鳥等の如き、殆ど唇を更ふるも邊なからんとす。

暗諺 (Irony) に屬するものは、比較的僅少あり、御無理御尤、いりにも章魚にも足が八本、なるほどちぎる秋茄子、結構毛だらけ猫灰だらけ等、寧ろ一種の地口と稱すべきもれ、み。誇張 (Hyperbole) には、三日乞食すれば一生忘れぬ、雀百まで踊忘れぬ、三人よれば苦界、千丈の堤も蟻の穴、百日の説法屁一つ、思ふ念力岩をも通す、一匹狂へば千匹れ馬も狂ふ、七夜れ中の風は一生つく、

かど頗多し。對照 (Antithesis) を用ひたるは、數奇は身を通す辛子は鼻を通す、太さには吞まれよ長さには卷のれよ、饑鬼も人數枯木も山のさざり、善は急げ悪はのべよ、貧の盜戀の歌、大海は塵と擇ばず名人は人を毀らさず、慈悲は上より下る禍は下より起る、都は目はづかし田舎は口はづのし、腐つても鯛ちぎれても錦、菩薩實がいればうつむく人間身がいればあほのく、はゆる山は山口のら見ゆる尊い寺は門のら見ゆる、昔の因果は皿のはた廻る今の因果は針のさき廻る、馬には乗つて見よ人には添うて見よ、唐土の虎は毛を惜む日本の武士は名を惜む、旅は道連世はあさげ、天人の五衰人間の八苦、人は一代名は末代、好事門をいはず悪事千里を走る等、星れ恐くくバ俚諺中其最も類多き者あふんる、但し此等は或は獨立して用ひられ、或は同様の意義を含む者三四を結合して用ひ、離合常ならず、集散時に隨ふを以て、其形體を一定する能はず、例へば侍の子は鐘の音に目をさます、商人は子は十露盤の音に目をさます、乞食の子は茶碗の音に目をさます、九重の塔高しと申せども燕が飛べば下にあり、劍の刃はやきとて岩の角をば削らぬもの、竹の林高きとて初利天へはのぞらぬもの、金持金をつうはず、鎗持鎗をつかはさず、辨當持さきに食はずの如き、伸縮は臨機應變にして、運用の妙は一に其人に在り。

人化 (Personification) の體をなすものは、笑ふ門には福來る、目屎鼻屎を晒ふ、悪事千里を走る、團栗の脊くらへ、夜寒郎麥好ヨサヲツムキヨシ(夜分の寒氣は麥の生育に好しとの意)うたぬの瘡うらやみ、花は根にかへるの如き、其例多しといふべからず、禽獸蟲魚等の有形物を人化したるは、則これあり、無形の事物殊に心的作用を人化したるは殆ど無しといふも可あふん。上掲は類例中に求むも、惡

事千里の如きは歸化的俗諺にして、本邦固有の者にあらず、福來るといふも、春去り夏來るといふが如く、僅に人化の形をさせるに過ぎず、戀病等二三の例外は歌文章の中にもあれども、概して心的作用を人化すること西洋諸國の如く、精細巧妙ならず、且頗其例に乏しきは、國語の性質然らしめしか、邦人の哲學的思想缺乏せるに由るか、將た二者相待ちて其原因を考へらう。

いはれ 因縁

三

諸

橙ゆづり葉は、親子代々相ゆづりて、家門長久あるべき縁起、裏白はうらに根城を構へて抹しきれ堅固あるべきいはれどもや。その外纏搗栗小殿原、鬼のこはがる節分の豆、お多福の酔ふ上己の白酒、凡そは四季をりくくの祝の物、いづれのいはれのあふざりける。ひとり時節の祝儀のみかは、おしなべては名所古跡、案内のおぢが語るを聞けば、いつも弘法行基菩薩、下りては西行義經、武藏坊辨慶なふぬは稀なり。これはそれよりは遙かのむかし、昔々の我らの先祖が、日常見聞の物事につけて、思ひつゝあつつけたるいはれ因縁ふるきを温ねて新らしく、年々はじめに書き集むる事件の如し。

海鼠の口のさけたる因縁

ちはやぶる神代のむかし、天宇受賣命、天の八衢に立ちて、日子番能邇々ヒコホシニニ藝命ギノミコトと迎へ奉りし猿田毘古神をたくりて阿邪訶の海にいたり、既に還らむとて、あらゆる大魚も小魚どもを召し集めて問うて曰く、汝々天つ神の御子に仕へ奉らむやと。諸の魚どもいづれも畏りて了承する中に、

海鼠ばかりは持ちまへのぬらりくふりと、何の御返事も申さざりければ、宇受賣命はたと怒らせ給ひ、海鼠の頸すぢむづとつらみ、刀をぬきもちてこの口や答へせぬ口と宣ふまゝに、づぶくど口を拆き切り給へり。今の世に至るまで海鼠の口のさけたるいはれ、因縁のくど知られたり、

人間の短命ある因縁

天孫適々藝命、吾田の笠挾の岬に都し給へり頃、海邊を漫步し給ひしに、浪れ花散る美しくき濱のほとりに八尋殿をたて、ゆらぐ手玉れ音もゆるしく、機織る二人の少女あり。勝れて美しくき一人に向ひて、汝は誰が娘ぞと問ひ給ふに、妾は大山祇神の子木花開邪姫、又これなるは妾が姉警長媛にて候と答へ申すに、やがて大山祇神を召して、汝が娘の殊に心に叶ひたるに、后妃に備へばやと思ふは如何にと仰せあり、父の神大に喜び、二人の娘をつくるひたて、百味の飲食を捧げさせて、送り入れ奉るに、命つくくと姉妹を見くらべ給へば、妹の近まさりするに引うへて、姉の顔のたちの醜さは、げに花のかたはらの深山木か、鯛のうたはらの河豚にも劣れば、恐ろしさに手も觸れ給ず、妹をのみ留めて御いつくしみ限りなく、姉はその儘に追ひうへし給ひければ、警長媛は瞋恚に心のかき所もなく、妾をつれなく棄て給へば、妹の生み奉る天存の御子は勿論、未來永々世に生れと生るゝ人種は、皆木の花のうつろひ易く、命を縮めてやはかくべきと、詛ひの末の今にたゝりて、人の壽命の長りぬこそ、何はう恐ろしき嫉妬のとべしりにはありけれ、

箕虫は鬼の子

鬼神に横道なく、鬼の目にも涙あれば、夫婦の契りも深うりけるにや、女房の鬼神身ごもりて、やがて月満ち生みかどしたるは、似もつらぬ小き虫ありけり。さるを鬼の子なれば、うたちこそ斯くてあれ、恐ろしき心やあらむとて、ありあふやれ箕ひき着せて、今秋風吹かんをりにあへり來ん、それまで待てよと賺しかきて、父の鬼にげて去にけり。子は箕のうちながら、風の音を聞き知りて、八九月の頃にもなれば、年毎にちよちよと慕ひ鳴けど、父はいづくに陰れたるに、今にたち歸りし沙汰を聞かず。

あすからう

羅漢柏は檜の類なり、自ら檜を氣取りて得々然たり。友だちの木問うて曰く、君はいつか眞の檜にからむ。對へて曰く、明日なふうと。されど明日にありても、明後日にありても、檜になりたる沙汰はなく、相變ふずのまがひ物に、明日は檜あすならうと木仲間にも嘲られて、うき名を今に流しけりこそ。

富士と筑波

昔祖神^{ミコヤノカミ}國々をめぐりて駿河の富士嶽に到り給ひけるに、折ふし日の暮れかゝりたれば、一夜の宿を請ひ給ふに、富士の神今日は生憎新嘗の祭りにて、家内一同嚴重の物忌みあれば、今日一日は御宿の儀平に御免を蒙るべしと、平こそわりにことわかれて、祖神怒りに堪へず、などへ物忌みなればとて、親を宿さぬ事はある、よし／＼それ儀ならばせん様あり、汝が住めるこの山は、未來永劫夏も冬も、雪や氷にとぢられて、人も登らざる食物にも事かく様にしてくれむと、罵り／＼

立去り給ひけるが、やがて筑波山に登りてまた宿を請ひ給ふに、筑波の神心よくうけひきて、今夜は新嘗の祭りなれど、仰せに隨はざらんやとて、心の限りもてなし奉れば、祖神喜びに堪へずして謠ひ給はく、

うつくしきかも吾がすゑ たりさうも神つ宮 天地とひとしく

月日とをなドク 人々つとひよろよび をし物ゆたりに

代々たゆる事なく 日々に彌榮えて 千とせよろづ世

樂みきはまらじ

ふれより、富士の山は雪常にふり敷きて、人もえ登らねども、筑波は人常に往き集ひて、歌ひつ舞ひつ飲食ひする事、幾世を経ても絶えざりけり。

きつね

磯城島の金刺の宮に天下知らしめす天國押開廣庭の天皇と申すは人皇三十一代欽明天皇の御事なり。この帝の時、美濃國大野郡の何がし、路に美人に遇ひ、伴ひ歸り妻として、睦しく月日をおくる程に、やがて子をも設けぬ。然るにこの家の飼犬、常にその妻を見ては吠ひりるを、妻いたく恐れて、打殺してよと夫をせがめど、流石に殺しぬてさてあるうちに、三月の頃稻舂く女どもに物食はせむとて、この妻の確屋に入るを見つけて、例の犬とびかゝる。驚きあわて、忽ち狐の姿をあらはし、籬の上にとび上りたるを、夫の見て、人畜の別こそあれ、子までなしたる中なれば、我は汝をえ忘れじ。夜毎に來つゝ寐よのしとかさくどさければ、この後も夜々來通ひけり。

り、これよりこの獸をまつねといひ、又その子をも岐都禰といひて、極めたる多方にして疾く走る事鳥の如く、即ち美濃の狐直の祖なりとす。狐につまゝれた様などは、これらの物語といふにやあはむ。

男山の女郎花は、小野頼風が妻の後身にて、武文蟹、平家蟹は、秦。武文、平家の一門の生れはり、郭公は鶯のまゝ子、比目魚は親を睨みし不孝者のかれのはて、つくく、がうしは筑紫の旅人の亡魂にて、今も筑紫戀しと鳴くとうや。信天翁に藤九郎の名あり、水すまゝを館屋のお勝と呼ぶは、如何なるいはれ因縁にや。

紅葉に就て

市村 教授講演

秋季到る所の山野に於て草木一般に或は紅葉し或は黄葉し美觀以て吾人の目を喜ばしむ、是れ果して如何なる原因なるかは之れを見るもの、腦裡に浮ぶべき一問題たるや必せり、諸子は先づ臆せざるべからず然り吾人を樂ましむるの美觀は却て植物にありては最も悲むべき境遇に於て出現するものなるを、蓋し冬季は植物は休眠時期なり故に常緑樹の外は落葉を免がれず、この不利益ある外界の變化就中温と光との變化に先ちて綠色なる葉緑素は分解し始め終に黄紅等の色素を化出するものと要言し得べし。斯る現象は殊に植物の一個体の生存中數回開花結實するもの所謂ポリカルペン、ゲウケクゼに於て其多きを見る、之れを例證せればのへで、もみぢ、めぐすり

のき、うりはたのへで、どうだんつゝト、うるし、なゝのまど、まゆみ、やまぶどう、にーきい、やまうるし、つたうるし、ぬるでの如きは紅色となり、みつでのへで、ひとつばのへで、ちどり、のき、いたやうへで、まんさく、いてう、あばの如きは通常黄色を呈す。今試に彼の一年草なる一葉紅を見よアマラン、ストリコロルある名の如く一葉片にして能く紅黄緑比數色を供ふるも亦彼の葉緑素の變化順序を示すものに外ならず、而して此者の紅なるは花瓣果實等の紅なるも其色素を同くせり。元來葉緑素は黄色綠色の二色素より成立せるものにて黄葉は就中綠色素の更に分解して黄色素を増加するに歸すべく、紅葉は就中綠色素の紅色素に變化するに歸すべきなり、夫れ斯の如く分解變化を起さしむるフアクトル比如何及び或植物に限り特に顯甚にして且つ春期の初葉も紅葉するが如きは果して何故あるかは吾人の大に研究すべき要あり。茲に此等の現象に就て數多の研究家の斷定を序述すれば大略左の如し、

プリンツェツプス氏は葉の黄色を呈するに至るは之れ葉緑素の酸化する故なりと云へり、
ハーフオンモール氏は紅葉するには植物は底温度と強き日光とを要すといへり、

ミカヘル氏は葉に紅色素をアントキアンなりといへり、アントキアンとは花瓣海藻にも播布する紅色素なり、
ビーガン、タラウス、クッチャル、ピッカー氏などは單寧と色素とは密接なる關係ありと云へり、

エンゲルマン氏は植物の同化作用は色素分解の一部分の働なりといへり、
ケルネル氏は赤き色素は多少光の強度を弱むるが故に植物は紅葉して、日光の過度に影響を避け

んとする傾あるのみならず色素の作るゝと共に營養の働を増し同化作用をも早むと云へり。

抑も澱粉と砂糖とは關係は親密なるものにしてバイエル氏に由れば二酸化灰素と水素とを二原子にて一種のホルマルデヒド ($\text{CO} + \text{H}_2 = \text{CH}_2\text{O}$) を作りレーブ氏に由れば更に進でホルモーゼとなり ($6\text{CH}_2\text{O} = \text{C}_6\text{H}_{12}\text{O}_6$) 葡萄糖澱粉を化生すと、即ち $\text{C}_6\text{H}_{12}\text{O}_6$ より一分子の水を除けば澱粉となるものにして此化學的抱合、分解作用は生体において逆行をも絶へず見るところあり、平言すれば植物の葉に存在する澱粉に水の加はる時は砂糖に化し之れに伴ふて其紅葉を見るの理あり、而して植物にありては澱粉其儘の有様にては發芽すると能はず必ずや發芽の際には先づ砂糖に變ず、彼のじゃがたらいもの幼芽の出る頃殊に甘味あるに就ても其例證を知得すべし。同様に秋季紅葉に際しても亦砂糖の關係ありリンドフォルツ氏は常綠樹即ち針葉樹の如きも冬期は其葉片に於て澱粉を多くして砂糖のみなりといへり、故に概して發芽期落葉期共に葉片の紅色を呈するは之れ砂糖の多きに依ると云はざるべからず。

瑞西大學教授エ、オバルトン氏は植物の滲透作用の實驗をさせる際適二〇%の甘蔗糖溶液中に水草の一種とちのいみを入れ置たりしに、時恰も五月頃なるにも係らず葉片の日を逐て紅色を呈するを見たり。茲に於て氏は方向を轉じて、砂糖と細胞の紅色を呈するとこれ關係、光線の植物紅葉に對する作用、四季及植物發達に關係なく温度は紅葉に影響を與ふるや否や、の三問題に就て二三の實驗をかせり即ち赤浮草、えびも、さゝも、かぶを試しに悉く失敗したり。幸なる哉氏は所要を帯びてアルプス地方に旅せしに九月の末頃なりしを以て行々草木の紅葉せるに會り、日

光の多き所は紅葉多く日光の陰かる所は多く黄色を帯べるに着眼し光と温度とも亦葉の變色は原因あるを觀察し、歸場早々とちういみを取り十六乃至二十二度の温度の下に二〇%の甘蔗糖中に浸したるに、通常淡水中に浸したるものは依然綠色あるにも係らず是のものは四日にして紅色を呈したり、之れを暗室に試みしに此現象を見ざりき因て大に日光の關係ある事をも確めたり。次に甘蔗糖二分の一〇%中に浸して十六乃至二十度の温度にてよく六日間にして紅色を呈せり、尙葡萄酒、果實糖二〇%に就て之れを試しに數日を出ずして悉く紅葉したり、之れを乳酸、グリッリンなどを以て試しに結果不良にして結核一種の病的となり終れり。其外硝石、食鹽、エステル鹽類等の溶液を以て種々の實驗をせしむ葡萄酒、甘蔗糖、果實糖の如き好成績を見ざりき。其他種々の實驗に依て悉く好結果を得しも浮草には失敗したりき、蓋し該草は單寧酸に乏しきものなり、茲に於て種々の例證の元に單寧酸を含有せざるものは紅葉せずといふ考を起し單寧を含有する水萍、たぬきも、むつなも、ひい、ふさも、さんぎよもかきと試たるに皆好成績を得たり。再び之れを陸生植物就中百合の一種に就て試しに總て好果を得たり。其他アルコールの二〇%にて試たるに忽ち紅色を呈せしとありたり、氏は之れに刺撃の爲麻酔を勸起し砂糖の澱粉に化する機能を失はしめたるに外なふ事といふ説明を下せり、キートン及アミルアルコールを用ひても同様ある結果を得たり、其他いぼた、あはばな、野ぶどう、木通などを砂糖類に試みて悉く好成績を得たり。以上述べ來りたるが如くオバルトンは種々此實驗を試み畢竟發芽、落葉の際紅葉するに就て次の四ヶ條を結論せり。

- 一、春季温度の昇るに従ひ常緑細胞液は砂糖は次第に稀薄となり同時に其一部分は澱粉を作る、其結果として葉の細胞より紅色は色素は次第に減少して遂に消滅するに至る。
 - 二、數多の植物の幼芽は初は紅色を呈すれども葉綠素の續生して其最大の濃度に達し其威力を逞くすれば漸次紅色素を失ふるに至る。
 - 三、されど發芽の際紅葉するいぬふか、はしばみ等の變種が落葉するに當り、日光を受け易き所の總ての葉は殆んど同一度の深紅色を有し、漸次葉綠素は發達に伴ふて紅色を減ずれども、日光に陰なる所の枝にあるもの即ち同化作用の活潑なる能はざるものは其時既に紅色素は殆んど消滅して綠色を呈す、
 - 四、ちういみ、たぬきも等を稀薄なる砂糖溶液中に生長せしむれば紅色に變ずるには非常に長時間を要す、而して濃液に置けるものよりも紅色とあるの度弱く若うも一定時間後には其紅色の度は依然として増加せず。
- 畢竟植物の發芽、落葉に於ける紅葉はオバルトンの實驗に於ても之れを見るが如く、砂糖と色素との關係、日光の關係、温度の關係の三大要素に因するのみ。以上演來りたる外尙補欠訂正を要する所少しとせず、されど時刻に制限ある講演なれば止むを得ず茲に之れを略す。

漢文の應用

村上 教授講演

本題は甚だ漠然たるも先づ漢文の全体の應用を話し其後追々一部分に付て話さんと思ふ、而して單に漢文の應用といふも國文の應用に付ても話と爲さざる可らざることあり、元來各學校に於て漢文を用る理由は博く文學を覺えさせ共普通作文の助と爲すにあり其他倫理にも幾分り關係ありて其應用は種々なるが故に、勢國文にも及ぶざる可らず、然し予は國文家にあらざるを以て唯國文の漢文に關係する事丈に説及せずし漢文の應用を論ずるに先もて凡そ漢文の文体は幾に分れ其文体は如何なる書よりいで且つ今日に至るまで如何に變遷し來りしかを第一に話さる可らず元來我國は往昔文學文章なかりしにより古來漢文を用ひ、其漢文の變遷よりして國文ある者生じたるなり、而して文体は大別すれば詔勅體、上疏體、書翰體、記傳體、論說體等あり詩は文の一体にて古へ詩經にては比賦興風雅頌の六義あれども今日は絶句、律、古詩の三体とあれり、且贊、銘、祭文等何れも一体を爲して數多あり蓋し體名は後に至りて名けたるもあれども何れも其基く所あり即ち周易、書經、詩經、春秋、禮記等の經書より生ず、尙之を分いへば論說、辭、序など其の體は周易より生じ詔勅、上疏等は書經より生じ賦、頌、銘等は詩經より生じ記傳、戰紀等は春秋より生じ祭文、箴規等は禮記より生ず、故に此等の書は道の依て起る所を知るのみにあらず文章の上にて自ら諸體の起る所が分るを以て漢文に心懸る人々は道の上斗りに非ず文章は諸體の上にて起る所あれば、通覽せざる可らず、此等の書に基きて起りたるものにして後世の模範とあるべき古文の純粹あるは左氏の富贍なる孟子の雄大ある莊子の奇怪なる屈原の婉曲ある荀子の峭深なる文は何れも六經に次て手本となるべきものにして此等の文は六經より基を發せしと雖も何れ

も特殊の文格を備へて一家をなせしもの也、西漢に到りては賈誼、董仲舒、司馬相如、揚雄等何れも大家と仰かれ各々特長を有すると雖も後世に至るまで其標準として措く能はざる者は左氏、莊子、屈原及び司馬遷の四家なりとす各家の文法は何れも其趣を異にせり左氏は故實を記して飾りたる立派あるものにて莊子は虚無を主として一種の道義の深き趣あり屈原は詩經の風雅頌を變じて離騷を作り司馬遷は春秋は編年體の歴史を變じて紀傳體の歴史を始む而して四家共に基く所は六經にありと雖も何れも一家の體をなして後世に模範となれり、故に支那に於て尤も文學は盛なりしと云ふ時代を擧れば左氏以下司馬遷の時代なり實に此四家は古文の純粹あるものとして擧げざる可らず其外枚乘、鄒陽等々出で、屈原の賦體の文を作る之を騷體と文といふ其作方は四字六字と字數を定めて詩の對句を並ぶる様に書くもこれにして其範圍を狭く定められたる故に六ヶ敷やうかれども書て見れば却て安きものあり一に之を四六文と稱し後世宋明以下の試験文は此騷體より起りたるものにて又八股體と稱す其作方は四字六字と書きて八段に截切す而して試験文のみならず後世に至りては詔勅及び政府より出る文章は大抵此體なり現今は四字句の綴りあり此體は書き安くもあり亦試験官も種々の古文をかゝれては其優劣を判定するに困るが故に試験文及官符は此體に一定せるものなり而してこの體に對して法を古文に取りたる者を散文或は散體と云ふ散體は騷體の如くに一定せず長短の句を相雜るが故に散文といふ枚乘以後東漢に至れば西漢に比しては文章も衰へたり尤も其中には班固の如き名家もあれども概して騷體の文章行れたり其後魏、晉、南北朝に至れば散體の古文を見る能はず文選にある如き騷體が盛んに行はれて古文即ち散文は跡

を絶てり彼の陶淵明の歸去來の賦は離騷より出て文の意、筆の用法共に高尚なるは當時第一と評さるも尙ほ駢体の舊窠を免れず孔明の出師の表は樂毅の燕の惠王に復するの書より出るも出藍の譽れあり斯等二三の文を除けば古文は次第に衰頽を極め唐に至りて韓退之古文を振起して八代の衰頽を挽回す退之の學は深く經史諸子を究め其文光焰萬丈殆ど孟子、司馬遷と並ばんとする勢あり之と同時に柳宗元出つ柳の文章は蒼勁俊偉にして自ら一機軸を出す古文にては退之と共に唐の文壇の宗師と仰がる宋に至り歐陽修起りて紀傳、上疏は退之に勝る文もありと云ふ次で蘇洵、蘇軾、蘇轍出て、古文を唱へ世に鳴り尤も論策に長ず蘇家の論策は賈誼の未だ言はざる所を發揮す又曾鞏王、安石出て古文の一家を爲す明の茅鹿門は韓退之以下王安石に至るまで唐宋八大家となりて其文集を撰て世に行はしむ今日一般に用ふる八大家集は沈德潛の撰あるが卷數も尠く便利なるを以て大に行るれども鹿門の八大家は先鞭を附せしを以て之に依て撰びたり扱て前述の如く文體は六經より起りて左氏以下司馬遷に至りて古文の格法は定まれり又唐宋の諸大家に到りて文章の諸體は全く備はる文章も機運に伴ふが故に秦漢の古文は根本なるが故に之に依らざる可らずといふも古き者斗り必ず善きことに限る可らず、故に吾人漢文を書かんとする者は、尤も唐宋比八大家等によりて文章の諸體及び格法を悟入せざる可らず漢文の諸體は定まりたるは唐宋の諸大家なるを以て漢文を學ぶ人は此等諸大家の文章を數多暗記せざる可らず、南宋に至れば文章稍衰へ徒らに經書の註釋杯に力を入れて古文としては大に價値を失ふ其中にて朱子の如き學術文章共に正大なれども文章は上より見れば韓、柳、歐、蘇に比ぶべくも非ず元に至り元好問、虞道園等あり古

文に功あれど其他は一般に纖弱に流る明に至りて聊か恢復せり即ち明れ初代には宋濂、劉基、方孝孺等古文を善くして文に活氣ありて纖弱の風を一洗す中葉に至り李東陽、李攀龍、王世貞等只務めて古文辭を剽竊して侍屏聲牙の文章を作るに至れり其後王守仁、王慎中、唐順之、歸有光等あり皆學富み才優にして宋、劉、方の三氏に繼て互に屹立せり清に至りては朱彝尊、方苞、袁枚等の作家に乏しからざるも概ね清の始の人れ文章を明の大家に比れば考證は過ぐる所あれど文の氣格は迫り及ばず併し吾々漢文に志す人は八家に次で明清の名家の文章を能く見ざる可らず是等の文章は精密ある筆の用法に至りては八家杯に見る能はざる特長あり是れ蓋し氣運然らしむる所あり故に吾人文章を學ぶには書方は八家に基づくも明清れ文章を精讀することを第一に心懸ざる可らず、總て六經以下の文の沿革を大別すれば大略三期に分つべし即ち左氏より司馬遷に至るまでを第一期とし唐宋を第二期とし明清を第三期とす、故に漢文を稽古せんと欲するもれば明清文より入らざる可らず、然るに現今支那の有様は國力の衰ふると共に其文章も衰へて誠に悲むべき景況ありとぞ、既に聞く所によれば一般に學者は試験の準備に吸々として駢體を作る事のみ從事し純粹れ古文を研究する者は非常に寂寞たりとぞ現今の有様迫り吾人の齒牙にかけて論ずるに足らざるあり、漢文の沿革は大略以上の如し

閏年の循環に就きて

北條 先生 講演

左の一篇は本校講話會に於て先生の講話せられたるものあり

一國には一國の曆法あり、之に依りて以て其歴史上の事實を繋ぎ、其推移沿革の次第を明瞭にす、而して往時は各國に於て其曆法を異にしたるが故に、相互に歴史上の事實の關係前後を知る爲めに一々各國の曆法に依り其時日を換算せざるべからざる不便あるを免かれず、若し歴史を討究するに當り曆法を疎外する時には或は推斷結論の上に大なる誤謬を生ずることもあらん、且社會の進歩するに従ひ世界の交通は日を逐ふて快速となり、商業上其他の目的の爲めに曆法を同一にする必要を促し、世界一般に太陽曆を採用するに至れり。此の太陽曆に二種あり、第一を Gregorian Calendar と名づけ、第二を Julian Calendar と名づく、兩者の差異は閏年の計算法を異にするにあり、現今に至りては第二の法は十二日間の誤謬を生し居れり、此曆法も到底廢絶に歸するに至らん。

露西亞及び希臘は現時猶此の舊太陽曆を用ひ、清國に於ては我國の所謂舊曆即ち太陰曆を用ふ、此等の諸國を除き世界の文明國の一般に採用するものは Gregorian Calendar にして露清二國も遂には此の曆法を用ふるに至らん。

去る明治三十一年五月十一日發布の勅令によりて閏年を次の如く定めらる、即ち 神武天皇即位紀元年數の四にて整除し得べき年は閏年とし、又此の數より六六〇を減し、其残り百を以て整除し得べき年の内猶其の商の四を以て整除し得べき年の外は之を平年とす。

閏年を設くる方法は右に依りて定まれり、六六〇年を減するは西曆紀元と同年數と爲さんが爲め

なり、若し六六〇を減せずして我國の紀元年數を以て同様の法を施すも些少も差支なしと雖ども然る時は百年間に四〇年と六〇年の二期に於て紀日の稱呼上或は西洋諸國と一致し或は一日の差を生ずるに至るが故に、其不便を除くんが爲めに斯くは定められたるならん。

一年の長さは古來計算せられたるもの多し、就中佛國の Le Verrier 氏の結果は最も多く人々の信する所あり、即ち一年は $365^{\text{日}} 5^{\text{時}} 48^{\text{分}} 46.09^{\text{秒}}$ なり、其他の計算に於ても唯秒位の小数に於て小差あるのみ、而して此れを日の長さを單位として記せば 365.242200 とあり此の計算は一日の百萬分の一迄正しきものあり。

今 242200 なる小数は殆ど一日の四分の一なるが故に三六五日を以て一年と定むれば、四年に一回の閏年を生ずるあり。

前記一日並びに一年の長さなるものは天文學上一定の意義を有す、即ち一年とは四季の一循環する間の長さなり、詳しく言へば、今年の春分(春分とは年の始めに於て地球の赤道と黃道との交る時を云ふ)より明年の春分迄の時間なり、之れを太陽年(Tropical year)と稱す、此の太陽年の長さは種々の原因により各年其長さを異にせり、其平均の値を取り之れを平均太陽年(Mean solar year)と稱す、本文に謂ふ所の一年とは即ち此の平均太陽年なり。

一日の長さとは晝間の長さに非ずして一晝夜の長さを謂ふ、即ち觀測者が引き續き二回南中する太陽を見る間隙の時間とす、此も亦各日其長さを異にし、其平均の値を取り之を平均太陽日(Mean solar day)と稱す、是を本文に謂ふ所の一日の意義と爲す。

今假りに一萬年間舊太陽曆法に依り四年に一度の閏年を作るとすれば、其日数は 3650000 日と、猶其間に 2500 の閏年あるを以て、2500 との和、即ち 3652500 日となる、然れども實際に於て一年の長さは 365.2422 日なるを以て、18 日の差を生ず、即ち一三〇年に一日の差を生ず、今 Caesar 曆即ち舊太陽曆の初めて用ひられたる時期を今を去ること二千年以前とすれば、今日に至りては十五日の誤差を生ぜざるべからず、露國は往昔より舊太陽曆を用ひ來り、其誤差は現今にては積りて十二日とあれり。

一七五二年に於て初めて英國は此の曆法を改めて今日の曆法となせり、即ち此の時代に於ては十一日の差を有せしを以て、九月二日の次日を直ちに九月十四日と爲し之が改正を終れり、此の改革を成せる天文學者は Bradley と云ふ人にして、當時の愚民等は (ブラドレー) は我等より十一日を盗み取れりとして氏の外出を待ちて亂暴を企てし奇談あり。

一五八二年に於て既に Gregory 法王は Caesar 曆の誤謬を正し、爲めに曆法を改正せり、是れ即ち Gregorian Calendar なり、其閏年の置き方は紀元年數の内さなる年を閏年とし、其内 100 なる年を平年とし、又 400 なる年は之を閏年とす、但し 400 は整数とす。

右の法を以て一萬年間繼續せしむれば、其閏年の數は

$$2500 - 100 + 25 = 2425$$

即ち二四二五年とある、故に一萬年の日數は 3652425 日となる、依りて一年の長さは 365.2425 日とある、故に其實際との差は

$$365.2425 - 365.2422 = 0.0003 \text{ となる。}$$

故に一萬年間に三日の差を生ず、三千三百餘年に一日の差を生ずるに至る。

故に「グレゴリー」法の外に四百にて除し得る年の内、四千にて整除し得べき年を又平年と定むれば、此の差として一層小あらしむることを得べし。

右の法を追加せんと云へる議ありと雖ども、其影響は多年の後に屬するものなるを以て未だ何國の政府にても其採用を發表するに至らざる。

以上は太陽曆の置閏法の説明なり、而して我が國も此の方法を採用せることを一昨年五月勅令を以て定められ、其結果として本年(紀元二五六〇年)は平年と爲すべきことを公示せられたるあり。猶其他に最も興味を有する理論的曆法あり。

今 0.242200 なる小數を連分數を以て表はせば、

$$0.242200 = \frac{1}{4 + \frac{1}{2 + \frac{1}{1 + \frac{1}{3 + \frac{1}{4 + \frac{1}{1}}}}}}$$

今 $N = \frac{1}{a_1 + \frac{1}{a_2 + \frac{1}{a_3 + \frac{1}{a_4 + \dots}}}}$

$$\frac{p_1 p_2 p_3 \dots p_n}{q_1 q_2 q_3 \dots q_n}$$

をより n 番迄の近似數とすれば、第九番の近似數の分母分子を計算する公式は

$$p_n = a_n p_{n-1} + p_{n-2},$$

而して $q_n = a_n q_{n-1} + q_{n-2}$ なり、
而して p_n が比較的大なる數なる時は

$\frac{q_{n-1}}{q_{n-2}}$ は比較的少き整数より成る分數を以て N の價を表はす近似數なり。

而して $N = \frac{p_{n-1}}{q_{n-1}} \sqrt{\frac{1}{q_{n-1} q_n}}$ (但し絶對値に於て)

今右の理を以て曆法に應用せんぞす、

此の年の小數の第一第二等の近似數は順次に

$$1 \quad 7 \quad 8 \quad 31 \quad 132$$
$$\frac{1}{4} \sqrt{\frac{1}{7 \cdot 29} \sqrt{\frac{1}{128 \cdot 545}}} \dots \dots \dots$$

故に此の小數に $1 \frac{1}{4}$ 、 $7 \frac{1}{29}$ 等は順次に近づくものなり、

今 $1 \frac{1}{4}$ を取れば、四年に一度の間を要し、 $7 \frac{1}{29}$ を取れば、二九年に七度の間を要す。

故に今數學的に曆法を作らんとすれば、右連分數の第五商四に一次先つ所の第四番の近似數を取り、之に依りて一二八年間に三一度の間年を作るを以て最もよしと爲す、即ち

$$128 = 32 \times 4 \quad 31 = 32 - 1$$

あるを以て、四年毎に一度の間日を設け、一二八年毎に一回を除けば可なり、即ち三二回目一度づゝ間を取らずと定むるなり、今其誤差を計算せんぞす。

$$\text{前理により} \quad 0.242200 - \frac{31}{128} \sqrt{\frac{1}{128 \times 545}} \sqrt{\frac{1}{70000}} \quad (\text{近似して})$$

即ち一日の七萬分の一より小なり、故に此の方法を以て曆日を立つれば、七萬年間持續するも一日の差を生ずることなし、大凡十萬年計りにして初めて一日の差を生ずるに至る、人類の曆史上に於て十萬年を續と云へば、是れを殆ど無窮と稱するも可なるべし、此の簡單なる置閏の方法にして、十萬年間も用ひて誤りなき者あり、是れを理論より生ずる方案と爲す。

特に驚くべきは此の理論的方案の或は往昔「ペルシャ」國に於て用ひられしに非るやと推量せらるる者あり、即ち昔時は三三年に八回の閏を取りしと云へり、故に此の方法を持續すれば、其差は $\frac{33 \times 128}{4224} = \frac{4224}{4224}$ あり、小なり故に四二二四年を経るも一日の差を生ぜず。

猶「ペルシャ」には此の三三年に八回を取る方法と、二九年に七回を取る方法とを混用せりと云へり、今若し第一の方法を一度用ひ、次に第二の方を三回連用し、斯くの如く循環せしむれば、一二八年に三一回の方法と同様の結果を生ずるものなり、果して其れ事實ありとせば、「ペルシャ」人は如何にして此の絶良の方法を發見したるか、驚嘆に勝へざるあり。古代東洋西南諸國の學術の進歩を測度すべき問頭の一資料として之を爰に附記す。

厭世雜觀 (承前)

撰

哉

彼等厭世家は、悶々として社會の暗黒に泣き、如何にもして浮世の塵を拂はんとせり。其途果して如何。「未だ眞の道を知らずとも、縁を離れて身を閑にし、事は預のららずして心を安くせん。」とは兼好法師が山に入りし時の道げ言なり。

萩の露玉にぬがんと折れば消ぬ、よし見ん人は技あがふ見よ。

滔々乎たる浮世者流、強て之を玉に貫かんとするも遂に能はざるあり。嗚呼人事一に茲に齟齬す。唯だ自然に遊て萬事の源泉たる意志を沒了し、身を以て自然に一任し、以て彼等の意を安ずるに足る乎。如斯にして彼等は、茲に清靜なる立脚地を得んとするに急にして、左視右盼遂に、まさのやも音だに立てぬ春雨の、靜にて世にふるよしもがな。

こゝも亦た浮世ありけり、よそながら思ひし儘の山里もがな。

之れ厭世家が責めてもの望あり。然も世は彼をして靜にふるを許さず。暴風濛雨空しく星光を消し去ふんとす。彼等は此に孤兒が乳房を探て泣くが如くに、此の浮世を脱して社會の雲の至らぬ清靜ある立脚地を覓めんとす。於之乎、半生の榮を擲ち、名を捨て戀を顧みず、超然として浮薄ある人事の至らざる境地に逍遙せんとなす。即ち山に入り谷に落ち、浮世の塵にまみれぬ細流に清靜なる神を滌かんとす。唯だ浮薄なる此の浮世以外に、而も現世に於ける新清靜なる立脚地を求めんとするあり。

しをりせで猶ほ山深く分け入らん、憂き事聞かぬ所ありやと。

嗚呼、之れ獨り西行のみあらんや。幾多厭世者流の心事、歌ひ盡して餘蘊あり。果して憂き事聞かぬ處はありや。山を超へ雲を分け、谷に入ることも一縷れ憂心忡々として、心靈界を去らざる以上は、影の形に従ふ如く、深山幽遠の谷神も、亦鹿の鳴く音を妨げず。而して茲にも鹿れ鳴く音に悲哀を觀せば、如何にして彼等は覓めんと欲する所の立脚地を覓めんと欲するや。

世を捨て、山に入る人由にても、猶ほうき時は何地ゆくらん。

宛然暗夜に燈火を探るが如く、只焦心の度を高むる而已。於之、飄然人生の問題に想到す、古來此の問題に對しては、印度人の如くに盛なるはあり。彼等は萬事に對して唯主觀的の觀察者にして、「エゴ」の認識に一生の勢力を傾注して惜まざりしあり。即ち彼の熱帶國の常として、幽陰なる不健全的思想は、直に病的となり、唯只管に現世にをける不安の念を救はんが爲めには、翻然として人世の解脱すべきを以て主説となすに至れり。即ち内向的思索を自由ならしめんとして、吸々し、遂に曰く、眞理を知るは眞理となるあり。と、以て自然に對する自己の疑問を解釋せんとせり。或は難行苦行に一世の鼻をして酸からしめ、以て考察を自由あらしめんとす。此の故に瑜伽派と云ひ、吠檀達派と云ひ、其の難行と考察との別はあれど、皆な人生の苦悶を脱して理想的自由の仙境に逍遙せんとするに非ざるはなし。而して彼等は、自ら外界に於て安心立命の地を得んとするの痴なるを知り、進んで内界に於て、自ら立命の信を作らんとするなり。此の故に、徒らに心靈をば外慾れ爲めに動のさず、却て其の心靈を自由にせんが爲めに苦慮なる處、宛然之れ新「プラトン」の套語あり。然りと雖も吾人は遂に、彼の宗教的自殺を意味するに至る事能はざるなり。要するに吾人は唯々、己を自覺し、以て其の使命に安ずるにあり。即ち満足は悟の要提なり。唯々吾人は達し得らるゝ限りの理想に於て満足するは、之れ其の要提を得たる者にして、安心の立脚地即ち茲に成るあり。而して、徒に運命の波に漂はされて、自己を埋葬し去るの愚をなす事なく、老子が所謂、「不見可欲使心不亂是以聖人之治虛其心實其腹弱其志強其骨」と宣哉。

俗人は察々として却てあすなく、彼獨り悶々として澹分海の如し。嗚呼、唯だ之れ心靈にある而已。路測の「カラシ」種は小ありと雖ども、遂に天の鳥來りて止まる程の大ある木とあるあり。一片の心靈ある者、誰の徒に悶死せんや。西國の詩宗も言へり、黒金の門にても、岩石の壁垣にて、遂に心を囚ふる獄屋ばうりは出來ざるべしと、實に心神は永久なり、自由あり、地球が慧星と衝突は、幸にも免るゝを得たりしも、聞ならく今後世界は五百年を経ずして酸素は尽きぬべしと、詮ずる所三界唯一心なり。何物も安き事なく、心ばかりぞ碎けても碎けず、死ずとも死せじ。永遠あり、霸絆なし、一点心靈の精確ある者存せんが、安心の地は例處にも得らるべし。外界の苦痛亦何物の、彼が心を苦め何物か焦心悶々たらしむる者あらんや。即ち世故の濁流に苦むよりは、より大なる寛度なかるべからず。然るに之を顧みず、人世を以て罪惡の府とあし、婆娑忍土とあす、而して自ら外界の清静を覚めんと欲す、狭量も甚しと云ふべし。故に彼の花月草紙に曰く、「我慾を慾もて防がんとするはいと難し今日盃一つ酒飲まんよりは明日は心に任せて飲ますべし」と言ふが如し之の世は仮の世なり彼の國には良き音の鳥良き色香の花よりしてあど教ふるは其の國の愚なる民草の果敢あき程も知らぬ」と、徒に自己の満足を得るに急にして、外界の清静を求めんと欲して、遂に未來靜土の良き音色に泣かんとするは、慾に慾を重ねたらんが如くなり。故に鳩巢も云へり、「人倫を捨て物をはなれて只己が往生極樂を願ふは世を捨つるも未だ身をすて之ぬより起りて樂慾甚だし」唯々速に内心の慾望を放擲して可あり。老子亦曰、吾所以有大患者爲吾有身及吾無身吾有何患と、身は慾望の發する處、即て大患之に萌すを言ふあり。

人は慾望ある故にこも萬障の伴ふなれ、彼等は茲に幾多の悟道する所あるに及んでや、自ら現世に於ける戀名等を却けて顧みず、深山の奥に新立脚地を求めんとするの勇氣や實に驚くべきも、其の新立脚地を求めんと欲するの念あるは、亦果して忡々たる慾望にあらざるを知らんや。必竟之れ、人類の弱点にして如何ともする事能はざる乎、唯だ感情の強き者はと、世に氣の毒ある者はなきなり。

然り而して厭世家は、必竟又何處にか清静なる立脚地を求むるを得んや。彼等は永く常住の地を得ず、戀々として浮世の波の荒涼に泣き尽さざるべからざるなり。此の時に於ける厭世家が進途は果して如何。彼等は深更月影破窓に落つるの時、眞如の光靜かに沈思冥想すれば、萬感交々湧出して止まる處を知らざるに至るや、翻然悲哀の極に打たれ、茲に人々の性癖、氣質に由て、二種の進路を辿るを見るべし。即ち或者は益々悲痛に碎心し、一直線に唯だ死の門戸に急がんとし、未來靜土に於て、新立脚地を得、茲に安心せんと欲するれ途に出でずんば止まざるあり。反之、亦或者は、同じく人事の頼むに足らざるを見、事物の日々に錯誤するを見るや、翻然として悟り、釋然として思ひ、冥想數番、拳を握て起ち、放浪の激變に對して一笑し、否か寧ろ意氣比べを試みんとするに至り、茲に初めて冷眼世と雲烟過視し去るの途を開く。要するに厭世家が其の極度に達するや、即ち多くは此れ二途の熟ガ一を辿らざるべからず。前者に出づる者之と献身的厭世家即厭世家と言ふべく、吾人は自殺を以て之を連想し得べく、後者をば樂天的厭世家と稱し得ん乎。

即ち前者に出づる者は、長く愁々の心事を以て立脚地を求めんとするも得ず、忡心絶えず、皎月を見ては丹宮に住まん事を思ひ、天を仰ては天國に官殿を廻想し、遂に死の使者が迎招を待つる念、湧然として兆ず、然も彼等は一点靈魂不滅説の確信者として、從容死に就くんとするの念をして一層確固たらしむるに至る。願れば早晚誰人も、委く北部山頭一片の灰とあり終るべきの肉魂を抱て、吃々として相人を悲む、豈に惘然の極ぢや。今や世に捨てられ世を捨てし不連兒は、塵世の空高く抜きて、輝を送れる常恒の天光に叫ばんとす。之を惜きて永世不變の者は又此世にありや。方丈記に見えたる長明は、朝顔と露との果敢なき命を以て、理想的に之を示し、人と家とを以て、之を現實に説明しぬ。噫、願れば春の日に雪佛を作りて、其爲めに金銀珠玉の飾を營なみ、塔堂を立てんとするが如し。とは、双が岡の法師も申しき。見よ元祿の詩宗が、「丹波與作」母子煩悶の處、忽然として聲あらしめぬ。「父様も母様も誰も一度は死ぬる者來世でゆるりと逢はふ迄」と、嗚呼ゆるりとどの字句、抑も何等味や。「シヨッペンハウエル」曰く、墓中の人に向て再び現生に廻るを欲するを問はし、頭を悼るなるべしと、實に現世には幸福は實在せず、「プラト」が所謂苦痛のみ實在する者にして、苦痛なき瞬間を快樂と稱するなりとは眞かりや。未來は永遠なり、幸福あり、皎月欠け落花地に委す、天人又五哀の日あり、永往不變の者、噫死而已。實に、吾人の心靈が塵汚の醜骸を脱離して、無限に實在に到達せし瞬間、即ち新「ピタゴラス」派の快樂説は、何の日に現實せざるべきや。此の瞬間は死後の境地以外、亦何處に覺めらるべけんや。此れ故に、人と人との道德は、遂に彼の顧みる處に非ず。彼は卒然として天然に

對し、靡然として一片の宗教的意識に打たれぬ。原より小乗の權に酔て、七寶の池八功德水の靈に浴せんとし、遂に六時は曼陀羅華も雨降らすの光景に恍惚たり。故に彼等の窮極思想は、死の外又た何物も存せざるなり。之れ一部の所謂獻身的厭世家が反影にして、所謂大乘の不消不滅の理に暗く、社會の空却を説く所頗る小乘的なり。故に之は慾望に向て余りに高價を仕拂ひしの徒にして、憐むべくして賞すべからざるの類なり。吾人は今敢て自殺的悟脱の是非を論せんとするに非らずと雖ども、「シヨッペンハウエル」の如き厭世哲學者にして、尙ほ自殺を以て最も痴愚の事となせしを見れば、獻身的厭世家や、又思ひ半に過ぐる者あらん。然るに後者樂天的厭世家にありては、此の厭世の極度に達するや、翻然として眞悟し、區々として人世を苦界なり、魔境なりと考へ、切に立脚地を求めんとせし愚を悟り、悠然として心靈の改革を行ひ、外界の奈何に拘はらず、唯自己の心靈を満足境地に置けば、胸は自ら豁け、悠々として眞如の月の眞澄にすまん事を悟る。實に嗟咤たる浮世の萬事、茲に至て彼の目には別に悲しくもあぐ、哀にも覺せず、唯々觀ト來て自適の境に遊ぶ、而て嘗て悲觀せし萬事も、委く今は伏して笑ふべくなるあり。

亦莫戀此身、亦莫厭此身、此身何足愛、萬却煩惱根、何身何足厭、一聚虛空塵、
無戀亦無厭、始是逍遙人、

所謂、之れ天を樂んで怨嗟するなきの心事、原より多苦厭世は樂天を呼び、理想の渴仰を催すものにして、宛然たる清談的樂天の類なりと雖ども、唯だ其根底が悲哀より割れ出されたるを見る

べき而已。原より出離を説くと思へば、女色に垂淫三斗、徒らに淫奔を語る徒然草に見ねたる兼好の如きは、到底眞悟の境や遠しと雖も、百尺竿頭尺を進めて、彼の西行を見んり、之又慾望を放擲するは勇なく、悄然として嶋立澤の夕暮に三斛の嘆息を漏らせしの迷妄、之亦相去る事幾許や。

世を捨つる人は眞にすつるは、捨てぬ人こそ捨つるなりけれ。

諭且苟安、止むを得ずして悟て見れど、遂に窮措け行脚僧たるを免れず。捨てはてし身はなき者と思ひつゝも、猶花の咲く日は浮かるゝなり。到底眞悟の境地や遙遠あり。彼れ僧正遍照が、

たらちねはあゝれとしてしもうば玉の、我黒髪は撫でずやありけん。

桑門に投下て自ら世を捨てながら、顧視自ら安せざる者あるを見るや、鳩巢すうさず冷かして曰く、

たらちねのかくは撫でずと知りながら、なでふるすん其黒髪を。

と罵り得て痛快、劔刃に勝さる事萬々あると一對にして、西行亦「雪の降る日は寒くこそあれ」と冷かされても亦一言なき處、到底一介け乞食隱者に外ならず。而も猶ほ曰く、

花やうき誘ふ嵐もつづのらず、惜む心のあかぬなりけり。

咲けは雲散らば雪を見て過ぎん、花にだにやは物思ふべき。

然れど彼は、強て之れ仮面を装はんとするのみ、豈に笑ぞ忽焉此の如くに透徹するを得んや。彼等は皆、世をば六ヶ敷く見過ごしたる物にして、世は斯く高價を仕拂ふべき者に非ざるなり。悟て

見れば思ふたよりも易く、福翁先生も言はれぬ、「浮世を軽く見認めて人間萬事を一時の戯と做し其戯を本氣に勉めて怠らず唯に怠らざるのみか眞實熱心の極に達しかがら扱萬一の時に臨んでは本來唯是浮世の戯なりと悟り熱心忽ち冷却して方向を一轉し更に第二の戯を戯るべし之を人生大自在の安心法と稱す」と、都出に猶ほ馬琴の人生觀を添へしめよ。曰く「兎角油斷のならぬが浮世樂尽きて哀來り哀去て觀來る歡ばしきを歡べば哀き時にやる瀨がかりし只歡はず哀まらず靜に天理に従ふ者神化とも老佛とも馬鹿とも言はるゝからん」と、其言ふ處余りに淡然として、實際の論に非ざるが如しと雖も、此の迷霧の裏、實際に於て千古の眞理の存するは、照々として火を見るよりも明なり。然り而して、彼の樂天的厭世家も、亦斯の如き分子を含有せざんばあらざるあり。昔者莊周夢爲蝴蝶栩栩然蝴蝶也と、志に適へると云ふ也。卽飄然として悟り、萬障寄せ來るも冷然として觀過し、天を樂んで怨せざるに至る。之れ必竟厭世極度に達し、其の關門を通過し來りたるは厭世にして、區々として厭世の聲に嗚咽し、死の宮殿に急がんとし、徒らに事理を悟らざ、花に泣き月に悲むの献身的厭世家の類に非らざるあり。果た又徒に、樂天と稱して花に浮れ、月に嘯き、阿々相笑ひ、生死原と定命あり、決して妻子の死とても悲むに足らずと言ふが如き、何とも形の付かぬ者とは、之又同日の談に非ざる者にして、實に卓然百尺竿頭數歩を進めたる物と云ふべし。西行の晩年亦頗る之の境に近づかんと欲せしものあり。然れども、

何處にも住まねば唯だ住みてあふん、芝の菴のしばしなる世に。

漸々悟て見れど、猶ほ怙齋の域や遠し、其の聲は陰として矢張り一個の小厭世家に止まる而已。

願くは花の下にて春死かん、其さきまぎの望月れ頃。
佛にはさくらの花を奉れ、我後の世を人とぶらは。

執着の深きは推するに餘りあり。吾人は茲に至て一部の山家集も、又繙讀するれ勇みきに至る。原より吾人は、詩人としての西行に悟れとは言はず。詩人は悟るべき者に非らざればなり。寧ろ大に迷ふべき者なり、唯だ吾人は僧としての西行、及び彼が人生觀としての山家集に酷なる所以。實に此の彼が樂天的厭世家たる能はざりしれ点にあり。要は唯、本來是空を悟りて、其の地位を自覺し、入らしく満足するにあり。此の故に吾人は寧ろ銀猫を擲ちし夫れよりモ、杉葉立てたる又六が門に極樂靜土を觀ぜしの一休を多とす。即ち献身的厭世よりして、慾望ある者ヲ滅び去らしめば、余す處は樂天的厭世あるにあり。(献身的厭世と樂天的厭世と) (未完)

詩壇解釋的批評

石田 黒子 軒

芳山懷古詩集

花は櫻より美かるはなし櫻の美は芳山より盛なるはあり然れども南北分争の日に當りては誰か悠悠として花を賞せん今や雍熙の化遐邇に敷き四民皞々として時に風情を花月に放ち勝を探りて賞詠する者芳山に入らざるはあし是當に賞詠け地に非ざるあり所謂歌書よりも軍書に悲し吉野山四朝皇居の址忠臣烈士の跡一吊し來れば今昔の感に堪へざる者あらん發しては詩となり歌となり其激昂淋漓は村上彦四郎の勇奮決闘親王に代りて敵兵を駭愕せしむる如く其

慷慨壯烈は楠帶刀延元陵に辭決し鏃痕を如意輪堂の扉に遺して四條畷に向ひし如く其嬌婉は宮嬪愁と月下に説き靜姬舞を雪中に奏せし如き者あらん其韻幽趣逸は西行法師苔泉を汲みて山月を弄するの概あらん其氣格森嚴は昔時の殿堂巍然として山中に猶存する如き觀あらん此觀あり此概ある者を集め今將に解釋的批評を試みんとす其專横の罪盲人蛇を畏れざるの笑免れ難しと雖滿腔の熱血感慨溢れて發する所亦己むを得ざるなり故に彼の詞葉の富瞻間婉恰も萬株の櫻花爛漫として山を壓し谷を填め光粉煥發艷麗人目を奪ふが如きは余の斷つて斯集に加へざる所あり讀者諒せよ

古○陵○松○栢○吼○天○颺○ 山○寺○尋○春○々○寂○寥○ 眉○雪○老○僧○時○輟○箒○ 藤○井○竹○外
落○花○深○處○說○南○朝○

延元陵畔香火冷のに松栢颺々として天颺に吼へ如意輪堂は春將に暮れんとして四面寂寥唯白髮雪眉の老僧箒を横へ落花繽紛として深き處眼を拭ふて南朝五十餘年の往事を説き吊客をして心腸寸斷去る能はざらしむ此詩居然唐人れ口吻海屋評し云雖廁之唐賢中誰能辨之大廣云白頭宮女在閑坐說玄宗未及此句之格調雙絶與野温夫曰先輩芳野詩動爲數百萬言富則富矣似不及此二十八字賦盡情景草土開以此句得名宜稱爲藤落花と白頭宮女在閑坐說玄宗の句より着想し來り格調雙絶讀み去りて甘蔗を倒食するが如き妙あり

抑詩は性情に發する者なれば情を離れて詩なし而して情は景を借りて寫し隱約の中人を感ぜしむるを要す然らざれば露骨の弊に陥りて詩趣を失ひ淺近粗俗に流れ易し此詩の如き催に二十八字と

雖も能く景情の二者を描き盡して亦餘蘊なく起句専ら景を描き承句景中情を微露し轉に至りて表面景を寫し裏面に専ら情を含ましめ結句落花深處の四字にて景を收め說南朝の三字にて情を收む三字最も妙あり力あり所謂畫龍點睛ある者の余會て晚春の作の結句杜鵑に附て落花深處說春愁と此句に模せしも亦一段の妙ありき松柏吼天颯の句は春寂寥を逼り出し春寂寥の字は落花深の字を呼起す一字苟もせず宜かり士開此詩を以て名を得しとは由來先生七絶に長ず世呼びて七絶先生と云二十八字詩集前後二集あり皆な近代の絶調と云も可なり等しく是形容なり一は白頭と云ひ一は雪眉と云雪眉の字遙に白頭の妙に勝るを覺ゆ然れども眉雪と倒用せしに至りては平仄に縛せられし苦心の痕歷々として見るの如し

菅 茶 山

萬人買醉攪芳叢 感慨誰能與我同 恨殺殘紅飛向北 延元陵上落花風

芳山舊に依りて自ら春風風裡還開舊時花花間を通ずる吉野水流は滌々として絶えず絶えて尋ぬるに由なきは南朝五十餘年の往事なり如今花に對し佇立し我と感慨を同する者果して誰ぞ南北分争の時に當りてや北闕の陰雲四海を覆ひ利に馳するの將士は盡く北に向ひ南朝の聲を收めて寂々寥々衰運日に加はり恰も今見る延元陵上落花風に似たり余花時屢芳野を訪ひ能く其れ實境を知る夕陽影裡此詩を一聲高吟すれば昔日拜陵の感胸に浮び來る

流石に菅茶山詩聖の作ある哉前作に劣らず景情の二者と描き出して餘蘊なし感慨誰能與我同の句は筆力扛鼎誰能與我同の字は萬人れ字に緊接して間髪を容れず延元陵上落花風の句は無限の悽慘凡そ詩文の妙は布置結構に在り若其の宜しきを得ざれば大に妙味を減ず殊に絶句に至りては僅に四句を以て無限の物象を描き無限の感慨を寓する者故文字の布置に注意せざれば金玉も化して瓦礫となる本詩の如きは布置の最も宜しきを得たりと謂ふべし此作或又頼杏坪の手にあることも云へり按ずるに飛向北れ三字穩ならず蓋し翁は南風死北風競の事より此く用ひし者か但しは芳野吟杖の際殘紅飛んで繽紛たりし實境よりして此に至りて兔に角に諺に云ふ春は東風多く夏は南風多しと又春風を東風とも稱すれば翁の來訪せし時は東風吹きしに相違あり然れば殘紅飛向西とすべき處なり而して來訪の時は夏に近ければ南風と稱して可なりとの遁辭は余の斷つて採らざる所なり

本 田 種 竹

落花水流情不勝 千山風雨迫孤燈 子規呼起當年夢 月暗南朝古帝陵

菊地三溪誣して曰く無限感慨無限忠憤吾亦南朝忠義之子孫讀之扼腕久之と好適評假令南朝忠義の子孫に非ざるも誰か此詩を讀て慨して懔せざらんや繽紛たる無情の花滌々たる無心の水は無限の暗愁を帯びて吊客を惱す況や千山萬岳の風雨は明滅たる孤燈の下に迫りて咽啞叱咤の聲に似たるに於てをや半夜夢を攪するの子規は是れ當年れ子規に非ざるか轉た斷腸の音を含みて古を説く者れ如し月は闌澹として空しく陵上を照し光裡に愁を含みて聊古の悌を止む皆是れ無限の悲愁無限の感慨李白か菱歌清唱不勝春の句より着想して落花水流情不勝と書き起し風雨子規月を借りて順次に蕭々凄々たる景を描き出す後半は其萬斛の感慨溢れて一氣に呵成する所間髪を容れず茶山か

客窓一夜聽松籟、月暗楠公基畔村の句と異曲同工、言外にありて餘韻は縷々たり

三好秋畝

想昔南山駐翠華 行宮寂々托僧家

朦朧仍舊春宵月 影淡禁垣御愛花

北風慘澹として四海を捲き南風は微々として競はず車駕恨を含みて南遷し忠臣涙を飲みて劍を按し苦慮百端一木以て大厦の將に倒れんとするを支へんと企てし行宮も今は寂々として空しく僧庵に變じ只今唯有鷓鴣飛てふ凄凉たる景となる然れども天上の明月は依然として崔魯か所謂明月自ら來りて還自ら去り空しく禁垣御愛の櫻花を照して其影朦朧たり依稀たる明月を仰ぎ朦朧たる櫻花に對して幾度か呼べども帝魂歸り來らず今や那邊にか在る年々歳々人同じくならず歳々々々花相似たり御愛の花は空しく開きて空しく落ち開落已に數百年しるも尙ほ古の佛を呈す所謂春來還開舊時花人や然らず縷々感想し來れば今昔の感に堪へざる者あり古人云人生讀書の子とある勿れ到處感慨の多きに堪へず蓋し謂なきに非ざるあり婉麗の筆を以て悲壯沈鬱の情を描き出と洵然たる小杜の調にあらずんば漁洋の芳腹後半景を寫して閨々裡に無限の情を含む唯前半接合の處穩あふざるを惜むのみ

渡邊東民

滿地櫻雲春尙寒

孤吟吊古入禪關

延元陵下背花立

揮淚遙見金剛山

櫻雲漠々として山巔を覆ひ春寒料峭として衣袂に逼り櫻樹路を擁して婉孌如意輪堂に通ず孤吟徘徊仰て延元陵上を拜し俯して小楠公髻髻の碑を讀み胸間の感慨遣る所なく花に背きて佇立眸を轉

ずれば金剛山巔は巍峨として雲表に聳へ恰も延元古帝陵を拜する者の如し彼此對照して古今を追想すれば萬感觸集血淚千行爲す所を知らず苟此詩を讀て感想せざるものは木石腸に非ざれば將何とか謂はん起句平凡たるを免れずと雖も孤吟の二字接し得て稍妙あるを覺ゆ轉句は徐凝か天桃窓下背花眠の句より着想し來り前二句を受けて第四句に緊接し以て百尺于頭一步を進む只揮淚遙見は四字露骨の嫌あるを惜むのみ

安積良齋

縱橫豺虎帝城塵

南狩深山托紫宸

花木添香迎玉輦

煙雲改色護袍神

魯戈能挽虞淵日

周鼎猶存洛水春

憑吊不勝懷往事

杜鵑聲裡淚沾巾

豺虎牙を現はし爪を磨し四海冥闇到處沙塵面を吹き戰士多年鎧衣に露臥し國歩の難此より甚しきはなし只南山の一隅花木香を添へて鳳輦を迎へ煙雲色を改めて袍神を護り僅かに紫宸を托するのみ嗚呼其花木の神煙雲の氣相集り相結びて魯戈をして沒するに垂んとする虞淵の日を挽回し周鼎をして依然洛水の春殿に安ト北敵をして豺虎の慾を逞せしめざりし當時の苦心夫れ如何ばくりなりしもの而して今や芳樹無人花落春山一路鳥空啼れ荒涼たる景と化し去り吊客を以て今昔の感に堪へざらしむ前聯に比して後聯更に工なるを覺ゆ兩聯共に筆墨鏗鏘情文描き盡して亦餘蘊なし起句武骨拙陋古詩調に似たりと雖も結末亦多少の趣味あるを覺ゆ

久我梅庵

杳渺山蹊曳杖行

村南村北簇紅櫻

古陵雨靜花空落

廢寺雲寒鳥自鳴

志士千秋悲帝業 老僧一夜說皇京 南朝無限傷心事 付與溪流鳴咽聲

春雨蕭々として陵邊花空しく泥に委し冷雲濛々として寺畔鳥鳴きて愁ふ千載の後志士は腕を扼して帝業の艱を悲しみ孤燈明滅の下老僧涙を拭ふて皇京の衰を説く嗚呼南朝無限傷心事聞くに忍びず所謂傾心欲問前朝事唯見江流去不回と空しく感想を溪流鳴咽の聲に付與して在天の皇靈に訴へん前聯は懐清蕭騒の景を描き楊成齋をして地下に汗を流さしめ後聯は忠憤感激の情を説き去りて山陽をして左泉に膽を冷めならしむ風景眼に觸れ感慨胸に溢れて成る所工を求めずして自ら工となる此詩の如きは則然り結末奇拔駿馬の險阪を馳するか如く恰も起句と二手に出づるが如し

河野 鍊 兜

山禽叫絕夜寥々 無限春風恨未消 露臥延元陵下月 滿身花影夢南朝

萬籟既に收まりて四隣間寂山頭の怪禽一聲叫き絶えて更に夜の寥々たるを覺ゆ此に於てか懷古の情禁ト難く又去るに忍びざるなり乃ち延元陵畔春月朦朧たる處露臥すれば月光に映ずる花影は衣袂に宿して清香夢に入り身は南朝五十餘年の間に髣髴たるが如し該詩は鍊兜子が作中の傑作筆墨鏗鏘恰も敲金戛玉の妙ありと評するものあるも余は斷トて取らざるなり彼の所謂雅は則ち雅あり婉は則ち婉なり然れども三四の如きは句々纖巧に過ぎて氣格高うらず香奩體としては上乘の作ぢらんも懷古此詩としては他に一籌を輸せざるべからず殊に轉句の如きは失敬侮慢の至に非ざるなきやを疑ふ抑臣民として延元陵畔妄りに露臥すべき者あるや否や措字の工妙に致りては一点も容喙する所なし滿字は露字に因み影字は月字に應ト夢字は臥字を收む

春山滿目恨難消 陵樹花飛春寂寥 猶有殘僧守蘭若 御容掛壁說南朝

鱸 松 塘

春山舊に仍りて青々麓を環る吉野川流は空しく流れて歸らず延元陵畔花飛び盡して滿月寂寥所謂傷心欲問前朝事惟見江流去不回日暮東風春草綠鷓鴣飛上越王臺てふ思をかし如意輪堂且は竹林院を尋ぬれば山僧容を整へ御容を壁に掛け南北分争の事君王宵肝に艱説き去りて涙潜々たり此に於てか吊客の心情果して如何此詩竹外翁の詩と同韻同趣向妙亦伯仲之間にあり余尤も此種の作を愛す轉結妙限か蓋次韻の作ならん而して其錐鑿の痕絶えて見ざる所老手に非ずして何ぞ

渡 邊 昇

南朝如夢向誰尋 投宿花間所思深 風冷古陵殘燭滅 櫻雲籠月夜陰々

余曾て挾卿一水詩兄と南山に遊び如意輪堂の檐端に宿す偶月暗く風冷に陵前の燈火は明滅として咫尺を辨せず夜色陰々として唯樹梢の風聲を聞くのみ此詩能く當時闇澹の景を描き盡せり省軒評して曰はく滿身花影夢南朝句脛炙人口然比此詩有天籟人籟之別と暫く彼此の優劣を措き字句に就て論せんに投宿れ二字は俗に陥り所思深の三字雅ならざるに似たり

梁 川 星 巖

今來古往事茫茫 石馬無聲杯土荒 春入櫻花滿山白 南朝天子御魂香 不知何處古行宮 廳警春空羅綺風 今日誰爲奉陵者 夕陽僧掃落花紅

五六百年を隔つる南朝の往事は茫茫として夢の如く各處に點在する石馬は寂として聲なく杯土は

空しく荒廢に委して古を吊ふに由なく唯櫻花は爛漫として満山を填めて満目一白先皇の御魂と共に香を長に放つ日落芳山春色遠不知何處吊南朝と微陰徘徊すれば春空羅綺の風は面を拂ふて颯たり夕陽影裡僧は箒を横へて落花を掃ふ是なん行宮のありし處なごんと吊し去りて感慨胸に溢る詩中専ら情を言ふあり専ら景を叙するあり就中景を叙して情を合む者を上乗とあす本詩其の妙を穿ちて先づ懐古の体を得たり

菊池 溪 琴

南朝古木鎖寒霏 六百春秋一夢非 幾度問天々不答 金剛山下暮雲歸

南朝の往事茫茫として夢の如く天を仰て問はんとすれば天は黙して答へず無心の暮雲は漠として金剛山下に紛々たるを見るのみ某評して曰はく河野鍊児滿身花影夢南朝之什繪炙人口然聲調卑纖此諸此詩何雷陽春下里と或は然らん前半は後半に勝るに似たり轉句の如きは作者の得意とする所なごんも拙陋に陥るゝらん歟

大 槻 盤 溪

行宮寄在碧嶙峋 花落花開五十春 一木自堪支大厦 三朝倚賴姓楠人

舒公評して曰く盤翁詩中詠古當以此詩爲第一九章日當時有三木一草之語而楠木獨奕葉光輝二木一草則無有旁蘖吾恐行將屬腐朽安得借盤翁筆發其幽光と古人の未だ言ひ破らざる所を述べて奇拔人目を驚おす五十春一木三朝數字疊み來りて繁を覺へず幸に算博士の弊を免る是れ措字其の宜しきを得るに由りてなり寄在の字構在に換へて何如

野 田 笛 浦

南山往事夢茫茫 萬樹春深不復香 日夜陰風吹自北 小楠無力護花王

行宮埋沒亂雲層 唯有櫻花管廢興 恨殺南風終不競 夕陽下馬吊荒陵 茶山翁の詩と趣意伯仲れ間にあり前首は専ら當時の狀を述べて感慨を惹き起す轉結は理屈に陥りて妙少なし後首は遙に前首に勝り一二の句は最も妙を覺ゆ唯有櫻花管廢興の句は芳野懐古詩中多く見ざる所斬新にして筆法鋭尖唐宋の口吻

中 村 城 山

往事關情豈可堪 行宮何處帶煙嵐 春光不受北風顛 千默落花飛向南

是亦茶山翁の詩と同様の着想にして正反對に説き來り一者枕山評して曰く落花猶 bodies 帝愁而不向北將士之反事于此者何心也歟と落花だも南飛して北に向はず當時倒戟れ士今や櫻花に對せば地下に在りて何の面目のある只後半は理屈に過ぎたるを惜む

杉 聽 雨

南朝往事夢成空 亂點飛花逐晚風 不使妖氛侵咫尺 萬櫻深護故行宮

南朝五十有餘年の往事は夢れ如く尋ぬるに由なく續紛たる飛花晚空に飄りしにも妖氣怪氣をして侵さしめず萬種の櫻は深く故行宮を擁して恰も忠臣武士の鋒を並べて嚴として紫宸を護るに似たり劈頭一筆無雙の感慨景中情を述べて懐古れ感躍出するが如し抑詩は風景目に觸れ感慨胸に溢るるを以て工を求めずと雖も自ら工あり然るに當時の詩人題を求めて心に未だ感ずる所なくして徒

かに想像を以て理屈を述べ詞を綴る是れ許多の經營を費して巧ならざる所以なり此篇後半或は此の弊に陥る者に近きか

長岡成山

延元陵上草蕭々 萬木深山宮路遙 鳳輦不來春欲暮 落花滿地吊南朝
落花地に委して春將に暮れんとし鳳輦既に白雲に乗去りて又來らず延元陵畔春艸冉冉として深山を通ずる古の宮路は萬木の間に隱見たり落花深き處南朝を吊し來れば何人も必ずや讀史多年燈下の涙即今來り吊ふて碑文に灑くてお嘆聲を洩すらん通篇一字として感想を帯びざる者なく鳳輦の字は宮路遙の字に緊接し落花の字は春欲暮の字に緊接し吊南朝の三字は首の延元陵に反應して一環形をなし鳳輦不來春欲暮の一句は能く全篇を活動せしむ其措字の妙珠の如し

松平瓊浦

探到行宮意慘然 芳山春暮聽啼鶯 延元車駕南遷日 花落花開五十年
延元溪同輦路斜 櫻雲尙護古王家 千秋遺憾孤臣淚 灑盡先皇御愛花

一峯一峯又一峯一溪又一溪又一溪千折萬曲輦路其間を通じ櫻樹路を夾み老幹嵯峨として天上に參し或は偃蹇として地に臥し均しく峯溪を埋めて一目千本の眺望所謂別乾坤の趣を呈し香雲漠々とし古行宮を覆ひ落花飛ぶ處杜鵑血に啼く嗚呼延元車駕南遷せしより今に至りて花の開落既に五百有餘年御愛の花は寂々として謂所今日風光君不見櫻花零落寺門前と獨紅唇を開きて愁聲を發する者の如し由來芳山は嘗て詩人墨客の賞地に非ざるなり見る所の櫻花聞く所の鶯聲一として感想を

惹かざる者なく作者が所謂千秋遺憾孤臣淚灑盡先皇御愛花とはさもありかんかし前篇一二の句未だ稚氣を脱せず意慘然の字他に佳字の換ふべき者なからん三四の句は一氣呵成讀み畢りて何等の韻致あるを所所謂有韻の語録にして詩と稱し難し前篇と異り後篇の起句承句は宛然唐人の口吻尙護古王家の五字是れ亦佳字の換ふべき者あらん轉結是亦一氣呵成千孤の二字對映して色を取るも先皇古王家の字重疊して錦繡色を汚すを如何せん

中井櫻洲

芳山看花尋常事 芳山看雪古來稀 吾來吊古三冬曉 延元陵上雪滿衣
呼渡芳山野水濱 行宮遺跡沒荆榛 勤王諸將無奇策 恨殺南朝五十春
北風吹雲点衣巾 萬樹山櫻未識春 如意輪堂香火冷 古陵不見掃花人

平生不灑半行淚偏向延元陵畔多と余が芳山を吊ふ毎に此感なき能はざるかり延元陵畔落花を眺めて世の盛衰を感し乾坤を俯仰して今昔を追想す由來詩人の本領繙史の士の常とする所然らずして朔風凜冽面を拂ふの處皚々たる積雪を踏みて帝魂を吊し忠臣の跡を慕ふ者殆ど罕かり櫻洲か所謂芳山看雪古來稀吾來吊古三冬曉云々と驕り顔に陰ト出して悲壯沈鬱の氣を吐出せしは忠憤の慨溢れて然らしめし者決して好奇者流に非ざるなり北風雪を吹きて表巾を拂ひ萬樹の山櫻は時からざるに花を綴ること雖も枝骨瘦せて見る容もなく如意輪堂は香火冷うに淑煙斷續唯梵貝の聲を聞くれみ塔尾陵邊は玉雪飛て花の如く如今誰の是れ花を掃ふれ人ぞと嘆し出さしむるの凄凉たる冬曉の景は更に春陽駘蕩花飛び花落つるの景に比して更に吊客をして一層の感想を深うらゝむる者ある

なきやを疑はしむ工を弄せずして自ら工とかり妙を求めずして自ら妙を得る初篇一二の句は工を弄して工に陥り却りて没趣味とある吾來吊古三冬曉延元陵上雪滿衣の句は吾來吊古秋風晚荒壘猶看巨礮存の句に一籌を輸するに似たり二篇は平凡誦するに足かず就中起句の如きは平凡中の平凡最後は篇は其趣意三篇中の白眉と稱するも不可なきに似たり未識春の三字未逢春に換うるの勝れるを覺ゆ古陵は陵邊に換ゆれば穩當にして更に一段の妙あるを覺ゆ香字は花字を呼起し花字は山櫻れ字に應じ派絡貫通作者の苦心亦知るべし

文苑

不満足物語 (トルストイ原作)

こ、ち 生

都府の商人に嫁したる姉は、久し振りにて、田舎の農夫に嫁したる妹の家を訪れぬ。先づ、茶も飲み、種々おしゃべりもしたる後、姉はそろ／＼得意の都自慢を初めて、都に居れば旨い物が澤山あるし、縁日やお祭りなどには、子供に奇麗な衣物を着せて歩るけるし、芝居もあれば、種々に寄席もありて、面白く暮せるのは、都に限ると云へり。

いつもおれには妹も稍々癪に障ると云ふ氣色にて、商人おんか、つまらないと云ふ事より初めて、自分等の暮らしの面白さを述べ、さて云ふやう「どれ程、都の暮しが、面白くとも、こち

と變へて欲しいと思ふ氣は起さない。私達の暮しは、まづいが、第一、何んにも怖いものは無い。姉さんなどは面白く暮して居て、澤山お金を儲けるだらうが、直ぐ無くやつて仕舞ふ氣使ひが有るだらう。今日は金持ちであつても、明日は一文おしになるかも知れぬが、商賣のからわし。私達はそれと違つて危い事は無いさね。「百姓の餌袋は瘦せて居るが廣い」とやらで、金持になんない代り、いつも不足をする」と云ふ事は無し。

姉は答へぬ。「左様さ、お前達は澤山喰べるものはあるが、まるで、豚や牛が澤山喰べるものがあると同事、別にいゝ物があるではなし、面白い事のあるでもない。お前様御亭主が、どれ程稼いでお呉れだつても、お前は筵の上で死ななくちやあらず、子供も大層お出世ができるでも無し。」

「それで澤山。それが私達の一生と云ふものなんだね。それで私達は安心して居る、地面さへある限りは誰れに氣兼ねる事も要らず、誰れも怖い者もない。都では、種々お悪い物が、そこら中にあるのら、今は安心して居ても、いつ、姉さんの御亭主にカルタだれ、お酒だの、女だの、と云ふ魔がさすりも知れない。其時は、何事も、もう、それきり。こんな事は何時起らないとも云へないぢやないかね。」

今まで、壁に寄りかゝりて、耳をばたて、此姉妹の談話を聞き居たる主人バハムは獨言のやうに云へり「左様だ、小さい時ら、今まで、絶えず働いて居るが、つまらない事を考へた事は更らに無い、已等地所を充分持つて居らぬが、充分持つて居たら、何物ぶつて怖いものは無い。魔

なんてなものだつて怖い筈はあつた」

姉妹は茶を仕舞ひ、皿を片付け、寢床に行きぬ。

此際、悪魔は壁の後ろに隠れて、此妹が夫を自慢させて、地所をもつと持つて居たら魔でも何でも、何とも思はぬと云はしめしをさゝて居たり。

「よーく、已れば、内にもつと地面を持たせて見せん、これ内を捕ふる近道あり」と悪魔はうなづきぬ。

二

此村の農夫等此土地は、此村にて百二十デシアチン計りの土地を持てる貴婦人の土地と相接して居たり。これまでは、何事もなく至つて平穩ありしが、兵士あがりの男が、此貴婦人の番頭となり、何らにつけて罰金を取る事にして以來、農夫等大に困るに到れり。バホムは如何に注意して居たればとて、遂に己れの馬が貴婦人の麥畑に入込んで居たり、又は牡牛が園の内に入りて彷徨ひ居たり、又は犢が間違つて向ふの牧場に入り込んで居たりなどする度毎に、いつも罰金を取り立てられぬ。バホムは罰金を拂ひて後は家に歸りて怒りを妻子に移したりき。時々此地悪き番頭が態と罰金を拂はねばならぬやうに仕向けたり。それ故、バホムは無事に、其家畜を家に收めて後は重荷を下したるが如き心地せり、うくなしたる上と、少し位は飼料を呑んだとて、牛や馬が、人の地所まで彷徨ひ行くと能はざればなり。

然るに冬になりて此貴婦人が其地所を賣らんと欲し、或人が又之を買はんとすと云へる噂さ立

ちて、農夫等の間には恐慌を來しぬ、もし他人れ手に入りたらば、其人は貴婦人よりも猶ひどく罰金を課しはせずやと恐れられたればなり。

皆思へり「吾等は此地所あくては、生きて居ること能はず、此地所は吾等を取りまき居れば」

即ち貴婦人の許に行きて、他人に賣り賜ふより、餘計に代價を差上ぐべければ必ず他人に賣り賜はずして、我等農夫共に賣り賜ふやうにと嘆願しければ、貴婦人諾き賜ひぬ。

初めは、農夫等共同して之を買はんとして度々會合せしも、遂に定まることなくして了りぬ。悪魔が此相談の場に潜み居りて其良く纏ることを妨げたればあり。遂に彼等は、此地所を銘々鬪にて出来るだけ多く買ふべきことに一致し、貴婦人の承諾を得たり。バホムは己れの隣人が二十デシアチンを買ひしこと、並びに其半金だけは、二年の年賦にて拂ふことを許されたることをさけり。而して羨しく思へり。

「油断して居るうち、彼等は残らず買うて仕舞ふべく、自分れ買ふ處なくなるべし」と思ひ出し、其妻に相談するやう「人々は皆買ふ事にしたれば、我等も買はずはあるべからず、又々罰金許り取られは、我等の浮む瀬もあるまじ」と即ち二人は額を集めて考ひて居たり。

バホムには、今まで百ルーブルだけの貯蓄あり。其上、驢馬の子を賣り、又蜜蜂の半分をも賣り、長男を仕事に奉公に出しなとて、漸くにして半金丈けは整ふことを得たり。

バホムは之を以て、十五デシアチンの土地と少しの森とを撰びて、貴婦人の許に行けり。約定は濟み、金は拂ひぬ。即ち市街に行きて登記を濟まぬ。バホムは貴婦人に半金だけを即坐に拂

ひ、残り二年間に拂ふことを約せるなり。かくして、彼は地主となりぬ。猶義兄より金を借りて種子を買ひ、之を新しく得たる地所に蒔きて、良き收穫を得たり。即ち一年経たぬ内に、貴婦人にも義兄にも借金を返へす事を得たり。今では此土地は天下晴れて我地なり。之を耕し、之に蒔き、家畜を之に喰ましめぬ。彼は耕しに行くとき、草取りに行くとき、牧場を見廻りに行くとき、彼の心は躍るやうに覺えぬ。草も花も、今までは全く違ひて、又、良く見えぬ。今までは、此土地も、あの土地も異なる事なく見えしも、今は、バホムには、此土地は、全然一新色を呈して見えしなりけり。

三

かくて彼は、豊かに暮らしぬ。何事も無事に行きしが、たゞ一つ穩やかに運ばざることあり。農夫等は彼の土地に踏み入ることなり。彼は絶えず彼等に氣をつけたれども、やはり無駄ありき。一度は羊飼ひの不注意によりて、又一度は夜、馬の爲めに小麥を踏荒されたり。バホムは其度毎に、之を追ひ、さて之を容赦したり。遂に彼は耐切れなくありて不平を云ひ出すに到れり。彼は彼等がたゞ知らずして、之を爲したるにて、決して故意になせしにあらざることを知りしと雖も、思へば、「絶えず、彼等を容赦することは、良うぬ事なり。捨て置けば遂に彼等は、我が土地を悉く踏荒らし了るべし、少しく彼等に將來の見せしめをなすべし」

其次ぎより、彼は己れの土地に踏入るものある毎に、之を訴へて罰金を拂ひて損害を償はしめたり、彼の隣人は怒りて、今度は却りて故意に彼の土地に害を與へたり。或夜彼れの林の區域内に入りて、十本は菩提樹を切り倒し、猶靴を造らんが爲めに皮をも剥ぎ取り行きしもれあり。バホムは次に其場所に近きたるとき、日光が樹間を漏れ來ること甚だ自由あるを認め、近きて見れば、切り株を離れて樹の倒れ居たるを見たり。若し切るからば、たゞ外側の方のものだけを切り倒して呉れたらば良ありしに、そこには僅の一本残りたるのみにて、残りの十本は一列に切り倒されたるのみならず、皮をも剥がれて居たるあり。バホムは激怒せり、「我れ之れが誰れの業なるを知らで止まじ」彼は思へり「而して必ず之を償はしめんと欲す」。彼は何人あるべきやを知らんことを努めたり。「みれ、必ず、シモンの業あるべし、外にり、る事をなすべきものあらざれば」即ち、シモンの家に行きて搜索を極めたれども、遂に見出すことありき。而も猶彼はシモンを疑ふこと強く、遂に法庭に訴へ出でたり。シモンは召喚せられたれど、證據はなかりし爲め放免せられき。バホムは愈々激して判官を罵りぬ。「咄、汝等は盜賊を庇護す、汝等は正しき人々からば、此盜賊を放免することおかるべきに」

かくして、バホムは隣人及び法官と争へり。今彼は多くの土地を有するに到りたりと雖も、彼の隣人の好意は全く失ふに到りき。此頃に當りて人々は新しき土地に移住すること流行し來れり。バホムは思ふやう「我れ此土地を去る事を何とも思はず、人が餘り多く行りざれば、我等に餘計のもの當るべし。我等は此處にては多く集り過ぎたり」

或日彼は家にありて坐せるとき、一人の旅客入り來りぬ。バホムは歡迎して一夜を其家にて明らさしめぬ。話しの中にバホムは何處より來りしのを問ひしに、旅客は答へて、南の方、即ち彼

れが働き居たるウラルガ地方より来りし旨を告げぬ。彼等は共に語れるうち、旅客は人が續々其地に移住するやうになりしことを語り、又彼が故郷の農夫が其殖民地に入りて各々十デシアチン宛の土地の分配に預りし次第を語りぬ。彼は云へり、「其土地にては裸麥を蒔けば、其莖の高き充分馬をも隠し得る程にあり、又五把程にて最早一束の大きに於る程なり。初めて其處に來りし頃極めて貧うりし農夫が、今は五十デシアチンを耕し居り、昨年のおきは、小麥計りにて、千ルーブルの純益を得たりと云ふ程なり。」

パホムは大に心を動かされき。彼は思へらく「何故、吾等は其處に行きて、よく暮し得る代りに、うゝる土地にありて、苦み且つ群がり居るにや。我れ今、我家と土地とを賣りて其金を以て新たな其地に行くべし。我れ多くの土地を要す。自ら行きて良き新土地を見出すべし。」

春や、晩き頃、彼れ立ちぬ。漁船にてウラルガ河をサトラミ云へる地まで下り、其處より四百ヴェルストを歩みて、遂に目的地に達せり。彼は何事も聞きたる通りありしを見たり。農夫は皆安んじ暮せり。各々十デシアチン宛を貰ひて歡待せられ居たり。何人にも、金あふば充分の土地を買ふ事を得るあり。一デシアチンにつき僅のに三ルーブルにて貰はるべければあり。

かくて充分詮鑿を遂げたる後、彼は家に歸りて、其土地を賣りぬ、土地は買ひし時より以上の價にて賣られぬ。猶其家と家畜とを賣りたる後、次ぎの年の春、此村を後にして、其家族と共に新しき土地に赴けり。

四

彼れは其土地に着してより后、一大殖民地に屬し、老人に相談を請ひて、届書、願書、證書等の事共を濟まし新しき組合に加入することを得たり。彼の家族は五人ありければ、五十デシアチンの土地は牧畜場等に添ひて彼れに與はりき。彼は家を建て、又家畜を買ひぬ、今や彼は前に有したる土地の二倍を有するに到り、其上此土地は甚だ肥えたれば、彼れが生活は度も高まり行けり。彼は耕地牧場を多く有したれば、彼が欲する程、家畜を養ふことを得たりき。初めに、彼れが家を作り居りし時は、心中喜ばしに堪えざりしも、後には此土地も思ひしよりは、人口稠密にして餘れる土地少なきとを見たり。彼は他人の爲せる如く小麥を穫ふんことを思へども此目的に適當したる土地甚だ少なかりき。一体此小麥と云ふものは、全く新たなある土地の、又は二三年間は鋤きたるまゝ捨て置きたる土地からでは良く實らざるものなり。故に通常小麥を一年蒔きて、其次ぎの二年は遊ばせ置くこととするが常なり。砂地は澤山ありと雖も、これたゞ裸麥に宜しきのみ。小麥は良く肥えたる土地ならでは、相應ざるものにて、而もかゝる土地は凡ての人が悉く充分持つ事を得る程はあかりしなり。故に隨分苦情争論も起ることを免れざりき。富有なる農夫は、己れ等が良き土地は自ら耕し、貧しき農夫は地代を拂うて商人の有せるものを借り居れり。初めの年に、パホムは自らの土地に小麥を蒔きしが、可かりに出來たりき。即ち今一番多く蒔きたかもしも、良き地所を持たざりき。彼れの土地は小麥を蒔く程良かざりしなり。彼は今少し蒔きたき念より、商人の土地を借れり。今度も又良く熟したり。併し、うくして得たる小麥は十五ヴェルスト計り距りたる一村まで車につけて運び行かざるべからず。彼れの廻りの商人の農夫等は皆

益々富有にあり行けり。

彼は思へり「若し、我ものとして土地を買ふとを得て、其處に家を建つるとを得ば如何に幸ひあらん、如何に都合良からん」今、彼れは唯かくするを得ば、如何に嬉しうらんとれみ思へるなり。

かくの如くにして五年は過ぎぬ。パホムは益々多く此土地を借り、小麦を蒔けり。幸にして、来る年も来る年も收穫豊かに多かりければ、彼は富有に成り行きぬ。今彼は豊くに暮せるあり、而も彼は猶土地を購ふことに汲々とし、之を事の容易あふざるに困却せり。例へば、そこに良き土地の賣り物に出でたるものあれば、農夫は直ちに之を借り受け了りて、之を購ふに暇なめらしめ、以て彼の之を有せんと欲するを妨ぐるを常とせり。彼れ一商人と共に牧場を購ひ、既に己れ等の者に定まりたる事と思ひて之を耕し之を鋤きたるのち、之を賣りたる以前の所有者、再び苦情を持ち出し、約定をもとに取り歸へたれば、パホム等が耕耘の努力、全く無駄に歸たり。若し、彼れにして、己れの土地を充分有したるば、彼は何人にも見込まるゝ患あく、何人をも羨まざるべきものと思ひぬ。

パホムは何處に於て、己れ欲する如く充分の土地を購はんと思ひて、尋ね居るうち、負債を償還する力らなく、且つ其土地を保ち行く事能はざる一人の農夫の安直に其五百デシアチンの土地を賣ふんと欲せるもれあるを見出しぬ。彼等は互ひに相談したるのち、千五百ルーブルにて賣買すべき約を整ひ、其内半金は少し猶豫するやうに決定し、正に其手を打たん計りにあれる時、

一人の旅客、パホムの家につきて休息し其馬に食ましめたり。

共に茶を飲みながら、談話したるのち、旅客の商人はパホムに向ひて、己れの、バシユキル人の地より來れるものごとを説き、其處にて彼は五百デシアチンの土地を僅かに一千ルーブルにて買ひしとを語れり。

パホムは、尙詳しく尋ねぬ。商人は彼れに向つて彼れが一百ルーブルの價格ある外套、敷物、茶の一箱を其土地の長者に分ちて、親しくあり、且つ酒を以て彼等の歡心を得たりし次第を語りぬ。彼れは其土地を平均一デシアチンにつき、二十コベックを以て買ひしとを語りぬ。彼はパホムに其證書を示し、且つ、其土地が、一の小河に境したる絶好の牧場たることを語りぬ。パホムは益々詳しく知らんと欲せしめば、商人は、告げて云ふやう、

「そこには、土地の多さと、驚くべき程にて、一年中歩き盡すと能はざるあり。凡て此等はバシユキル人のものにして此バシユキル人は甚だ伶俐ならず、寧ろ羊の如くなれば、足下の方から一つにて、たゞ土地を取るとも六ッかしからずと、我れは云ひたき程あり」と。

パホムは、遂に思へり、同ト金にて多くの良き土地を得ること容易なる場合に、借金を負ひて、辛ふとて一千ルーブルの金を整ひ、五百デシアチンの土地を買ふが如きは、策の得たるものにあらずや。

五

パホムは如何にして其處に行くべきを問ひたるのち、旅客の立ち去りしや否や出發の準備を爲

せり。彼は妻子を家に残し彼れが作男のみを伴ひたり。彼等は市街に立留りて、商人が教へたるが如く、茶、酒、其他の贈りものを買ひたる後、五百ヴェルストの路を歩みて、七日目に、バシユキル人の地に達しぬ。

何事も商人が告げたる如くなりき。彼等は其土地の人は、川の縁の廣野に毛皮を以て蔽ひたる馬車の内に住めることを見たり。彼等は麵包を食はず、又土地を耕さず。馬群其他家畜の群は、あたりを徘徊せり。駒は馬車に繋かれ、牝馬は日に再び驅られき。バシユキル人は牝馬の乳汁を取りて、之よりクリームと名くる一種の酒を醸造して、男は此クリームを飲み、茶を喫し、羊肉を食ひ、煙管を弄してある間に、女は此クリームを作るを事とせり。彼等は皆太平の相を有し、長き夏の日れ間、ひねもす、心にうゝる事も無く暮せり。彼等は無學にして、露西亞語を話さずと雖も皆心の善人れみなり。パホムは此人々れ間に來りしや否や、彼等はパホムを取り巻きて集りぬ。通辨する人見出されき。パホムは土地を買ひに來りし旨を語りしに彼等は喜びてパホムと最良の馬車に請じ入れ、最良の褥を供して上坐にすゑぬ。クリームと茶が出て、一頭の羊は屠られて彼の爲めに、不時の盛宴は張られき。パホムは即ち土産を取り出して彼等に分ちたるに、彼等の喜び甚しうりき。彼等は集りて通辨に斯く云はしめき。

通辨は云へり「彼等は我をして、かく足下に告げよと云ふなり。即ち彼等は足下を見て喜べること甚し。彼等の習慣として、客人を責び、且つ賜物の返禮を爲さんと願ふ。足下は彼等に親切なりき。今何を足下は欲するのを我等に告げよ」

「我れ、足下等の良き若干の土地を購はんことを願ふ。我等の地方にては、人が餘り多くして、土地足らず。足下等には、土地は甚く多くありて、且つ肥えたり。我れ未だかゝる良き土地を見たること無し」

通辨は此パホムが言を取り次ぎて云ひ聞のせければ、彼等は此事につき、談して居たり。パホムは彼等の言を解する能はざりければ、たゞ、彼等が何事をも語り、且つ笑ひ居たるを見しのみ。終に彼等は黙せり。通辨がパホムに語りてありし間、皆パホムを見て居たりき。

「彼等は我れにかく足下に云はしむ。即ち、彼等は足下が望む土地を皆進呈せんとを望む。何處ありとも、足下れ好む處を示せ。其は足下のものたるべしと」。既にして又彼等は相談せり、パホムは人々が能く一致して非らざるべきと見たり。彼れ通辨に向ひて、何を争ひてあるやを聞きしに、通辨は之に答へて、彼等れ内に、のゝる事は長者の許しを受けざれば、無斷に人に土地を與ふべからずと云へるものと、否、長者に相談せよとも良しと云へるものとありて決せざるなりと云ひぬ。

六

衆議未だ一決せざる内に、狐皮の帽子を頂ける人、此方に向ひて近きたり。人々起立して黙せり。通辨は云へり「これ我等の長者ある」

パホムは最も立派なる外套と五ポンドの茶とを此人に呈しぬ。彼は贈物を受けて、扱て、上席に着きし時に、バシユキル人は交々起ちて此人に事の由を説明したり。彼は聞き了りて、さて、

微笑みながら、ロシヤ語にて云へり。「客人、それにて良のふずや。足下の欲する處を取れ。我等は充分多くの土地を有すれば。」

「如何にして、我れそれを取るべきや」パホムは思へり「第一、證書を作らざるべからず。彼等は今は、此れ我物として與へ置きながら、後には、之を我より取り去るとも詮方ありるべきあり」即ち云へり。「そは有難し。足下が有し賜ふ多くの土地の内、我は唯、僅かを欲するのみ。併し我れは、如何程我がものとあるべきやを知りたし。之を測りて後之が證書を作り置くんを欲するあり。我等人間は脆き命を有せるものをあれば、何時死ぬとも定まらざるものあり。足下等は親切ある人々にして、我に土地を與へ給ふとも、足下の子孫に到りて、之を我より取り去ふんとするのも知れざるあり。」

長者は笑ひて「我等は足下に所有の權を與へて如何ある堅き證書にても、作り置くべし」と云へり。

パホムは云へり。「我れ、一人の商人が、足下を訪うて、足下より土地を貰ひ、登記の證を濟せりと聞きたり。我れは、其如く爲し賜はんことを希ふ」

長者はパホムの云へし事を解しぬ。而して云へり「然り、其如く爲すべし。我等は一人の書記を有すれば、共に市街に行きて、必要ある證書を作りて調印すべし」

「而して其價格は如何程なるべきや」とパホムは問へり。

「我等は唯一の相場を有す、一日に一千ルーブル」

パホムは解することを得ざりき。「そは、幾許のデシテチンの事なるべきや」と彼は問へり。

「我等は土地を測る事かとは知らざるもの共なり」と長者は云へり「我等の價は日によりて定むるを常とす。一日の内に足下が歩行し得るだけの周圍の内の土地は足下のものなり。され我等が測量の方法なり。而して其價は二千ルーブル」。

パホムは驚きて「そは非常に大なるもれあるべし」と云へり。「人は一日の内に、廣大ある周圍を作るよとを得べければ。」

長者は笑ひぬ。「凡てそは足下のものたるべし。記憶せられよ、即ち、若し、足下が歩き出したる處まで其日のうちに歸ること能はずは、足下は其金を沒收せられても苦しからずと定めざるべからず。」

如何にして、我は、何處に向つて行くべきやを知るべきか」

「我等は。足下が發したる處に止まるべし。足下は歩きながら環を作らるべし。我等の人々は馬にて足下の後より行くべし。何處にもあれ。足下の示す處に杭を打つべし。あこにて足下は其杭より杭の間を耕すべし。足下は出来るだけ、大なる周圍を作るを得べし。たゞ、足下は日没までに、必らず、歸り來ることを忘るべからず。足下の環を作りて歩きたる内の土地は皆足下のものたるべし。」

パホムは之に同意して明朝、早く立たんとを定めぬ。彼等は共に談笑し、再び茶とクリームスを飲み、羊肉を喫しゑる後、バシユキル人と共に明朝、日出前に或る場所にて會せんとを約し、

夜にかりてパホムは羽毛の床の上に身を置きぬ。

七

パホムは心地好き床の上に上り、手足を伸ばして休みたれど、眠ること能はざりき。彼は土地のこと、それを如何にすべきや否やの事を考へ居たりなり。「これ實に、神が預め約して賜はりたる地なり」と思ひき、「我れ容易く五十グエルストの周圍を作ることを得べし。かくて我は何人にも見下げらるゝことおのふん。我れ牡牛の二群を買ふべし。二人の作男を雇入るべし。尤も良き土地を耕し、餘は牧場となすべし」

彼は眠ること能はざりき。たゞ、夜明け前に、しばし、微睡むとを得たりしのみ。彼れ、自らまどろみぬと思ふや否や、夢を見たりき。彼は其天幕の内に臥したるとき、何人か、外にて笑へるを聞きぬ。誰れなるやを見んとて出でて、長者が雙手を以て腹を抱ひながら、絶倒せんとて大笑せるを見き。パホムは近きて、何が左程に可笑きぞと問ひしが、其時には、長者にあらざして、曾てパホムの家に立ち留まり、此土地の事を語りたる商人とあり居れるを見き、いつの間此處に來りしぞと問ひしが、其時は商人はいつの間にか變つて、曾て彼れの家に休息したりし農夫とあれり。此農夫忽ち又變つて角と蹄とを有せる惡魔とありて猶笑ひ居れり。「何を見て笑ひ居るにや」とパホムは訝り思へり。彼は近きて、たゞシャツとズボン下たを穿きたるのみにて、裸跣になり、恐ろしく眞青になりて地に倒れたる男あるを見き。愈々近きて之を見しに、其倒れたる人は正しく己れ自身なることを見たり。ハツと思ひしと共に自が覺めたり。「不可思議なる夢

を見るものゝあと」思ひながら、外を見れば、既に夜は白々と明け離れんとせり。彼は今、起き行きて、人々を起すべき時の來りしとを知れり。

八

パホムは起き出でたり。彼の作男を起して用意せしめ、次にバシユキル人等を起さんが爲め、出で行き「起つべき時は來たるぞ」と云へり。人々は起き出で、集り、長者も來りぬ。彼等は又クーミスを飲み初め、パホムに茶を薦めたり。パホムは之を辭して云へるやう「時刻も近きたれば、もはや路に上るべきにあらずや」

バシユキル人等是用意し、馬にて發せり。パホムは作男と馬車にて隨ひ行けり。彼等は小高き處に着きしとき、日は正に明け放れんとせり。彼等は一つの岳に登り、車より下り、馬より下りて一團を作りぬ。長者は、パホムに此處より遙かまで指して曰く、「凡て此等は、我等のものなり、勝手に撰ばれよ。」

パホムの目は輝きぬ。如何に奇麗にして、豊饒ある手の掌の如く、平坦ある牧場あるよ。稍低き處あれば、そこには種々の植物高く生え出で、之を隠し、草は人の胸程の高さに生えたり。長者は毛帽を取り、岳の頂上に之を置けり。

「此處に標を置くべし、」彼は云へり「足下の金を其上に置き給へ。足下の作男は此にありて之を守るべし、此處より出で、此處に歸るべし。足下の作り給ふ圓周の内は、凡て足下のものなり」

パホムは金を取りて帽の上に置けり。外套を脱ぎ帯を締め直し、麴包を入れたる袋を胸くしに入れ、帯には、ブランドーを入れたる吸筒を結び、靴の紐を締め直して、さて立つやうに用意せり。彼は何れに向つて行く方宜きやと思ひ惑へり。此土地は何れも良く見えたればなり。「何處も同トあるべし」と彼は思へり「我れは、太陽の昇る方に向つて進まん」彼は今東に向つて立ち、太陽が地平線を出づるを待てり。「一刻も時間を失ふてはならず、涼しき間に歩く方易し」と、彼は考ひぬ。

馬に乗りたる人々は岡の上に登りてパホムの后へにならびたり。日が地平線の上に現はれたるや否や、パホムは進み出でぬ。馬に乗りたる人々は後につきて行けり。初めの内は、稍々徐ろに行き、五ヴェルスト行きたる後、彼は杭を打たしめぬ、次第に進むに随ふて速方を増し、一ヴェルスト行きて又杭を打たしめぬ。彼は日を望みぬ。岳は未だ見え、其上にある人々も見えたり。パホムは凡て五ヴェルストも行きたふんと想ひぬ。又行きて五ヴェルストを増しぬ。彼は熱くありたれば上着を取り去りぬ。又行きて五ヴェルストを増しぬ。日は熱し來れり。彼は日脚を見て、今少食を爲すべき時になりたるを見き。

「二日の四分の一は過ぎ去りぬ。而して尙四分の二を剩せり、と彼は思ひぬ」向きを換ゆるには未だ早し。先づ靴を脱ぐべし。」彼は坐して靴を取り去り、再び進みぬ。今は歩く事も稍容易くかれり「今一つ、五ヴェルストを進みなば、左に曲るべし。此邊りは良き處あり。捨つるに惜しきものなり。行けば行く程益々良くあるやうなり。」彼は猶眞直に行けり。元の岳は今殆んど見えぬ程になり、其上の人は蟻の如くに見ゆるのみ。「此方向は充分歩きたれば、今方向を換へざるべうならず、あゝ、暑くなりて、渴きたることよ」と云ひつゝ、吸筒を取りて、一盃を飲み、杭を打たしめ、左に折れて曲れり。彼が進む毎に、日は熱くかり増れり、草は愈々高くあり、彼自身は、益々疲勞を覺え來りぬ。日脚を見れば最早晝飯の頃なり。彼は少しの麴包を立ちながら食ひしが、休むことはせざりき。「一たび坐すれば、直ちに倒れて我知らず眠るべし」と思ひしが故あり。

彼は暫し立ちのみにて直ちに進みたり、初めは食物の爲めに少し易らかに進むとを得たりしが、今や日は益々暑くなり、彼は疲れて眠くおれり。「一時間の辛抱は一生の樂になると」彼は思ひき。彼は十ヴェルストだけ、此方向に進み、正に左に折れんとせしとき、豊なる濕地を見出しぬ。此處を捨つるは惜しきものなり、麻などは、かゝる處に能く生長するものなり」と思ひながら猶進みぬ。彼は此窪みたる地を取りて、杭を打たしめ、第二の角を曲れり。岳の上の人は、殆んど見えずなれり。「我れ少し餘計に幅を取り過ぎたり。今度のは短くして置くべし」と思案しぬ。日は既に日中あり。彼は第三邊に於て、二ヴェルストを行きしのみ、十五ヴェルストは猶もどの如く残り。「我れ此土地を四角あるもれとせずと能はざれば、今より直線に取りて岳の方に行くべし、此れにて澤山なり。今や彼は一直線に岳に向ひて進めり。

九

彼は疲れ果てたり。彼の足は痲み、歩行は確かならずなりぬ。彼は休まんと欲したれども、

日没までに、岳の上に達し得ざらんとを恐れて、敢て能はざりき。太陽は毫しも待ち呉れざるあり。恰も何人う急がし居るが如く沈みつゝあるなり。

「我れ測り損て餘計に取り過ごたふずや」とパホムは思へり「嗚呼、若し、後るれば如何せん、岳迄は猶遙かに遠し。我れ疲れ果てたり。我が金は没收せられたるべきの、否、我れは奮發せざるべからず。」

彼れは走り出せり。彼れの足よりは血流れたり。猶彼は休まざれども、道は猶遠し。彼は上衣を捨て、靴を捨て、帽子を捨てたり。「嗚呼、我れ貪り過ぎたるが爲めに、遂に凡てを失ひ了りぬ」彼れ思へり「遂に日没前に岳の上に達すると、能はず。」而も猶其進行を續けたり。

彼れのシャツとズボン下とは其躰に固着せり。彼れの肺には叫喚の響きあり。彼れの口中は燃ゆるが如し。胸は早鐘をつくが如く足は彼を支ふること殆んど能はざるに到れり。彼は今其土地の事を毫も思はず。たゞ生命を思ひ居るのみ。彼は死することを欲せざりしが、而も留まると能はざりき。「若し我れ今、此處まで走り通したるのち、止まらば、人は我を嘲り笑はん」

彼れ、人々の叫びと、馬蹄の音とを聞きぬ。彼等の叫びは彼の動氣を益々早くせしめたり。彼は將さに消えんとする程の力に於て走り續けたり。日は沈みて將さに地平線に近かんとして、唯僅かを餘すのみ。彼は岳の上の人々が手を振りて彼を勵し居るを見たり。彼は金を置きたる毛皮の帽子を見たり。彼れは其腹を抱きて地上に坐せる長者を見たり。今俄然として彼れは昨夜の夢を想ひ起しぬ。「嗚呼我れ土地を多く有すと雖も、遂に其上に暮らすことを得べきか、嗚呼、萬

事休みぬ。」のく思ひあがふ、猶其行を續けぬ。

彼れは太陽を一瞥しぬ。太陽は赤く大きく見えて、其一端將さに地平線に近かんとして。彼は岳に達しぬ。——太陽は没しぬ。パホムは絶望して「萬事休みぬ」と思へぬ。其時太陽は彼の上に輝きぬ。今彼は岳の下にて太陽は沈みたるが如く見えしも、岳の上にては猶見ゆることを見たり。彼は走りぬ。岳の頂上に達したるや彼れは帽子を見ぬ。彼は之を捕へんとして、轉び倒れぬ。倒れたると共に其手が帽子に達したり。

「萬——歳長者は云へり、足下は廣大なる土地を有す。」

パホムは彼を助け起さんとして走り寄りし時、彼の口より血のはゞぎ出でたるを見き。パホムは最早死したるをかり。作男はさゞ驚きに驚きぬ。

地上に蹲居して、彼の腹を抱へ居たる長者は啞然として大笑せり。遂に、立ちて鍬を取り、パホムの作男に渡して曰く「彼を葬れ。」

パシユキル人等は去りぬ。パホムの作男のみ残りぬ。彼は此廣漠たる原野の内、パホムを埋むるに適當したる僅うに三アルシテ(六尺)の長さの墓を掘りて、彼を葬りぬ。

新体詩

松葉集

白貴子

春と少女

枯野のすゑの若草や

木々の梢は芽より

春はいち早く梅が枝の

ほゝゑみ初めし蕾より

たのしき春はほころびぬ

うまざげのなす初醉は

春のあゝたの光より

かほものすかにあたゝかく

紅させるのほばせに

乙女の愛はもえ初めぬ

あゝ美はしの乙女子と

蕾ゆのしきこの花と

春の姿のろうたさは

折りて数ふる指の上に

いつれが長きいつれ短のき

夢の面影

胸にやどれる面影の

ゑみむくみてよべのこと

たこる夢路にいてまして

今宵もわれを慰めよ

たまやらにても語らひて

胸の迷をはらさなむ

千々の亂をとゝのへん

あはれつきせぬもれなれど

浮草

根もあきものゝあまさは

宿と定めんかげもあく

水のまにゝ流れつゝ

あちらこちらと漂へり

朝は水際の草かげに

いふふと見せて夕はまた

風のまにゝまうせつゝ

いづへともなく移りゆく

今日うれしげにむつべとも

あすはあれて仇となる

人心さへらくあるに

あなかどがめん浮草を

和歌

匣掃除

三

諸

ひたきふにあびく風見ののらす羽はあれも思ひはありぬべき世を

かく山も思ふまゝにはあらずとかいふことゝろみに市にまらふ

京の歳暮

雪まよふ空さだめなく雪ちりて川風さむく年々れぬべし

京の春

雪ちりすむ比叡よりおくに雪見えて木は芽けふれり加茂の川のち

興津

清見がた夕なみあふし釣やめてかへれわがせて春うるくとも

遠州灘

わたつみの何をいかりて神代よりたけりてやまぬとほどふみ灘
寒稽古 愛花

籠手のぎて水吹きかくる腕の上にはいはちぢるし紫のいろ
ますくをが面引きとばめ大釜をうちのこみつゝ白粥すゝる
太刀杖に二の敵來るをわがまてば一の敵水をのみにゆくらん
太刀音はまばらになりぬ雪あかりまとりて淡き燈火の影
太刀柄に雪少し降る朝を早み森くろき方に星ぞまたゝく
數の文字を上におきてよめる春歌十三首 定

郎

一年の初日むかへてうれしくも千代の聲する門の松風
二見瀉霞たあひき遠山と見しはいつこそ沖つ白波
三吉野は櫻さくらん山すそを流るゝ水の香に匂ふなる
四方の海内外の人のわかちあく千代をことほぐ時は來にけり
五十鈴川うつれる松は影にさへ浪風たゝぬ御代は見えけり
六糸の琴の音までも霞めればあつまれ空をいつこと定めん
七重八重今をさかりと咲く梅にちく鶯の聲れとどけさ
八重つはき春來にけりと神垣の木の葉のくれに咲にけるかな
九重の雲井はるかにのほるふん雲雀は空に聲ばうりして

十あまり三つの國より望むてふ富士の柴山霞たあひく
百千鳥さへつる野邊のゆくしくて霞をたこり今日もくふしつ
千代を經し松の梢になく田つの聲ものどけき君の代の春
萬代も縁かはらぬ高砂の相生松にすめるとも鶴

俳句

冬季雜咏 紫影

初冬の日南に俵もやしけり
ステツキの三十棒や雪達磨
姑の炬燵を覗む火鉢哉
顔見世や三座の太鼓霜冴せる
伊左工門の紙子姿や夕時雨
水漬の戀も願も無かりけり
よその子を愛する妻やクリスマス
雨戸打つて狸の去りし櫓火哉
鳥さしの落葉を踏んで戻りけり

愛花

水漢は眼鏡を探す翁哉

無哉

寒聲の小歌にまじる鼓哉

河豚くふてねられぬ宵の雨淋

顔見世の白粉はげし小役哉

山賊の毛脛をあぶる櫓火哉

小一里の昨や雪車は乗心

探り得し永樂錢や古火鉢

寒聲は聊かふるふ覺束を

湯婆冷えて古を想ふ癩の痕

櫓は火に山太刀とぎて居る男哉

霜の夜や土間に灯を置き藁を打つ

石垣に水の減りゆや冬の川

南天にみづれて笹に霰哉

櫓の火に櫓をつきこむ火の粉哉

輝のいたさをこらへかしくなる

寒聲や島原よぎる頬冠り

はぶきは十夜戻りも見えにけり

光夢

文漪

松柳甫吳
實露水鐵

樽すれば其人が来る頭巾哉
欠落の笠に傾く冬日哉
牢興の綱にたまりし霞哉

漢文

長崎縣師範學記

村上 函 峰

明治六年。國家詔府縣立師範學。蓋學弟子必須師範其人。師而不得其人。弟子何以受教。是先所以養成爲師者也。翌年三月。長崎縣始設之勝山街。明治十年。徙之新街。爾後生徒益多。教化益進。於是朝野紳士。咸議以爲此地狹隘。規模不。因改下地於櫻馬場。結構布置。克循其則。門序正位。本館在。其左爲女子房舍。其下爲幼稚園。與附屬小學。相對東西。男子房舍。在本館後。與理化學室。相列。規模之宏。輪奐之美。莫不悉其工焉。且地背古城址。面娥眉笠頭諸嶺。港灣之勝。來聳目睫。亦足以養氣休神矣。經始于明治廿一年之秋。去年春三月告竣。凡用工四萬一千六百九人。用財四萬九千八百八圓。越五月某日。知事中野君落之。校長利根川君等。皆就次慶之。夫斯學之成。非上司有人而政舉教布。何以能使斯民重學發憤。以竭其力耶。孔子曰。工欲善其事。必先利其器。不唯爲觀之美。將以振起教學之本也。蓋本校者教學之本。而青莪域樸之盛。所由出也。教學之法。可不慎乎。抑教學之法。本之人性。右提左撕。薰陶琢磨。要使弟子達材成德而已。若夫由學失德性。則其

餘不足觀矣。明治廿三年冬十一月。皇帝詔天下。明大道。使國民知忠孝之可重也。嗚呼大哉詔也。此歷代帝王之治天下國家之本。而教學之淵源也。方今天下大小學之盛。非昔日之比也。然而至道義之可重。則或有不及焉者。此斯詔所以由出也。苟為師者。以此為基。弟子守此弗失。庶幾乎擴張大道。以遵聖旨矣。珍休以不似。承乏教諭。及斯學之成。中心怡懌。有不能自己于言者。乃擬其本末。并記將來之所望。以告弟子。維時明治廿四年五月某日也。

義經景時爭逆櫓論

明石華陵

有非常之人。而後有非常之功。非常之功。聖人懼焉。何則乘一旦之利。而忘其後患也。天之將亡其人也。必先之以美利。誘之以得志。使之有功。驕將侮士。以至于亡。項籍亡于垓下。韓信不全終。皆因此術也。故智者知之于未萌。使其勢不窮。有功而不處焉。然後功成而身得全也。(加藤老云)夫景時進逆櫓之說也。如無策者。人皆以為怯也。然見可而進。見不可而退。雖孫吳之術。不過如是。謂之為怯。非知兵者也。且景時之意不在逆櫓。義經赴西海也。斃義仲于一戰。舉兵而長驅。所向皆勝。易於破竹。及襲一谷。驅馬下絕壁。挺身率眾。平軍驚走。如驅群羊。皆逃入海。可謂非常之功也。義經不懼之。欲直進斃鯨鯢于一擊之間。其勢駭々乎不可測焉。夫景時者深憂于茲。於是進循常和平之策。以沮夫剛悍之氣。忿戾激怒。以折其銳進之意。蓋彼驕傲不遜之心去矣。然後得全其功。故曰知進不知退。落武耳。(又云引景時語實其事絕巧手段) 鄢陵之役。楚晨壓晉軍而陣。諸將請從之。范

文子獨不欲戰。晉卒大敗楚。蘇子瞻論之曰。文子疑如怯而無謀者矣。然不及三年。晉國大亂。鄢陵役使之然也。(又云着此一節文字不切迫。論意却入細。且夫立非常之功。而身悅驕人。其禍不廻踵焉。是此文家所謂逆術法。彼景時用此法。) 景時以為義經有驕然自悅之心。故深折之。使之以全軍收其功也。不然景時歲已六十。以親近老鍊之士。充監軍之撰。而進怯懦無謀之策。與若輩爭其可否耶。(又云揣摩攻擊。無堅不破。何等筆力。) 吾觀賴朝之用心。亦皆所以制義經剛悍之氣。令範賴之善柔分其軍。又令景時之親近為監軍。一昔漢高帝語呂后謂。陳平難獨任。周勃為大尉。可以助之。夫以陳平之智。任天下之事。豈有難事。唯恐其輕發耳。故勃之重厚以鎮之也。(又云此節暗與前項藉。賴朝恐義經之輕發。故豫為之計。以全其功也。然義經不覺之。卒以叛死。其術已無濟矣。蓋因景時之策不用。而驕慢之心不折也。)(又云。斷得皆明)

高木習齋評。有抑揚。有起伏。又有波瀾。余竊以為蘇家口吻似此篇。可珍可重。又評。此論實出于人意表。敬服敬服。

村山冥々評。源廷尉之輕發銳進。雖不令終。而其始所以速成功者亦在于此也。景時之姦。讒蒲公。構廷尉。陷正直忠孝之崑山之外。如熊谷直實之斷髮出家之類。不暇于枚舉。故其父子屠戮于狐疇。則天下拍手呼快。乃其兇惡昭々乎不可蔽矣。斯篇以景時構陷廷尉之根源回護之。反為挾持救濟廷尉。所謂出于人意表者。乃是文家狡獪之手段。林西仲評老蘇管仲論曰。蘇家立論。多自騁筆力。未必功當事情。余於此論亦云。

有井進齋評。翻案待妙甚。蓋自子瞻子房論來。加藤櫻老評。議論縱橫。筆力銳利。與義經兵法相適。

木原老谷評。一瀉千里。鯨駭醜怪。

俱利伽羅記行

醉墨居士

往年秋。與高橋詞兄。詣四條。客歲與翠巖一水。遊於南山。今春以神武佳節。欲登俱利伽羅嶺。則與鳩園約曉發。偶春雨氣惱猶在。少焉鳩園來曰。僕夢君獨衝雨而出。是以來。余曰雨行不如晴行。請待明日。少選天稍霽。輕裝與共發。既而天復陰。雨疎風斜。經森本過太田。梅花一枝。斜出于寺門。鶯聲睨睨。踞于檐端而少憩。抵于津幡驛。此地俱利伽羅道中之小都會也。從此右折。過杉瀨而至竹橋。道為岐焉。一則新路。一則舊路。乃取其舊者。阪路羊腸之間。老樹森々。荆榛沒脚。殆疑無路。雨亦頻至。稍進認茅屋於山腹。大呼問路。鼓勇而登。路險泥深。一步一喘。漸達於丘巔。四顧豁然。北則煙波萬里。浦淑錯陳。布帆明滅。似浮鷗者。即河北湖也。履鳥之下。為新路。蟻馬豆人。紛錯如織。菜圃麥壟。黃綠相映。其超曠閑豁之景。攢列眉睫。下瞰則絕壁千丈。刀則斧劈。岩骨將倒抱松。松將轉擁石。奇觀無窮。乃顧曰上文之法其一聚於此歟。其布置齊整。如湖景。其淡雅婉約。如遠林廣野。其慷慨悲愴。如斷岸絕壁。將倒不倒。將碎不碎。則臻于妙境也必矣。鳩園笑曰。古人既言。復何贅。君常擬文豪而說文。擬英雄而述懷。此余所不屑也。應曰。抑僕之所為。自深意存焉。夫欲為文豪。則無如擬文豪。欲為英雄。則無如擬英雄。大鵬得風。則一搏九萬程。然而其不得風。伍燕雀鷓鴣耳。僕何以異焉。鳩園莞爾。余亦顧笑。乃高吟憑杖而行。路愈隘愈險。一詩以寫真。

巖角泉音咽。山頭松韻吟。聲々和雨滴。似語古兼今。

淒涼之氣沁骨。羊腸之路惱脚。欲進而不能。叩茅茨請茶。胸間始覺爽。鼓勇而躋。陰雨濛々。鳥飛不下。獸挺亡群。悲風落木。聲々相咽。豁々然。轟々然。如萬馬之馳突。似三軍之叱咤。嶺吼谷應。一望慘澹。魂冷魄死。草中認一片斷碑。拂莓苔而讀。則蕉翁俳句也。

義仲乃寐覺乃登古加月悲
於是。多年繙史之感大發

我亦平生愛遠遊。登臨此日快吟眸。躑躅滿山留戰血。芭蕉殘碣仰風流。

危路淒煙人跡絕。長天猛雨鳥飛愁。無端搔觸興亡恨。四月陰雲似暮秋。

更攀小丘南望。則峻峯險嶽。連綿相疊。若攀將軍之怒。似李謫僊之醉。窳然而峙。崒然而聳者。為礪波山。轉眸則培塿羅列。若虎豹之相鬪。春筍之拔壤。津幡川一條。滾々破煙靄而流。俯視則削壁千仞。拳礪礪。纔失一步。則為壑底之鬼。傳聞。此源平兩軍會戰之地也。宜哉。天時不如地利。此險既歸源氏。則平軍之大敗。不足怪也。悄然拭眼而去。既峻坂百折。泥滑不可行。鳩園慰余曰。凡吊古霽日不如雨時。請他日卜雨時。更弔安宅。余喜鼓勇而步。遇野翁曰。石坂之西。有巴妃遺蹟。乃行訪焉。丘上雙松。翳鬱衝天。荆榛填路難攀。書一詩貼松樹。

蹶起扶失摧敵鋒。斯姬今古女中宗。當年拔木無雙勇。留在兩株翳鬱松。

石坂則越中之地也。緩步至埴生。有一祠曰八幡宮。舊加藩之所崇祀。堂宇宏壯。石礎數十級。極美觀。老松鬱葱之間。山櫻點綴。黃鶯弄喉。亦以足慰旅情。請觀其所藏寶物。曰義仲起請文一通。

塵滅難讀。曰鏑矢一箇。義仲之遺物也。曰成政之軍扇及帶刀。刀甚長。曰小牧配陣之記名幅二卷。曰信玄手簡一通。拜畢而去。天色空濛。煙雨霏微。至今石動。己五時。鳩園謂曰。時恰好。請直歸。余拒曰。脚疲而神勞如之何。竟投山田亭。浴後酌酒。十時就寢。夢魂猶髣髴於軍馬倥傯之間。驚覺則四憐寂々。孤燈影暗。曉鐘來枕。翌朝八時。從新路而發。陰雨濛々。咫尺不辨。行步頗艱。經竹橋津幡而歸寓則己三時矣。浴畢而作之記。偶探匣底。繙舊稿芳野遊記。雨景慘澹與此行相似。」

讀說難篇

竹溪李

文之感動人心。何其深乎。志士爲之泣。懦夫爲之起。一片飛檄。立鳩十萬師。數行文宇。確爲天下法。雖蘇張之辯。賁育之勇。無加之。余曾讀說難篇。嘆曰。自古俊邁英雄之士。抱不世出之才。百事不如意。空吞恨而隕地下者。何限。雖然。至如韓非。身貴而陷于逆境。學深而口吃言拙。其所說不用者。則其類幾稀矣。當此時韓室既衰。重臣陸梁。國運將逼於累卵之危。宗室貴戚。概懷顧望。而韓非忠憤不措。說富國之利。述排姦之術。其言零々諤々。不屈不撓。一發爲孤憤五蠹。再發爲內外儲。慷慨之氣。忠憤之言。溢而遂爲說難篇。秦五曾讀之。嘆曰。余得謁此人。而聽其說。雖死不恨也。秦則韓之敵也。敵國而如此。文之感動人心。何其深也。古人曰。至誠通神明。忠憤啼鬼神。杲然。使韓非無忠憤之氣。與慷慨不言。則後世焉知。有韓非者乎。有韓非而有說難篇。有說難篇。而千載之下。其名終不朽矣。宜哉。文者之朽之盛事。其人雖去。其世雖變。其文則

不朽也。嗚呼世衰道微。節義蕩然。伶仃姦滑爲賢。樸茂質直爲愚。徒使此忠憤至誠之士。迤邐坎河。呻吟於囹圄。今讀此篇。而無淚者。殆非人也。且如此說之難。不可不知之句。則鬱積之氣。自所發。又至其言今以吾言。爲宰虜。而可以聽用。而振世。此非能仕之所耻也。則忠憤憂國之狀。歷々如見。然而腐儒。或以孔孟之道。妄律之。則謬矣。嘗聞昔者。曹操見陳琳所作之檄。頭痛頓瘳。余讀此篇。有萬感彙集。而不可禁者。是即與非其慷慨之氣。與忠憤之言。使然。何能至此乎。聊書所感云爾。

天保先生傳

石黑子

先生姓銅名錢。字一白天保其號也。天保六年九月。生於江戶。故號云。爲人外樞圓而內正方。補缺賑乏。應接萬務。融通如流。幕府賞其功。賜祿一百。於是先生名聲大著。其後十餘年。偶罹時疫。不任其職。卒減其俸二十。從此人罵其軀大而祿小。呼曰。文錢。明治中興。大臣議將沒其祿。然其名既著。而功亦不渺。故久未決。後廿餘年先生復病大革。遂死。行年僅五十有余云。石黑子曰。生者必死。盛者必衰。是天地之理。固不足怪焉。然如先生周旋奮馳。人固期其萬歲。而不能令其終。可堪嘆哉。雖然金貨銀錢楮幣氏。以其支族。相共與國利圖民福。能繼先生之業。橫目豎鼻之民。無一而不蒙其澤者。然則先生雖死可無恨矣。何妄問是非於天地哉。

漢詩

次岐山先生韻

月聲迂人

青松深繞山人宅。微徑通幽世塵隔。詩成長嘯鶴夢驚。一輪明月中庭白。

松

風鑿雪虐臥龍容。千歲孤標黛色濃。地僻何惟免斤斧。蒼髯終不辱秦封。

宿山寺

托宿招提塵外天。投名蓮社想當年。梵燈黯淡更將半。古佛前頭被醉眠。

讀日清戰史

綠蘋香暖得春光。事往星移嘆逝川。禹域山河寒鬼雨。箕封草木寂人煙。故園魂返知何日。一戰功成不記年。殘碣斷碑誰弔迹。愁來一夜涕漣々。

雪中捕魚圖

梅鴻逸人

千里同雲暗。江山欲雪天。破簷鳴烈霰。驚鴨掠寒煙。日暮網時下。

魚潛氷自堅。酒家扉未掩。燈照竹灣西。

蝦夷謠 並小引

寒霄燈下看某氏東遊雜記摺據事關蝦夷者成詩十二首命題曰蝦夷謠蓋亦輶軒探風之遺意也
一年生計在春漁。舉島移來海畔廬。黍稷稻梁何種暇。烟波萬頃送鯁魚。然諾一言金鐵如。不須衝斗與文書。蒙莊相看應驚喜。猶似乾坤關闕初。

旅人結隊過山程。檜樹陰中澗水鳴。知有老罷巖隙睨。欽鞭打馬不曾行。毛人世々有佳兒。臥病慈親感孝思。招請老巫來唱咒。枕頭寶器獲多時。鯁鮭侯過梅村閑。洗岸秋潮寂寞還。昨夜風刀似剪面。雪花先到女寒山。弱弓小矢競驅馳。鶴樣踰躑舞女夷。賀客滿堂歡笑湧。儂家今日射熊兒。矢頭塗藥々香新。盈尺髭鬚六尺身。山徑相遭不回避。老羆却是畏毛人。北溟冬月絕商船。凍合寒波石樣堅。歸日最先誇等輩。蝦夷島裡作新年。漂流宦女到邊隅。島犬慇懃給百須。生長子孫成部落。武陵蠻祖是槃瓠。神州遁跡入蝦夷。聲望依然到處隆。見說東西象髻虜。于今飲食祭源公。跋扈極東千島中。釋仙亦是一時雄。心碑傳得名聲遠。絕勝當年磐具公。紫石稜々眼力殊。肯將沃土付榛蕪。九原今日君應溟。十有餘州入版圖。
新井白石君初編蝦夷史而君詩云蒼顏欽鬢如銀紫石稜々雷射人故及第十二首

批評

北辰會雜誌第二十五號の批評と希望

學山人

旬餘の冬暇短かしとせず、雪天に爐を擁し心を汁合に飛揚せしむれば、神氣平らかに情緒空漠と

して渺漫なる大海の如く朗乎たる蒼穹の如し、時に北辰誌を取り通讀して意に會するものあり、會毛頰を取り紙に落して其心に映する所を寫し、以て餘白を借らんとす、顧みれば野子文筆疎く心位卑し、如何せん、掲げんか否や、沈思久しくして有耶無耶の間に章を爲すに至れり、遂に決然之を投ず、諸子乞ふ余り過言の罪を許し、其述ぶる所を諒察あらん事を、

一表 裝

例によりて北辰會雜誌といへる題號を見る、抑夫れ北辰や、天の一方に居を占先、衆星を率ゐて地球の中心を爲し、地軸は常に此に向ひて萬世に亘り動く事少なし、蒼海日既に没し、茫洋として水天連り、一の山峯海角の目を遮る事なく、洪波百里に布き、鯨群時に水面を破る際、彷徨せる航海者に針路を與ふるも亦此の北辰あり、蓋し題號を此の星に取れる亦謂ふべきにしも非ならず、余其何人なりしを知らずと雖も、感謝を此の人に歸する事多し、且つ字体強固、北辰男子の北辰と爲すに足るべし、勉矣、

二論 說

冊を開けば、第一に論說欄あり、嗚呼論說々々、吾人は無限の感慨に勝へず、由來論說欄は文學界の占有物たり、心を宇宙の研究に委ね、宇宙の大經綸に自住する士何ぞ此の欄を利用せざる、精密學科の奧秘神契豈此欄に雄飛せざるべけんや、人智は科學と文學の二者を須らて以て完全なる發達を致すべきもれあり、然るに此欄の科學に輕ろきは、抑も北辰の北辰たる所以に對して、一点は愧恥あうらざるを得んや、余輩は紅涙を垂れて科學界の諸士に乞ふ、希くば其研究の結果

を惜むなく、載せて以て本誌頭上の花を添へられん事を、嗚呼誰の吾校のニウトンぞ、誰う吾校のケブレルを、予輩此に至りて洪歡は情なきを得んや、歎洪の情なきを得んや。

精神的養生法に就き、先生常に一頭角あり、予輩は彷彿の間に唯山の如き者あるを見るを得るのみ、其養生法を訓へらる、事懇に、其立命の之を説うる、事切あり、誦讀數回、以て座右の銘にかへん。

戦争論 老太ある題號の下に、縷々たる長文の下に、數回連結、萬丈の氣焔を吐露せられたる編者の熱心と懇切とは余輩の忘るゝ能はざる所、他日完結を待ちていふ所あふんとす。

老子管窺 一篇長文、載籍亦博し、徒に皮想は評を試みんより、寧ろ此に觸れざるに如かず。

三史 傳

史海指針 先生常に本欄に中堅たり、滄々として其書目を擧げらるゝと詳に、一讀以て著者と其書と、恰も座右にあるが如きを覺ゆ。

四雜 錄

二篇は英文、印刷屋は盡力により植字稍慣れて見るに足る、いで横行を以て馬評を下さんとす、

“On University Rowing”.

Our professor had explained kindly and precisely the scenes of University Rowing and Boats. We got a good deal of idea about this. Having read it through, we remind that how hard the training was, and consequently, how joyful the gaining skill be. We put a strong hope to our Rowing

Society to promote the rowing as voluntarily as being done by those in Cambridge. Lastly we beg our professor to explain kindly a lot of proper words for rowing, because we feel some difficulty by reading that piece through, owing to the ofener occurrence of technical terms.

“My Opinion”

What an indignant man you are! We heartily express our sympathy to you. Indeed your country produced many “great men”, as you call it, half a century before. We know their glory and merits, and believe that they shall last forever. But see! The circulation of worldly tide does not permit the “grease men” to come from single districts; but they come from every district in turn. History gives good proofs for it. So there is no reason to lament so much about the lack of “great men”. Please do not grieve yourself, or your nervous character will heighten the degree of nervousness. We heard that the people in N. E. countries are provided with steady muscle and resolute mind; so they possess all the elements to become “great”, but the chance does not allow them to do so. Moreover our society is in no imminent need of “great men”, but wants industrious men, truthful men, and hard working men, in short, good private citizens. It is sufficient to have one or two “great men” in one age.

If the energy to become “great” be directed to become a good citizen, one will, We believe, never fail one's duty. Hence we think it is far better to form a great number of good citizens, than to give only one or two “great men”, and your country has a great deal of good citizens. Is it not

a comfortable fact?

●●●●● 外國語を見る上の心得、辭書を引く時の注意 ●●●●● 外國語を學ぶんには、ヴォカビュラリーを廣くすると、言葉^を耳慣^ふすを以て最要とす、此の編注意を此に與ふるよと多し、就中新言語に接する毎に其エチモロジ^ーを知れといへるは尤も其れ然るを覺ゆ、最後の一章は誠に以心傳心れ妙所に

して、身躬ら其境に遊ばされば知る事能はざるべし、
●●●●● 厭世雜觀 行文流暢、一讀索雨たり、未だ完結に至らず、忿恨も理りあり、悲鳴も理りなり、絶叫も理りあり、人心の向ふ所方に然るべきを覺ゆ、理想の現實は到底人生に於て望むべからず、今來古往熱涙に咽びし人は洋の東西を問はず多々あらんのみ、人生は短く、生死は境は人力の及ぶ所にあらず、人類は僅に淨々たる宇宙進化の一分子れみ、一毫末のみ、喜ぶもよし、悲しむもよし、怒るもよし、狂ふもよし、唯心に一の満足を求めんのみ、理想を樂しめ、理想に遊べ、大悟に到達せよ、悲觀も喜觀もなごらんのみ、人生の不滅を期するも可あらん、自ら心を慰むれば可ならん、觀し來れば厭世もなく樂天もかし、噫。

●●●●● 初歸省 歸省の樂みは誰も同ト、蓋し君の此の編は歡極まりて筆頭に溢れし者、其路傍の景を叙する亦妙あり、中央の一篇裏面に文あり、畏らくば常に君の心根に躡る所あらんか、然れども奇想百出景を記るすとしては如何あらんか、暫く之を君に質す、人間到所有青山れ一句は壯快極まりなけれども、泣指雲間一点峯亦捨て難き思ひあり。

●●●●● 袖のはころび 君の衷心は本篇れ最初にあるか、其の縷々として志を述べ、上夫一生の業を定む

るや快、其嗚々たる慈母の愛を寫すや切、余輩は君に同情を寄す、最初の歌の口真似をして其を評せんり、乞ふ此を許せ、

行く路は陸も舟路もありといへど、直なる心ひとすぢのみち、次に道程を記する文、其妙前編「初歸省」に劣らず、時に或は和歌を交へ、恰も十六夜日記を閲するが如き感あり、猶最後の一首を借りて

ゆくりなき旅にしあれどこ一方も、まだ來む先もしるしとめばや、

五 文 苑

先づ雜録は之にて御免を蒙り歩みを文苑欄に移せば流石に千紫萬紅とまでは往りねど、欄中とり／＼の花の色は、互ひに其美を争ひ誌上一段の光彩を放ちぬ、されど、嘗て某の言へりし如く、北辰誌上の文苑欄は、案外寂索の傾あるは衆目の視る所あり、中にも新体詩の如きは其最も振はざる者あり、吾は將來の日本詩形として新体詩の發達を望むや甚た大なり、かの俳句の如き一種特得の妙趣ありといへども、雄渾正大の詩形にあらざるや明なり、詩人苟も泰西の文辭を嚙み、其雄渾正大の氣に驚きたらんもの、誰れ日本在來の詩形に對して其不完全を概せざらんものあらんや、彼新体詩は、此不平に迎へられ自由の調子によりて、以て詩人の渴を慰せんとはするもの也、我校友の士、試みに其富澹なる詩想を謳はんとせば、乞ふまた筆を新体詩につけよ、これ吾絶大の望あり、いでや此より玉葩彩辨を擇んで此批評に及ばんり、

山中小景 我れば斯文を以て欄中れ王花とするには、うらざる者なり、もし其故を疑はば暫く我言ふ所と聞け、さきに花樵一輩の文苑に勢力ありし時代に於ては、作者多く徒らに擬古の体に思を焦がし、耳遠き文字もて陳腐乾燥の内容を綯纏して耻ぢざりき、之に反して、斯文の作者は大に其趣を異にするものあり、其用語を問へば、勉めて難澁を避けて平易隱妥を旨とし、而かも幽遠雅醇の筆致は清新悠遠の文思と相須ちて、優に讀者をして其美と感せしむや深且つ靜なり、更らに文の筆裁を云へば、蜿蜒たる長江の春野を流るゝが如く、流水滔々として千里波あきか如し、しかも時に微風の起るれば漣波疊々として岸邊を洗ふが如き感あり、君社會を罵りて無味平板野卑となし、此が單調を破りて高尚ある境地に遊ばんとせば、宜しく先づ自然と契合せよと言ひ、山中の佳景を執りて、自然に於ける崇高と清靜とを歌ひぬ、もし試みに石を深潭に投ずれば月影碎け云々と云ひて、其靜寂の景を描くところ、流車の喧囂を配濟して一層深く其靜寂を思はせし技量は、さすがに奇抜あり、終りに山中の人を謂ふところ、暗に君が人生觀とさくが如し、過去といひ未來といふも其起点は現實にありと言ふ、これなう／＼に君が性情を窺ふに足るあり、吾人の理想は過去の二界を否定する能はざるも、其實行の發足点は確りに現實にあるや明かり、仙境、ピカーオフウエーキフィイルド中の一節を翻譯したるものかれは、其落想詞形の奈何は批評の要なし、只た能く圓滑の筆を以て、原文の意を遺憾なく新体詩に表はされたるを喜ぶ、翻譯の難は元より人の知る所、況んや美文の翻譯に於てをや、君が苦心の跡思ひやられていこゝ其勇氣を讀す、其原文の意の先づ遺憾なく譯せられたるは、斯詩の取る所にして、詞格の奇詭聲調の變化は斯詩の欠くる所なり、我誌新体詩の寂寞を訴ふるやすでに久し、君幸ひに斯界の牛耳とな

りて一段の進歩を期圖せよ、

和歌。先づ俳壇の明星として、仄かに其光を放てる紫影ぬしの和歌に接しぬ、其奇抜なる落想と清新なる聲調とは、世俗所謂歌人ある者の夢想も及ばざる所也。特に千萬の書のみかさねの一首と、描きいでしの一一首は、最趣味あるが如く、豪氣雄剽の氣塊勃々たり、次々に中村君の秋興は、三語ぬしと聲調に似て、や、舊套を脱したるものあり、吾れは君の歌を以て、他輩を凌ぐといふも、敢て諡美に非らざるを信す、

俳句。紫影先生の五句、さすが明星のものあれば皆々面白く讀まれぬ、吾敢てぬしの句を評して其趣味をけがさんはりしこけれど、「ステッキ」「伊佐衛門」の二句は先生の得意とする所に於て、特に后句の如き類は、他人の敢て真似する能はざる技あり、「栗ひろひ」「朝顔の露」「聲のけて」「栗焼きて」「白芙蓉」の五句は未だ幼稚のきふひあり、「朝寒や」「池水や」「時雨る、や」「鴨鳴くや」「落穂拾ふ」の五句は、句といふ名稱與へられざるべし、后の二句は稍や句うしけれども、其取合せ果して適當なるや疑はし、「蓮の實の二つ」「権は實の片手」「景物に飲櫃」「木犀の湯殿」移り住んで「曳船の綱」鹿き、て「帚木の風」「目うけて」の九句、各特種の趣味ありてよき句あり、特に「帚木の風」は時間を表はす所作者の得意なるべし、

漢文。斯壇の老将たる村上先生は、每號我誌の爲めに其雄篇を寄せられ、生等幸ひに其教示を得るは、以て永く忘るべうぶず、過俱利伽羅壑記は、文氣雄渾、字句洗練、辭に弛みなく、体に醜なし、其遊景は一讀鬚髯として眼前に飛躍し、綽尾の議論風發、をいへる先生の壯思を想ふに足る、

只た先生の爲めに、山壑の規模、補小にして先生の文思を鼓舞するに足らざりしを惜む、次々に記小遊は、雄健暢達の筆を以て、此勝遊を描寫し、多く讀者をして恍然其境に遊ばしめ、蕩然編を終るを覺えざらしむ、夫れ倭人の漢文とものゝる、多く文体に一種の和醜を帶ふるあるを信す、君の文亦此弊なきにあらず、我は此点に於て猶一層君の洗練を要す、然れども斯文れ如き、漢文の素養深き者に非すんは能はざる所、君幸ひに奔放縱横の筆を振ふて挺然漢文方今れ萎靡を醫せよ、

漢詩。木嬰君の詩皆氣を以て勝る、中にも書感の句は茫茫として百端支集し、君の性情を窺ふに足るものあり、もし文字の排置を論せば畢竟有憂慮れ五字を泛梗嘆漂蕩と改め、由來の二字を浮雲とせば、更らに多趣飛動の勢を増すに庶幾らんか、次に墨子軒の君は、詠史の技了を以て名と詩壇に専らにす、曾て秋蹟詞宗の君の詠史の才を推して、頼氏に比せしもの亦故なきに非ず、其吊橋本景岳墓は黯慘凄切をいへるに慟哭れ聲を聞くが如し、然れども愁百種、涙千行の句稚氣満々たるのみならず行(クダル)の字は陽韻ならずや、もし改めて慘愴苦心、那變志、呻吟、揮、淚、暗、吞、聲とせば如何、之に友して菅公は筆意暢達して正に老當を以て推すに足る、次に梅鳩君の越前途上の七古は、刻意山川の奇儉を模して環麗たる風物の飛動を見る、秋郊は四詩中の白眉なれども、且つて秋蹟詞宗の評言ありしを以て、更らに再び言ふの必要なけむ、秋湖月泛は、筆々凌空杳相を着せず、清醜を氷壺に濯ふの思あり、

雜報

新年辭

北斗天を周りて玄冥の故節を送り、東風地を拂ふて青陽の芳辰を啓けり、天鷄は三呼して舊年の夢を破り、紅暎赫々として影扶桑に上り、こゝに庚子の歳は來りぬ、仰けば、仙鶴蒼空に翺翔して高く瑞氣の雲に入り、俯せば。常緑の松影池水に映して萬古の色更らに新あり、嗚呼威ある哉靜ある哉、卒土の濱、誰か遙かに御溝を下拜せざるものあらんや、普天の下、誰か熙々たる惠風を謳はざるものあらんや、尾山城頭、游風荒れ雪花舞ふ處、復幸ひに斯芳辰に逢ふとを得たるは、蓋し萬乘の恩澤にあらずして何ぞや、視よ自嶽千秋の雪は、巍然高く旭光に映りて天地の靈美を踵め、洋々たる北溟の怒濤は、

遙く樹林に入りて萬歳の響を寄す、我等、今や將さに筆硯を新にして青春の野に立ち、わが親愛ある校友の誘掖により、以て霸權を高校に握りて、將さに文壇の司命たふんとす、願れば、光陰はげに百代の過客、一年又一年、去りまた來る、洵に長しと思ひし昨年は、落花流水と共に空しく一夜の夢と消えさりぬ、試に去歲誌上に於ける生等れ經績を顧れば、冷汗滿背、坐るに追想するに忍びざるものあり、我等瑣文と蘊するかく、又倚馬の才あるに非ず、青條を發し、芳粧を播くが如きは以て其分に非ざることを信ず、然りとていへども、丈夫一たび應承して其任に當る、聊抱負する所なきにあらざるべし、唯只、校友の誘掖により一片の赤誠を獻して、本誌發

刊の本旨を貫徹せんことを欲するのみ、されば徒らに紫駟を追ふて鞭撻を加へたりといへども、驚馬遂に駭たる能はず、前跌后倒、言辭謏劣、其職を曠ふせるの譏を免れず、然れども落花とむ可らず、逝水追ふ可らず、今や一陽來復して萬象盡く新まり、新なる光明は我等か前途を照し、悠久なる希望は更らに吾人の勇氣を鼓舞しぬ、されば徒らに既往を追懷して躊躇逡巡するは、吾曹の好まざる所、又わが志に非らず、奮勵一番以て筆硯を新にして、我親愛なる校友に對し、彼萎靡して振はざる校風を發揚し、鵬翼を張りて學界の風に雄飛せんは、これ吾曹が仄かに期圖する所あり、千里の駿、九霄の鵬、もし我等が微衷を察せば、奮ふて雄編佳什を投して以て諸上の光彩を放たんと欲せよ、之れ吾曹の夙夜奇望して止まざる所あり、願くば半千の俊髦よ、校風に舊塵を一掃して、幸ひに吾

等が清新の意氣を容れよ、復た更らに何を以てか、斯多幸なる新年を迎へんや、唯我欲する所は、是るのみ、

冬天の快

朔風獵々として飛雪天地に滿つ、これ我等が最も他に誇る所以の者也、木葉すてに落ちて乾坤轉た寂寞を極め、饑猿齒白く夜月に吼へて、大魄さうに慘憺たふんとす、試みに少しく吾黨の愉快を語らんや、寒雲漸く收まり雨雪こゝに霽るれば、十里の遠山皚々として玲瓏玉の如く、滿目の寒氣晴朗あるのとき、百尺の樓屋に据して高歌放吟する、之吾が愉快とする所也、寒林蕭條として寒鴉枯木に憩ひ、田野荒涼として狐狸芒叢に隱るゝの時、微吟低回逍遙を恣にするは、亦吾が喜ぶ所なり、もしそれ寒颯怒吼樹を拔き屋を破り飛雪粉々たるのとき、短簔輕笠積雪を蹶て狡兔を追ふは、更らに其快とする所なり

等が清新の意氣を容れよ、復た更らに何を以てか、斯多幸なる新年を迎へんや、唯我欲する所は、是るのみ、

北溟の怒濤澎湃として百尺高し、鯨波高く捲て評定熟議の結果左の如き豫算以上に活動する天地を吞むとき、一葉の端艇を蓮湖に湖畔に放つ、同一く吾大快とすべしものなり、半夜荒鷄さゝて蹶然戸を排し、雪月冴え渡るところ、筐底の寶刀をのさして老松の蟠根を切る、吾等が快とする所にあらずして何ぞや、噫此等の壯絶快絶は、朔北の天にあらざれば、以て其快味を知る事を得ざるなり、この偷安逸情爐を擁し煖を貪るは、隱居の死傷のみ、我黨の以て旨しとせざる所、我半千の健兒よ、練へ神州の膽、奮へ稜々の氣、

校友會會費豫算

職員生徒が一致融和して家族的團體となり徳性と學藝と身体を涵養練磨して本校の校風を發揚し教育の資助と爲すといふ重大なる使命を受けて生れたる本會は、代議員諸氏并びに各部所屬の重立たる職員委員の御面々が、至誠苟もせざ

第一項	校友會會費	一、二一八、〇〇〇
第二項	特別會員寄附	二七六、〇〇〇
第三項	通常會員會費	九四二、〇〇〇
第四項	收入合計	一、二一八、〇〇〇
第一項	校友會經常費	一、一四六、七二五
第二項	北辰會費	三〇〇、二〇〇

支 出

第一項	十全會費	一、〇〇〇
第二項	演說討論部費	三、〇〇〇
第三項	語學部費	一五、〇〇〇
第四項	雜誌部費	二七九、二〇〇
第五項	十全會費	二三一、五二五
第六項	弓術部費	二〇、〇〇〇
第七項	劍術部費	二〇、〇〇〇
第八項	柔道部費	二〇、〇〇〇
第九項	ベースボール部費	三三、〇〇〇
第十項	フットボール部費	三八、〇〇〇
第十一項	フットボニス部費	二〇、〇〇〇
第十二項	遠足部費	一五、〇〇〇
第十三項	漕艇部費	一三〇、〇〇〇
第十四項	春季運動會費	一〇〇、〇〇〇
第十五項	秋季運動會費	二〇〇、〇〇〇
第十六項	會務費	二〇、〇〇〇
第十七項	校友會臨時費	四一、〇〇〇

時習寮茶話會

世は刈薦の亂れねども、花に戯れ月に酔ひて、青年果敢の意氣徒に蕩盡銷磨して見るかけもあきに、あはれ獨り嶄然として群小を抜くものは、抑も吾時習寮生にあらずや。

時は明治三十二年、霜露既に落ちて、黃菊丹楓、天麗に氣清き天長の佳節、吾辰章校生大運動會を催されぬ。日頃脾肉に苦み吾寮半百の豪俊、

幾年雨に曝され風に鍛ねし銅腕鉄脚を、試みんばこの時ぞと、或は飛鳥の如く、或は狙公の如く、術を極め秘を殫して戦て勝たざるあく、攻めて取りざるあく、忽然天地を風靡し來る、的之れ梁山泊。未だ急時雨の德澤と得ずと雖も、察猛將勇士雲の如く金章の胸に燦爛たるもの、寮生の半を過ぐ亦以て偉ならずや。

當夜無聲堂に茶話會を開きぬ、諸將戰勝ちて意氣軒昂當るべうらず、寮務佐野先生は賞牌總數の過半を得たるを賀し、當日の神行太保河原繁君は、金章數十個、胸に輝うして悠然壇に登り、微力今日の功を致したるもの、偏に諸將の聲援に依らずんばあらず、深く鳴謝する所として降れば、曾て京都大學に天下の豪傑を壓倒し義勇旗を得たる、森本辰三君は、余に於て腰痛なりしめれば、豈豎子をして名を成さしめんやと氣焔萬丈。

時に場中劍を抜いて起つものあり、問はずして知る、急先鋒黒田索超あることぞを、天を突き地を斫り叱々の聲、劍戟の音、鏗々として雲蒸し龍騰り奇觀言ふべからず。次に白面郎君小泉天壽、棄子吟を舞ひて、哀々去ふんとすれば、雲間を漏る、殘月冷に、杜鵑一聲、光景實に慘憺たり。やがて黒旋風仁八男子、憤懣の氣遣るこど能はず、曾て沂嶺に三虎を殺せし勇氣をもて、咆哮怒號すれば、面は棗の如く眼炬の如き、雙翅虎膚横四郎奮然起ちて、跳梁飛躍すれば、風起り沙飛ひ天地晦冥、咫尺も辨すべからず。恰かも萬雷の一時に落下したらんが如き壯觀に、常には控へ勝る笑面虎、やをら體をうはして莫哀を舞ひぬ。秋水空に閃めいて萬籟鳴を静め、天日再び昭なり。誰れか之に次きて演する者やと、思ふ程もあらず、一段高く坐せられたる玉麒麟、音吐爽に英雄心緒を吟し出て給へば、

吾こそぞ聲に應ずて起つものは誰あほう、柳腰花顔、弓は李廣にも劣らず、力任原を投げて、盛名かくれなき當年の燕青、勳の君、羽衣霓裳、風に翻り嬌を含みて情意濃に、双燕双飛畫梁を繞り、大燕は歌ひ小燕は舞ふ、英雄心緒亂れて巻々。

やがて興は盡きたりにもあらねど、夜更けたればとて 陛下の萬歳を三唱して散しぬ。當夜出席されたるは入江教授、寮務諸氏。

(寮生某投)

青年節酒會

十一月廿二日午後三時本校倫理講堂に於て開會新入會員宣誓式を舉行し併せて幹事より數件の報告あり會するもの北條校長を初め本會贊助員諸師十數名正會員百三十余名先づ幹事田中秀知君報告せる數件は北條校長の名譽會頭山崎醫學部主事の會頭今井先生の副會頭たるを承諾せら

時、場中劍を抜いて起つものあり、問はずして知る、急先鋒黒田索超あることぞを、天を突き地を斫り叱々の聲、劍戟の音、鏗々として雲蒸し龍騰り奇觀言ふべからず。次に白面郎君小泉天壽、棄子吟を舞ひて、哀々去ふんとすれば、雲間を漏る、殘月冷に、杜鵑一聲、光景實に慘憺たり。やがて黒旋風仁八男子、憤懣の氣遣るこど能はず、曾て沂嶺に三虎を殺せし勇氣をもて、咆哮怒號すれば、面は棗の如く眼炬の如き、雙翅虎膚横四郎奮然起ちて、跳梁飛躍すれば、風起り沙飛ひ天地晦冥、咫尺も辨すべからず。恰かも萬雷の一時に落下したらんが如き壯觀に、常には控へ勝る笑面虎、やをら體をうはして莫哀を舞ひぬ。秋水空に閃めいて萬籟鳴を静め、天日再び昭なり。誰れか之に次きて演する者やと、思ふ程もあらず、一段高く坐せられたる玉麒麟、音吐爽に英雄心緒を吟し出て給へば、

れしと、本會々員の入退員、今學年の幹事、前學年間に於ける會計收支決算等ありき次に新入會員を代表して今井正親君宣誓文を朗讀す次に數番の演説あり其大要を記せんに

本會の目的たるや酒を節して學生不品行の根を斷たんが爲めかりしに前學年に於て本會員の申より六名の除名者出でたるは遺憾のとおりき併し乍は是れ帝國大學病院に入院する病人が比較的多くの死亡者あるは既に諸方の醫師に乞を投けられしもあきらめの爲めにとて大學病院に入院するもの多きが故なりと云ふ例と一般あるべきを得んや大体酒に伴ふ利と害との中利は一方を取らんを欲するは本會の本旨あるに日本人の習慣として酩酊を求むるを以て酒の本色となすか如きは實に嘆すべきとなり西洋人は之を以て一種の食物と思ひ決して其度を過し害を招くが如きとなきに勤むと云ふ諸君既に本會に入會せ

る以上に於ては宜しく節酒以て本會の旨趣に戻
る勿れと懇に諭されしは今井副會頭なり次に北
條校長は登壇し王ひぬ今回名譽會頭たるを諾
しぬ而して幹事の報告によりて本會々員の其數
既に數多なるを知るをもく本會の目的たる節
の一字は尤も尊き所にして其實行亦尤も困難お
るものあり節の一字にして完かふんには聖人と
云ふべきなり併し會員相互の忠告誘導によりて
此節の字の實行を見るを得るならん而して既に
大團體たる以上は會員悉く親密融和相助くると
は容易ならざるべければ會員中三々五々相親し
み相助け引きて全會員悉く相連關し能く其目的
を達するに勤むるのみならず延いて之を會員以
外の同窓諸君にも及ぼさんとを圖るべしと述べ
られぬ 次に佐野先生は本會創立以來の會員を
數へて其大に發達するの望みあるを悦び頼朝は
石橋山に敗戦し僅かに身と以て免がれしときに

郎黨等は宴を張りて遂に頼朝に逢遇するの機會
を失し項羽が遂に敗れて中原の鹿を得ざりしも
酒を節せざりしに原因したる佛國の將軍カチナ
が能く節の字を適用したるが如き實例を擧げ懇
切丁重節酒の必要を論議せらる 次に金子先生
は酒にはアルコールあるが故に之を飲用せば神
經作用を敏からしめ總ての官能を調へ精神を爽
快にするものあるも生物既に働けば勞かるべし
性質あるが故に其アルコールが一旦働きたる上
は直に疲勞を來すが故に其分量と大に飲用せば
其疲勞を來すと亦大あり故に能く其分量に於て
節を守り各個人の血液循環精神爽快を助くる範
圍内に之を使用すべきあり而して其過用を防ぐ
一法として日本從來の献杯を廢するの必要を述
べ更に衛生上直接の關係より献酬の廢すべきを
説き若し杯の交換と共に甲の唾液を乙に移すが
如き場合に於ては其害毒想像外に出づるものあ

らん即ち赤痢梅毒等の傳染を媒介するともある
べきを懇切に熱心に説き示されたり 次に村上
教授は酒を飲む人の聖人に劣れると既に十分の
五なり況んや過飲遂に過失を生ずるが如きに至
ては亦言ふに忍びざるもれある旨を莊子の語を
以て論究し苟も聖人ならざる限りは節の字を服
膺するとの必要あるは明なり故に既に本會員た
る諸子は相助けて節酒以て本會の目的に違はざ
れと云々閉會せるは午后四時四十五分なりき

本會々員の内 死亡者二名 退會者一名
除名者六名

現今總員數五五一名

内賛助會員二四四名 其中本校教職員四六名

本校卒業生一八八名 校外篤志者一〇名

通常會員三〇七名 其中舊會員一六九名

新入會員一三八名

本會役員

名譽會頭 北條校長 會頭 山崎教授
副會頭 今井教授
幹事 醫學部 松玉數馬 村田讓
大學豫科 土田久三郎
田中秀知 阿部維巖
佐藤英吉 中村讓次
藤田敏彦

(明治三十二年十一月廿二日稿)

各部小會記事

○獨逸語會報告

十一月廿五日第一回 開く當日の辨士左の如し

乘杉嘉壽 小幡豊治
原義朝 藤田敏彦
丹治義藏 中村八太郎
金崎賢 中村讓治
高瀬修良 櫻林格造
森本美津造 教授中目覺

外國教師 E. Junker

十二月九日第二回開會當日の辨士

前田 松苗 南 大曹

二上 兵治 舟木 重次郎

伊 藤 秀 渡邊 良法

教授 中 俣 匡 外國教師 E. Junker

一月廿七日第三回開會當日の辨士

布施 現之介 服部 貞一

竹村 榮太 龍山 嚴雄

石塚 維巖 下田 幸郎

平瀬 享三 森 文男

教授 西田 幾太郎 外國教師 E. Junker

○國 語 會

十二月國語會第一例會を開く

西村清之助君登壇、嘗て演說會にてもせふれしと觀察の方面を異にして、古代史の研究に於て最も趣味ある出雲國を紹介せんが爲に、折り

しも神々れダイエツトの開期中ある出雲國の神
有月より説き初めて、滔々寫真に徴し、地圖に
示して、大社を説き、歴史地理を論じ、よの山紫
水明の間に生れたる偉人を論ずるにあたり、活
氣激越、言々文をなし、謹嚴なる口調と、その
態度と共に、其地勢と風土地を、吾人に印象せ
しむるに於て此の遺憾なかりき。次に駒田定郎
君、國家と和歌なる破天荒なる題を掲げて、卓
厲風發あるエキस्पレーションと、活氣凛々たる
態度もて、其滿腔の英氣を迸發せしめんが爲に
壇に登りぬ。人の國より傳はらざる斯の道を文
學史的に論せんともあらず、修辭學的に研究
せし結果にもあらず。時代精神と思想とを汎論
せんが爲に世々の歌の姿と時代とを照合して立
論し、歌をもて優柔不斷、徒に言を弄するもの
にあらずと、いかづち會を罵倒し、萬丈の氣
焔と吐露して壇を降る、次に

藤井先生登壇、國語會の成立を告げ、頭數の多

國土に從て特種のものあれば、字書より案出せ

少豈顧慮するに足らんや。況んや一騎當千との

しもあるべく、又支那にあるも知らずして作り
しもあるべし。鵠の如き小説家の戯れ如きも、

勵して眞摯に研究して相互に討尋せんを、會員

福澤氏の瀛船、流車などの字を字引よりして案
出せし如く、よれ自ら生ずべき場合ありかし

を勵まし、「和字に就きて」講演せられたり。抑

又字は作法は、(一)合字なり、則、風、風、嵐、

日本にて、元來支那字にあらずる文字を製した

条、奈、厩、の如く、風止むをなぎと、木の
風を風とするが如し。今日用ゐる麴の如きも其

更々に肇めて新字一部四十四卷を造らしめたり、不幸、今日に傳らずして今より推測す可

一なり。(二)支那音を借りて、ものせしもの、則、

ず、只和名抄、新撰字鏡によりていさゝう推測

隨、鈇、椰、蟻、鯨、鯨、の如く (三)その義を
借りしもの、訓を借りしもの、緘、荷、鍵の如

するを得べし。夫れより降りて小説家の便宜上、

借、躬、賤、啞、磔、儻、の如し、(五)支
創造せしもの多し。大別すれば(一)全く日本的

なるあり。則、柳、柚の如く (二)支那字をれども、

那字を誤り用ゐしより終に日本字とありて通用
するに至りしあり、則、蛇(蛇)、枕(枕)、箭(箭)

日本獨立に用ゐるあり。則、椿、榎、萩の如き莊

辭に大椿壽八千歳などある椿と異かり又萩も支
那字にては秋草にてはあらざるあり。虫、魚は
これと和名抄に見る所にて葉盤あり、又(七)經

文字を寫す僧侶は略字を案出して用ゐたり、而して獨立して通用するに至れり、則、井(菩薩)、井(薩埵)、子(緣覺)、メ(華嚴)、女(婆娑)、ち(知識)の如く、又釋(釈)、ム、の如きあり。

以上、和字に就きて其形の梗概を述べしに過ぎず、其を分類して秩序的に叙説するが如きは後日と期せんと。かくて日落ちんとして夕居る雲さひし頃、會を閉ぢぬ。

○漢文會

歐洲の文學は其根底を希臘羅馬に取るが如く我國の文學は其基礎を支那文學に置かずんはある可らず、吾人敢て我田引水的の斐言を弄するに非ざると雖も校友諸君が支那文學に對して冷淡の情を縦にせらるゝは實に一驚を喫せざるを得ざるなり、或は亡國の學問といひ或は死學といふ何ぞ其れ亂暴無禮あるや、試に問ふ諸君が優婉

學といひ史學といひ、將某文學といひ其好みに從て各人專攻する所の者を發揮するは吾人双手を擧て贊する所あり、而も文章拙劣にして自己が蘊蓄する所の妙按を表白するに不便を感ずるの憾なきか少く疑なき能はざるあり、吾人これ等の憾を抱懐すること久し何等のれ手段を設けて其及ばざるを補綴せんとするや切かりき、茲に漢文會あるものを設立し日本文學を研究するに資料として、將文章の練磨として去月學期試業前一週日其第一回を教室に開きたり、本會の趣旨たる彼の時流を追ふて彼我に轉々し其根本を忘れて徒らに枝葉に滯迷する彼等輕薄者流の多數を望まず斯道に熱心ある同人集まると數人あり、午下三點鐘、村上教授起て開會の趣旨并に漢文は應用と題して左の意味を講諭せられたり、其大意は載せて雜錄欄にあり、教授の言や溫柔、恰も慈母の赤子に教ふるが如し一言一句

なる國文と稱し或は艶麗なりと賞賛する我國の文學は斯まで助長發達せしむるに如何なる素養を經來りしか、敢て諸君れ一考と煩はさん欲す、嗚呼希臘既に衰頽に歸したりと雖も嘗て此地に萌芽したる文明の餘光は長へに榮えて歐洲の天地に瀾蔓せり、老大ある支那帝國は今や惻威の窮竟に陥ると雖も而も數千年來の文化は夙に我國に流傳して粲然たる日本文學の基礎を創立したり、故を温て新を知るは是れ識者れ首肯する所、何ぞ亡國の學問或は死學として拋擲するを得んや、吾人元より文學の何たるをも審にせず而も日本文學に對しては些か忠實なる志望を抱懐せり而して此志望をして空しかぶざらしめんには是非支那文學の研究を怠る可らず、猥りに蟹行の文學を弄して碧眼の糟糠を嘗め某々國の眼鏡を眉間に懸け鵡舌喃喃を以て學識を衒ふは吾人聊か寒心せざるを得ざるあり、顧ふに哲

も輕忽に付す可のふず、是に全体を筆寫して校友諸君の瀏覽に供せんと欲せしも都合ありて只其大意を掲載する事となりぬ、尙教授は將來會を追ふて本題を講せらるゝとを約せられたり、次に金澤君は起て文章の三大原則として叙事叙論及び叙言に就て講諭せられたりしが時間の切迫は餘人の名論を吐露せしむるを得ず、止むべく割愛して次會に譲り、壇を撤去し、茶菓の饗應あり、各々胸襟を開きて質疑應答を爲す、快談盡るなきも白駒止まるとおし暮鴉の歸啼に促されて和氣洋洋の中に閉會せり于時、五時を過ると實に三十分なりき

北辰會講話部例會記事

昨年十二月二日講話部の例會を開くる、先づ中野委員長簡單に開會の旨を述べられ、次に北條校長「閏年は循環に就きて」との題にて、太陽曆置潤の方法を平易に説明せらる、其大要は載せ

て本號雜錄欄内にあり、次に野田教授は無線電信の實驗あり、場内大卓の上に、相對して二個の金屬製の反射鏡あり、一方は發信、一方は受信の裝置あり、最も明瞭に各種の現象を實驗せられ、觀る者一同珍奇れ想ひを爲せり、流石近來の大發明たる無線電信の事とて、來會者多く物理教室も爲めに充滿せんばのりなりき。

因に無線電信の原理を簡單に左に記載すべし、抑も電氣の火花は空間を通過し得べき一種の波動を生ずる事を發見せられたり、之の波動を名づけて電氣波と稱す、即ち電氣の火花を生ぜしめて中心として、其波動は八方に射出するものなり、然るに此れ波は光波、熱波の如く直接に人間の感覺に入る事能はず、然れども、若し金屬の粉末ありて電氣波に觸るれば、直ちに其の排列を變じ、初めは電流に對して非常の抵抗を有せしも、一旦之れに觸るれば、容易に電流を

通過せしむるものあり、無線電信なる者は單に右の應用に過ぎず、即ち一方に於ては電氣波を發せしめ、他方に於ては之を識別する所の裝置を有す、其の電氣波を發せしむる裝置はVibrator. と稱し、ガラス管中に火花を發せしむべき二個の電極を有し、其内にパラフィン油を充たし、電氣の放ちを強かふしめ、且つ電極を爲せる金屬の表面を保護する爲にす、而して此の後方に一つの金屬製反射鏡ありて此の波動を平行となし、甲地より乙地に至らしむ、而して此の電極は有力なる感應コイルに結合し、欲するに說ひてVibrator. 中に火花を發し電氣波を起さしむ、受信器は又一つの金屬反射鏡を有し、發信器より來る所の波動を集め、其焦点にCathode. なる者を有す、是れ亦ガラス管中に二個の電極を有する者にして、其電極は電池並びに普通の電信機に通じ、二極の間は金屬の細粉を以て充たさ

る、電氣波は來ざる前には、此の細粉は無限大の抵抗を有し、毫も電流の通過を許さずと雖ども、一旦電氣波に觸るれば、直ちに電流を通過せしめ、爲に此れと通ぜる電信機上に記號を現はすに至る、故に發信器に於て火花を斷續せしむれば、同時に受信器に於て電流の斷續を生ずりて此れを通信に用ふる事を得べし、猶他に種々細微れ裝置を有すと雖も爰に是を略す、而して右の電氣波なる者は、學者の説に依れば普通

之を防げ或は防げざるは、當日實驗に於て見たるが如し、電氣波の通常の光波、熱波等と異かるは其波長の非常に大なるにあり、光波の長さは一ミリメートルは數千分の一に過ぎざれば、電氣波にては數センチ米より、長さは數千米に至る事ありといふ

寒稽古

通の光波と同く、エーテル中に起れる縦横波にして、電氣の不導體は皆此の波の透明体にして、導體は不透明体あり、故に無線電信の發信並びに受信器の間に、金屬或は他れ電氣の導體あるに非ざれば、如何なる物と雖も其通過を防ぐる事なし、Vibrator. より發する波は、偏りの状態即ち一定の平面上にエーテルの振動あるを以て、金屬線を以て造れる簾は其置き方に依り、

丈夫苟くも冲天の氣魄を養ひ、綾々の意氣を得んとせば、須らく心神の鍛練に身を委ねて元氣の充實を謀るべし、我校幾多の健兒、幸ひに武道に神膽を練りて、將さに他日れ崎此辛慘に備へんとす、寒鷗壁を穿ちて來り、雪竹窓に折れて響人を襲ふ、いで荒鷄に衾を蹴つて起ち、鉄拳堅氷を破つて半覺の眸を洗へば、雄心勃々として肉躍り骨動く、鱗魅何物ぞ、溟濛何物ぞ、跣足に積雪を踏み躪り、長鳴に厲風を叱咤すれば、玄冥かゝと笑つて金龍北に落つ、四圍猶暗

澹往來色を辨せざるを、雄士すてに無聲堂場

裡に群して、搏虎掣龍の活劇を演ず、竹刀相交ふ

雪中行軍

の聲は、叱咤疊を蹶るの聲に應じて怒號天地を撼動す、之れ壯士れ快とする所に非ずして何ぞや、舊臘盡さんとして雄士袂を分つ時、俄然大渴勵聲する者あり、曰く、夫れ滿校の健兒、

二月三日、大學豫科二年生及醫學部二年生は風雪を衝ひて粟崎に向ひ、海濱に沿ふて大野に出て金石街道を経て歸れり

聞け半千の俊髦、試みに堂内体を躍らせ、大喝疊を蹴て立ち、劔を揮つて雄々さけひすれば、嚴寒凜冽渠何物そや、稜々たる鉄腕を撫して雪中に立ち、寒月冴へ渡る處、冷水に滿汗を洗へは、全身の血は躍りて活氣正に迷らんとす、白山の氣

々堂々金澤を發し、談義所を経て傳燈寺に到る、牧村より臥龍山脈を横切り若松村に休ふ、阪路嶮惡積雪膝を没すといふ、之より數村を過ぎて校に飯れり

秋季陸上運動會狀況

は霰を捲て來り、北海れ怒濤は聲高く鳴る、之れ健を以て誇る柏章華陵れ健兒も、猶未だ知らざる所也、天地昏冥人炬燵を擁して安逸を貪り、蠢々として臥褥に墊するとき、疾呼一聲、駢駢て無聲堂に會し、軀幹を練り剛氣れ神を鍛ふ、人世の壯舉男子の快絶と謂ふべし、奮へ滿校の

少くとも一週前より雜務を分擔し、會場の配置、賞品の準備、招待狀の發送等に東奔西走日夜を兼ねて準備に急ぎたり、先例の昨年より全く排せられ、殊に本年よりは新に校友會運動部の二に加へられたるを以て、從來發起人組織れ運動會も、茲に一新面目をあらためて委員組織とな

るに至れり、而して競技、會場れ諸掛員は特に事務多きとて、卅一日より其準備に取掛れり、數ふれば日は僅に餘す所三日、思へば多き事務なるうか、各失望する様も見えたりし幸に、夜を日に繼ぎての奮勵にて漸く其終りを告げ、三日の來る何ぞ遅きとつふやらしめぬ、

はよかりけり、明けよく、明日こそは、奥羽に三年、筑紫に五年、七寸の草鞋破りくくて見事練り上げたりに此鉄脚、よゝ鬼あらばあれ、虎あふばあれ、來れ我と戦はん、あゝ金れメダルは拙者のものかと、晚餐終へて得意となりたり一折もこそあれ、霹靂一聲頭上に落ちて忽焉、

而して此間競技者の面々、健脚を鳴らして壯言するこそ又となく、をかしありう、到る處、集る處、メダル天狗の彼等の快談、蒼顔雪皮の輩儕が夢にもいふざる所、其胸間金色のチラホラ閃くも、何れ當年のチャンタリしとおほし、さばれ中原の鹿、果して彼等う何れの手に落つべきぞ吾人しばし刮目して以て之を見むるか、

天地は駢駢として黒雲に包まれ、雨龍頻に盆水を覆いて到る、あはれ腕鳴り肉躍れる健兒が翹望は半夜にして水泡に歸せんとするか、今まで毛勇みのりし彼等が心中果して如何なりけむ、準備漸くなし終るや演技場中に打立て、意氣軒昂、遙に西天を眺めつゝ、明日の天氣は請合ひなご、勇み歸れる彼等委員の心中果して如何なりしぞ、夏天胡爲ぞ不憫にして我に幸あらざる、そも我に何の恨みある、長月三日を好まざるう、果しは紅塵の汚穢を一洗し以て、畏き節會を迎へんが爲なるう、かもへは去昨も降

會場の光景

るはりやすきは秋の空とは、そも誰かいひそめにけん、げに風雨常なき北陸の天、今日の入日

き節會を迎へんが爲なるう、かもへは去昨も降

ちれ今年亦雨に降られんとするが、淡夢此に爆然たる砲聲二發に破るれば快又快、碧空豁然として開け、そこに纖毛大の浮雲だにかく、天高く氣爽に駘蕩の陽春にも勝りたる空模様あるに、會場の光景を打眺むれば誠に美あるを、うるはしいうな、双眸の間に横れる一大演技場は周圍二町幅七間、二重の柵を以て界せられ、國旗數十翻々として其間に樹立せらる、場の中央には四方より高く吊せる締盟諸國の國旗翻々として微風に漂へるに、老榎の紅寫、尾城の古壁を打添へて一段の光景を彌増しぬ、而して尾城に對し技場の右側一棟の棧敷あり、其中央一段高く作られたるは、是れ桂冠を賜はる宮殿にして、其左右は來賓の憩する所、一面に幔幕緩く引廻はし、國旗を軒端に挾まる、若し一足を轉して巨松蒼翠の間に箒を曳うば靜勝館前高く一大綠門を仰くへく、雅致ある行書

にてもれせられたる古物展覽會の一大表札を認むべし、是れ時習寮生が創立にかゝり縦覽無料にて許せしのは猫も杓子も入らざるものなく、觀覽者陸續ひきまきり、麝香の包、薔薇の香と共に館内に映芳し、稱嘆の聲四隣に震ふ

今觀覽日記の數頁を寫して以て此等の珍品什器を紹介せんか

一、古靴 一足
明治六年西郷從道君台灣征伐の際穿し者

一、紙屑籠 一
大公望釣籠

一、粗末なる釣竿(釣竿付)
大公望使用せしもの

一、古禪に菊水紋付

楠正行幼少れ際擬戰に用ゐたるもの

一、黒漆ブリキのランプ笠

加藤公朝鮮征伐に使用せし陣笠

一、古大刀 一振

蜂須賀小六矢矧川橋上にての佩刀

一、麥藁帽子(フチ狭シ)

ローマ時代にわたける帝王の冠

一、圓形を竹にて作り古紙を之に用ふ(所々破損)

鞍馬山の犬天狗所有のかくれ笠

一、土塊少々

地球の一部分

一、伏せたる盃 一

十一月十日

一、古鍬

歸去來兮田園將蕪

一、古炭取 一

木花咲耶姫御使用の采籠

一、古枝の尖りたるもの

南都大佛の小揚子

一、古齒磨揚子

一、素焼の小茶碗の裏底に鬼の像を畫く

鬼界の島の赤鬼の化石

一、古き鏡の蓋一枚

小埜小町の姿見鏡

一、最も古き小提灯

豊公貧時使用せしもの

一、古き葡萄酒の空瓶

英將ネルソン訣別の宴に用ふ

一、古傘 一本

一、清兵の外套(葉志超の所有)

一、古き箱の身 一(尤も長方形)

加藤清正朝鮮征伐用辨當箱

一、古矢 一本
鎌倉權五郎の月を之にて射る

一、長き太刀 一振

一、最古き行燈 一

燭は暗く數行虞氏の涙

一、古鍬 一

千七百八十九年佛國革命の手始めとして

暴徒バスタールは牢獄を破りしときに使用

せし一農夫の鍬なりといふ

一、直徑四寸大の茶碗(壊れたり)

千利休の茶碗

一、白禪

梅田雲濱か懷鼻禪

一、グラス 二片

ロコンプス米國發見當時の土産

一、古盥

源義經兄頼朝に命せられて長時間其熱に
自若たりし有名なる金盥

一、ペン 一本

少名彦名命出雲漂着し玉ひし時乗り玉ひ
し船

一、鳥口の先

昔玄徳 原に血を啜りて關羽及張飛と義

を結びし際腕を刺すに用ゐる鍬

一、古き小筆 一本

千代ふるも誰か忘れむ菅原の大臣の愛で

し小き古筆

一、時習寮のストロブの漏斗状とありたるもの

大人國の漏斗

一、塗碗(蓋付)

明王足利義滿に贈りし弊物(金閣寺所有)

一、古雜巾

太古の雜巾(明治四十八年發見す)

一、古草履片足

日本國古代の履物

一、古瓦れ片

欽明天皇の朝紀元千二百十二年佛像と共に
渡來せし日本最古の古瓦

一、古鎌 一挺

豊公幼時使用せし鎌

一、古蓑 一枚

忠臣兒島尊徳の着けし蓑

一、古鍋 一

炒鍋(大椿の豆を炒りたるもの)

一、柿 二個

辨慶の眼玉

一、古箒 一本

高砂の箒

一、同熊手 一挺

同熊手

一、古高履 一足

林子平海内遍歴の時穿ちたるもの

一、鷹

神武天皇御東征の際に桑の御弓に止まり
しもの

一、麥藁帽子 一

ツラフアルガー海戦の際ネルソンの被帽

一、小提灯 一張

葉志超の牙山逃亡の際用ゐしもの

一、直徑四寸大なる古茶碗(壊れたり)

大和高市郡より掘出せる太古の遺物

一、ハンカチーフ 一

松浦佐保姫の狭手彦を見えずなりしを見
送りに振りし頭巾

一、伊呂波をかきたる半分の紙

伊藤侯爵出品、小笠道風四十才にして始
めて書を學びしときの草紙の切

一、古草履

義經の愛妾靜御前れ草履

一、大檜笠及杖

一、西行法師の所有

一、尺八

普化禪開祖、僧覺心所有のもの

一、爛德利及古漏斗

赤垣源藏所用

一、土鍋れ古物

利休の用ゐる茶碗

一、古薦 蜂須賀侯出品

太閤矢矧橋上にて小六にわひときき布き居たる薦

一、眞田幸村に追はれて徳川家康飢に堪へず乞うて桶屋に恵まれし香の物

一、加藤四郎左衛門景政の造りし土瓶

一、ナポレオンの巻烟草入

(巴里の博物館所藏の物本校運動會に付公使の持參せしもの)

一、アダムとエブがはきし高き靴

一、足利義政愛玩の茶器

一、西郷南洲翁の靴下

(大島によりしもの昨日發見今日當地に着)

一、足柄山の笠の筈

一、アメリカ革命戦争の際ワシントンの被りし帽

一、巴理モツテ陣太鼓

舌きり雀の老婆か糊を作りし時用ゐしふるひ

一、北條時頼の使用せし七輪及土瓶

一、佛王ルイ十四世の用ゐし蝙蝠傘

一、菅公配所に使用せし硯

一、三井家よりの寄贈品、祖先の所持せし財布

一、小野小町が腹帯

一、深草の少將九十九夜通ひし折穿りし草履

一、菅公配所都府樓の瓦

一、茶臼山にて徳川家康祝勝れ盃

一、延暦寺覺信の兜頭巾

一、北條高時最後の杯

一、上杉謙信愛馬の秣槽

一、トラフアルガー海戦に於る散彈の破片

一、王猛が虱を捫りし衣

一、西行が兒童に與へし銀猫(猫水滴)

(所有主六十世は孫なり)

一、足利義政一代使用せし蒔繪の菓子皿

一、古草履 一足

仙台的忠婦淺岡苦心慘憺れ名殘

一、豆

支那砲兵の使用せし砲丸

一、韓信の貧困したるときの籠

一、鎌倉時代の陣笠

頼朝富士の巻狩の時用ゐしもの

一、徳川時代の陣笠

上野の戦争の際用ゐしもの

一、明治時代の軍服

今朝出羽町練兵場に於て拾ひしもの

一、古代の醬油壺

人皇四十三代元明天皇の御宇大和國(一説ニ病人國トモ云フ)渡瓶郡に於て堀りものあり後人之を用ゐて便器とす

一、風呂敷

天地をひとつに包み投げすてん「憂」と「惱」の源にあれば

一、新井白石幼時の机

一、常盤御前の用ゐし笠

一、與二兵衛の煙草入

一、化石

桃太郎日本一の黍團子の化石せしもの

一、團扇

信玄が軍配

一、古草履 一足

豊公信長の鞋奴たりしとき握りし草履

一、古桶

ギリシヤの大哲デラゲチスの起臥せし家

一、古高足駄 一足

源中尉五條橋に於て辨慶が薙刀をふみし

高足駄

一、ガベ銭

青砥藤綱滑川にて拾ひ上げし青銭

館の出口に投票函(片手桶)を設けて珍什奇略れ

投票を求めたり其何れを撰せられたりやしうず

清杏亭

人若し展覧會館を出で、左轉し演技場を右にし

て一度彼の臥龍踏踏たる松林に遊ばんか技場を

圍む疲れもなく、館内弓字に練歩するの勞もな

し、懋はむと欲すれば清杏小亭あり、飲むに三

碗の澁茶あり、食ふに一封のパンを供ふ、卓上

の疲菊憐むべく、釜水の躍る愛すべし、耳に颯

々たる松風を聞き、月には盛壯たる満場の光景

を具す、尾城の古壁夕陽に映し、巨榎の腹邊紅

蔦に染みたるなど、此小亭が特權にして又喃喃

の言を須る、其賓客の接待無骨なれども暖簾

くやる人は絶ゆる時なく午後二時頃に至りて菓

子の欠乏を告ぐるに至りたりとは、例の得意か

る主人醫學一生が親しく言せしとあるなり、

開會

日は是れ天長嘉節、時は是午前七時、神聖なる

倫理講堂は開られぬ、勅語捧讀せられ

御眞影拜賀式あり、式終へて會長北條氏が演説

あり本日運動會舉行の旨を述べ終るや一聲肅靜

を破りて一同開散の命は下りぬ

時は來りぬ午前八時、來賓席を始め群衆場に溢

る、快哉、三呼高く響まで一回二町の競技者現來

るや拍手轟然として起りき天柱崩れ地軸揺らん

バのりなり、一度鳴鈴用意を告ぐれば順次己に

定りて鉄脚踏切線上に振ふ、知らず相並べる面

々は皆是れ虎攫龍拏の壯漢、誰り果して中原獲

鹿の功を奏せん、江山萬目皆悉く此一線に聚れ

る瞬間時、白煙銃に迷て煤聲耳を劈く、すは

や怪風生し玄雲起り、虎龍相搏相闘ふれ偉觀白

や勝て、紅や勝てと、さ、やく間に喝采は天地

に震ひ、勇士の英名は耳朶に喧傳せり

一等 廿利四郎 二等 盛賢藏

三等 南大曹

第二回、二丁競争

發足線上並み立ちたる健兒の面々、何れも赤銅

色あるをかしく一入觀客の眼をひきたりしが銃

五等 宮川一雄

聲今もや響く間一髪、彼等は終に地上のものに

あらず、半周の比、紅緑相前後して衆を抜くと聞

餘、終に桂冠は緑帽の伊藤氏が頭上にうゝりぬ

一等 伊藤秀 二等 佐々木久二

三等 近藤達兒

第三回、提灯競争

深淵終に深たらす、殿雁終に殿たらす、功を萬

一に企て望を天の一才にかけたりし公達う此度

の遠征こそ又なくをかしありしを、彼の短身雪

皮の柴田氏は、得たり先登我物ありと、揚々舞

うて敵地に驅込みたりしが、あはれ灯火風に奪

は、れて夜行に堪へざりけん威なりぬ黄帽れ君

と共に故郷あたり歸らんとせし瞬時、無殘ある

哉高綱が功は緑帽齊藤氏に占められぬ

一等 齊藤美雄 二等 松扉得悟

三等 井口正泰 四等 竹村榮太

第四回、スプーン競争

試むに事の夫ればあまり滑稽に過ぎたりといへ、思ふに小兵ありて大兵あり、將士の賢ありて雑兵の愚ありされば壯大ある一哩競走ありて始めて晒々たるスプーンレースの存する、其共に趣味を興ふるの点に於て彼此何を撰ぶ所あらむ、見よ、薄紫の巧ある、赤薄黒のをぢけある、しのも半周にしてよく步調高く進め、微風よりく尾山城砦を撫て來りてスプーン杓子を逸出せんとするにモ不拘、彼等は終に決勝線上破顔一笑するの榮を得たり

- 一等 新次郎 二等 櫻林柘造

第五回、四丁競争
ハンカチ首に、ハンカチ口に、まちに待ちたるドンの一發、奔然悍馬の如く、蹶起奮躍するや己に一週し終へて足は二週半はなふんとす、黒勝て、紅まけるな、など、はやさるゝ其間に紅

帽の長脚男子も決勝線一步にして、無念く、黒帽中野氏に踏越えたる、
一等 中野深 二等 高井竹次郎
三等 永井直之
第六回、戴囊競争
一步して落ち、二步して落ち、三々五々、半周ならざるに囊落ちて地に聲あり、殊に千姿萬態名狀すべからざるが中に、群衆をして汗を握くしめしものは、將に勝線踏切らんとする機一髪、天の一方に恨みを吐ける縁帽にして、僥倖と萬一に得たりしは

- 一等 若守義孝 二等 田邊駿男
- 三等 柴田徹心

第七回、武裝競争
此にズボン、此に上衣、此に草鞋、此に劔……集めくして今一人又々二人と駈出すもあれば、曰く草鞋、曰く背囊、曰く劔と御丁寧至極に取

鎧ふる若殿原もあり、或は走りつゝ、鎧ひつゝ、踏々跟々飛行く君達もあり、楢圓技場さながら鳥羽繪に似たり、斯くて寐ぼけたるが如く、遅れたるも而かも武裝嚴しくて、霄漢に飛ひゆくしものは、頓て此度の先陣とをたぼほし

- 一等 河原繁 二等 西野勇喜智
- 三等 櫻林柘造

第八回、提灯競争
一等 神谷吉兵衛 二等 島津精之助
第九回、二丁競争

四高其人ありといふ運動部の大チャン米門が一入舞台、又喃喃の言を負せざるべし
一等 稻垣米門 二等 井上卓雄
二等 仲佐貞次郎

第十回、學術競争
蓋し此レースの本會に行はるゝと今年を以て始めとす、先發点より約一町にして方五寸のボー

ル板あり、張るに蒟蒻摺の問題を以てし、添ふるに鉛筆を以てす、而して競技者は決勝線上各此か答案を以て立ち、其正解をなすにあふざれば先陣するも賞せられず、遅參するとも恩典にあつるとあり、今度の稱功實に然り、得意がりける無髮の將師六番まで洩らされて、无名の勇士二人に賞せらるゝを見る、恰も是れ秋霜を凌いで獨残れる黃菊白菊の概

- 一等 山岸哲夫 二等 森下美津造

第十一回、六丁競争
渾身れ勇を傾倒して打て出でたる紅、白も元龍の悔にもれず、一週は衆目の焼点となりたりしる步調稍亂れんとする一刹那、白緑の此等を抜きたりと見るも遅くや、躍起とあり軍後の白青、冲天に舞ひ出て、此に、決勝一二步にして勝を占めたり、

- 一等 米澤恭次 二等 駒井定哉

三等 關野長

第十二回、竹馬競争

五戸の悪太に、八戸の若衆が、此度の竹馬競争と
そ又一興を添へにたれ、何れもまけまど、まけ
ずの意地持ちの、毛脚短き黒男、紅種したる小
男あれど、川狩り歸への泥脚の眞黒々の源太
めが一躍翔けて宙を飛ぶ其勢には及ばざりけり

一等 安藤一二 二等 盛賢藏

第十三回、スプーン競争

一等 野嶽利七 二等 河合文吉

二等 宮入義雄

第十四回、障害物競争

嶮難磐岳男子が身には何のものとはと勇み起ち
たる十有四人、如何なる技量や示さんざんぞ、
待ちにまちたる其中に、猿の輕業うるくこと、
猫の輪ぬけに、魚の網抜け、棚裏傳ひの蝙蝠や、
さては梁木上の曲馬をば、見事奇麗にやりてぬ

け、満場くづる、喝采に、かい髯括るもをう
かりけり、
一等 大久保直信 二等 秋月致
三等 降幡積
第十五回、提灯競争
一等 伊佐壽 二等 加茂貫一郎
三等 梶川藏重 四等 柏木敬介
五等 中村辰八
第十六回、巾競争
共に此技の妙手、優に拔群の榮を負へるものな
れども若し試にに昨年
の
十七呎九 原田加賀之助
十六呎八 柏原省私
十五呎五吋半 柏原省私
十五呎半 原田加賀之助
を思は、「老朽」の二字は確に二氏がメダルに添

へらるべし夫れ力のよ、

第十七回、戴囊競争

一等 鳥海太郎 二等 古田徳夫

三等 計見雄藏

第十八回、障害物競争

鏗鏘たる樂聲と共に無慮れ勇士が日頃鍊り上げ
たる手腕を振て技場に登りぬ、石塚、田中の二氏
は由來此技の妙を傳ふるとして其猶微ある手腕
は數萬の觀客をして思はず拍手喝采をさなりぬ
たるが此度の先登は確に田中氏なりけるを一蹴
して勝線に石塚氏聲を揚たり

第二十回、四丁競争

一等 松田研吉 二等 奥山龜藏
三等 廣部徳太郎

も狐狸の化けとこねたるが如く、抱腹絶倒の青
春妙齡と共に、異様の歡樂を添へにけり、終に
斯部長の任命は左の三氏と定めぬ
神は雷漢に飛ひ、氣は星辰を呑む天馬のレース、
栗毛の芦毛が果しは月毛、衆目眩して其の遅速
前後を判するに難りき、予輩又馳足を添へ
ト

一等 石塚正治 二等 田中秀夫

第十九回、擔荷競争

時己に十時、氣益清く、金風時々面を撫て去り
快又爽、看客蟻の如く歡聲四方に湧く處、擔荷
の競技は始め、元來諸士悉く此技に精しるる
や肩力微弱にして蹠々々々、千姿萬態にして恰

第二十一回、二人三脚競争

一等 榎戸利吉 二等 佐々木久二
三等 細田榮

奔流深潭を蹴て出て、礁岩爲に搖く處、四手兩
頭三脚の怪獸現る、聲唯「一二」と叫ひ、飛ぶ
事疾風の如し、傳へ曰ふ、天之が優あるもれを
撰て即ち賜物ありと

一等 駒井定哉 二等 村田讓
藤原敏夫 神坂勇治

三等 藤内充
大村欣一

第二十二回、スプーン競争

白赤は跪倒、淺黄の疾走は、却て花魁道中の紫
緑二士をして功を占有せしめたり

一等 押原三吉 二等 森田作十郎

第二十三回、提灯競争

とも兼ねたる提灯と手に手にとりて都落とや
の平氏の公達にさも似たりけり、偶決線十步
にして首筋あたりフット吹き來し其風にビッシ
ヤリ火の消たつれば、地上斜に投うたる、提
灯、實に提灯の身ころ迷惑至極かりけり、三々
五々火は風に奪はれし其中に、落付きのへりて
來着きたるは頓々此度の勇將

一等 國本順作 二等 石田佗人
三等 武部欽一

第二十四回、竿飛競争

一等 九呎 柏原省私

二等 八呎五吋 石塚正治

第二十五回、障害物競争

一等 井上隼雄 二等 柏原省私

三等 小篠正悌

第二十六回、武裝競争

一喝天空より落つるや、しどろもどろに暗を縦
うて逃出したる小膽敗卒の一隊は、道に武裝を
なし終へて、ちりくばらく本陣へと驅込み
たるの其中いち早うりしは白、青、緑の

一等 吉江彗太郎 二等 景山齊

三等 沖忠吾

第二十七回、片足競争

文明の世に化物おしとは聞けど、先に三脚の怪
物あり、今又一脚の異物現はる、其躍るや蠡斯
の如く、其舞ふや一種の悲鳴あり、試に其強壯

なる二三を捕て之を檢すれば曰く、

一等 盛賢藏 二等 伊東三吉

三等 臼井邦吉

第二十八回、竹馬競争

此技と來ては拙者のものだと、勇め立ちたる編
輯子の一人、昨年の功名御手柄は實にあつばれ
の御振舞ありうご、來る度毎に買餅れ賜はぶ
ざる世れ習、如何あるらんと片津を飲んで窺へ
ばさしにも猛き強の者、躓蹉、矢脚、嵌落の、狂
姿笑態のえせ武者を、鼻であらひ、千里の後

に、遠くかかめて萬雷の轟く如き歡聲に迎へら
れたる其得意、

直に彼のノートに大書して曰く

竹馬の兒戲は本校第一の名士石田が手に歸し
たり

一等 石田福松 二等 藤田茂吉

第二十九回、四丁競争

一等 稻垣米門 二等 藤原敏夫

三等 林豊丈

第三十回、擔荷競争

勝算を一分に決す此天保代の輸卒チョン鬚を
なけれ角尾氏の如きは、非類の強肩、群衆仰天
語をなして曰く彼は到る處の合戦に之を以て功
の稱せられざるか、又壯あるの否、而の此
に打つきたる竹村萩尾を得けに錦上花を添へ
たるの觀ありき

一等 角尾猛次郎 二等 竹村榮太

三等 萩尾正次

第三十一回、高飛競争

高一高、落ち行くもの離々、剩す所石塚、柏原
の二名のみ、柏原は是れ二寸のハンデーを有す
るもの何ぞオメ、敵に後れを取らんや、勇を
鼓して一躍、

二等 五尺三寸 柏原省私

一等 五尺二寸 石塚 正治

第三十二回、衛生擔荷競争

せめて北京城下までと誓ひ出たる同胞も白烟迷ふ一發にたひし手傷のいど重く、劔を按つて長空に嘆聲洩せる一刹那、早くも衛生兵の目に觸れて野戦院に送られたり、抑名譽の負傷者其人を誰とかがす

一等 島 誠 郁
増田 貞吉 二等 井 原 悟
尾倉 一英 早瀬 三求

第三十三回、二丁競争

レースあり必ず試む、撰手あり必ず薦せらる、試むる必ず勝ち、出づれば必ず功あり、人呼てチャンを以てアテケルとせし米澤氏今回又候第一等の榮譽を擔ひたり又盛かる哉若し健足のデグリーを問ふものあらば二丁、三十七秒を要せしといふにやまなか

一等 米澤 恭治 二等 關口通太郎

第三十四回 學術競争

驪龍天にかゝる曉、明星を望みて今回の快男子は學界に生れぬ、誰の大舞場をとらるかして桂冠の主たるもの予紅子か緑坊う果しは白青か、あらず、我等は大器晩成の秘法を傳へざるあり見よ、淡紅、白、紫の急かす、迫らざる其態度實に深淵に潜める蛟龍の風あり、時恰も顧みて天れ一方を望めは大音あり、十方に響流す曰く

一等 竹内 六藏 二等 佐藤 英吉
二等 西山 實淳

第三十五回、部隊競争

此レースは日下氏の創意に係り其舉行も本年を以て始めとがす、其編制法は一列縦隊數列相並行し人員均等、一隊を貫くに繩を持せしむ、而して其勝敗たるや後備の一人、勝線を超ゆると否とに存するなり、這回の結果は實に半歩の差を以て第二部隊の勝利に歸したり

第三十六回、戴囊競争

一等 原田加賀之助 二等 高澤辰之助

三等 佐久間 兼信

第三十七回、二人三脚競争

双龍舞ふや妖雲起り、兩虎躍るや怪風騒くどうつして以て赴々たる今回の勇士を評せんうな、白や紅、紅や黒、桃や勝たん、緑や敗げんと衆判交々起る其中に媮婉滿面に溢れて、大聲一喝名乗り出でたる勇將はともや誰、

一等 森本 辰三 二等 國本 順作
河 原 繁 時澤 貞義

三等 二上 兵次
米 澤 稔

第三十八回、ザック競争

囊中顔面を露して躍り來れる赤銅色の男子は是れ法三の健兒佐々木にあらざるや之に次せるは此技の妙手文吉河合氏と見えたりししもれ技量家かればの佐々木氏一步く、に拔越され見す

運氣一轉無念や河合氏をして名をかきしむ

一等 河合 文吉 二等 佐々木 久二

第三十九回、職員提灯競争

勇壯なるマーチの合奏せられつ、樂隊は技場の外側を左旋してチラ／＼黄葉をふり／＼くる巨椀の下影に懟へるの時、群衆一時に動搖しそめて異口同音叫んで曰く先生の競走始ると、果せるかな、待ちにまちたる時は來て、待ちにまちたる職員競技の舉行せられんとするなり、盛かるうな、募に應じて躍り出でたる二十余名、風手を以て、美髯を以て、清音、長脚、黧黑、鉄脚、雪虎、纖腰各以て諸師が特長にして萬態千姿、今や萬目は此一線に聚る、時や時、爆聲冲天に轟くや砂石熱して塵烟燃え立ち提灯頻に点せられて恰も百鬼夜行の概あり、偶名代の長髓驅抜いて先登を呼ばれば、まげトまげトと怒り立つ又も一將、優に杉間を抜いて宙を飛行く其炯眼と

其長鬚は人をして劔かさせる鐘鬼を連想せしむ
而うも之に次するに尙兩三子を得たり衆皆快と
絶叫す宜ある哉

滿場數萬聲湧きのへる將是れ
第四十一回、各學校撰手競争
を見んと豫期し來れるもの、

- 一等 茂木佐二郎 二等 宮川爲三
- 三等 河島重平 四等 大瀬謹一
- 五等 小川勝陳

- (白) 石川縣第一中學校
- (綠) 石川縣第二中學校
- (紫) 石川縣師範學校
- (赤) 石川縣工業學校

稱功あり己に將士席定まりて天下將に太平を謳
歌せんとするこゝ一隅喧噪を傳へ、人心匂々た
り、行いて之を視れば、衆生小河師を祝するに
胴上げを以てせるあり、恰もよし、劉覽たる樂
聲は遠く聞え烟花數本、天上妙華を降らす、
第四十回、障害物競争

- (黃綠) 眞宗加賀中學
 - (赤白) 高等學校豫備學舎
 - (黃) 金澤英學院
- 是鈴々たる早走家のみ、鉄脚固く踏むて出發線
を蹴て出たる其勢、見事とも又見事なりけり、
各校の生徒總立ちどまり、帽色を望み、姓名を
絶叫し頻に之を勵す、勵まざるもの、心中果
して如何、一步誤らんか一校の運命是に定まる、
双肩小かりと雖、齊しくは大任を懸くるもの七
校十有四士、一週終へて紫赤拔きぬ、二週半は

- 一等 大橋貞勝 二等 伊澤一亮
- 三等 千代庄三郎

古城崖頭濃烟迷うて午砲一發技場を驚かすや觀
客長蛇比如く退去して獨旗の翻々たるを見る凡
一時間にして再垂髮青袵傘輕羅袖を連ねて至り

第四十四回、武裝競争
時愈進むて興愈多く、樂聲天に響きて天愈朗に、
奔々つめりくる青春妙齡の笑聲は十方に震動
す、此間武裝の競技は試されたり、由來容易が
らざる技あるにも不拘、之が秘訣を傳へたる我
軍の勇士、例によりて例の如く勝を占めたり
は流石に名も虎なる手塚氏なればう

- 一等 一中 三村勝次
- 二等 二中 田中信一
- 三等 師範 河野安太郎

- 一等 手塚虎太郎 二等 小山庄治
- 三等 加茂貫一郎

して黄緑漸く頭角を現はすヤレ／＼シレ／＼ヤレ
……………一静一動、滿場今や鳴渡り恰も怒濤嘯む
で岩礁に吼ゆるの慨あり、偶、機一轉さしもの
白、綠、仰天一笑、紫電の如く驅拔さ／＼勝線十
歩にして、優に月桂冠を擱むてごりぬ、あはれ
余輩をして其健兒が英名と校名とを傳へせしめ
よ、

第四十五回、障害物撰手競争
觀客をして最樂まゝめ最喜はしめ、其臍をして
躍らすもの蓋し此技に若くものあるか、然れ
ども勇士の艱難亦憫察すべきものあり、固より
今回の如きは此技の妙を傳へたる傑士が較力、
果して桂冠何人け手に落つるの知るべからず無
慮の觀衆汗を握りて刮目する所實に電光石火の
如く神變出沒間髪を容れず、獨特の手段を現は

- 第四十二回、二丁競争
- 一等 中野 深 二等 瀧山坦二
- 三等 原田加賀之助
- 第四十三回、提灯競争
- 一等 兒島亮吉 二等 鈴木四男人
- 三等 佐藤英吉 四等 石田收藏
- 五等 田中鷹太郎

第四十四回、武裝競争
時愈進むて興愈多く、樂聲天に響きて天愈朗に、
奔々つめりくる青春妙齡の笑聲は十方に震動
す、此間武裝の競技は試されたり、由來容易が
らざる技あるにも不拘、之が秘訣を傳へたる我
軍の勇士、例によりて例の如く勝を占めたり
は流石に名も虎なる手塚氏なればう

して一驚を喫せしめしはろもやは

石塚 正治 大橋 貞勝

井上 隼雄

第四十六回、スプーン競争

一等 山崎彦太郎 二等 藏 尙太郎

三等 森 四等 中島

五等 大木 壽雄

第四十七回、一分間競争

互に譲らぬ健脚家、勝敗を一分に決せんとなす、

夫れ豈に見るべきものかとせんや正に是驪龍

雲を擁して珠玉を競ふもの、此に約四丁走りに

走りたる長髓米門はメダルを積むて又得意あり

一等 稻垣 米門 二等 仲佐貞次郎

三等 近藤 達兒

第四十八回、來賓競争

短軀瘦身の客あり、長大肥満の人あり、體肌赦

黒の士あり、相揃はざる参差たる芥菜の如く出

發線上に列しぬ、全身今や左足の先にくられる

瞬盼、號砲震彼等は魚鱗となりて駆け出せり、

快事、歡聲頻に應援四方に起る處、見るく

衆を抜いて真先し玉ふ草鹿氏は高柵圓環首尾よ

く抜きおふせたりと見るもおそしや、躍起こな

り、西久保氏は大象を驅りて一喝大呼、勝と半

歩に制せしは正に是れ當年の離鬼百鬼を降伏せ

しの概

一等 西久保警部長 二等 草鹿丁卯次郎

三等 松寺

第四十九回、提灯競争

一等 中島 恒多 二等 江坂 正功

三等 堀田 圭三

此時三部生が餘興として無慮の劍客紛装をちし

て場は南端より現れ来る、鼓一兩聲、法螺の遠

吠、聲一聲殺氣を帯ひ來り此に東西相對峙し、

長蛇の如く、鶴翼の如く、正々体を整へて揉み合

ひ、噛み合ひ、サツト駆け込み、サツト引く宛

然是千軍萬馬の馳突するに似たり、満場氣を揉

むもの、汗を握るもの、鉄腕を打て嘆美するも

の、本より勇士が劍端神を走らし胸底龍を躍す

ものあればなり、一離一合東軍終に勝を制し此

に塵烟漸く澄みて秋天愈高し、偶崖頭の鳶羅鮮

血に染み、老榎の邊鳶公の吊するを見る

第五十回、二丁撰手競争

稻垣 米門

第五十一回、提灯競争

一等 戸田伊代治 二等 大沼

三等 乗杉 嘉壽 四等 細 田 榮

五等 竹内 大藏

斯技終るや此に二年生が餘興に關れる球抛

は半百の小學生によりて演せられたり、其短袴

筒袖にして無邪氣ある實に可憐の紅顔子が今回

の遊戯一段の異彩を放ちぬ、試に見よ、鳴鈴一

度耳に觸るれば彼等は終に伏見人形にありたる

なり、活潑々地而うも師命是遵奉し毫も悖らず

紅、白、赤の三珠頻に抛けて宙につりたる編籠此

に半あらんとして停技の命は鏗鏘たる鳴鈴を以

て報せられたり其勝敗結果等惜むらくば聞きも

らせしぞいかんある

第五十二回、一脚競争

片脚の驍將赤澤氏去りて茲に柴田氏が獨舞台と

思ひきや新手の又候現はれ來らんとは、そも荒

手を誰とかなす曰く鳥海の太郎、白井の邦吉是

あり、白井氏は前廿七回に於て三等賞の主から

ざりしが、敢て問ふ柴田氏老いにけるかと

一等 鳥海 太郎 二等 白井 邦吉

三等 柴田 徹心

第五十三回、戴囊競争

一等 水野五三郎 二等 高井竹二郎

三等 久徳隆篤

番 外、戴囊自轉車競争

ナイシクルの上、足を早めんとすれば、さちぬだに紛として落ちんとする戴囊、辛うして鼻端に、る、囊に意を留むれば車遅々として進まず、周一周、落ちては拾ひ、拾ひては落ち、輪々轉して勝は此人に歸したり、

石塚 正治

第五十四回、武裝競争

- 一等 伊澤 一 亮 二等 松扉得悟
- 三等 田中 秀 知

榎戸 利吉

第五十五回、學術競争

紫電と亂れ石火と飛び、忽ち頓止して等しく首を左右に傾くるものをし、伏するもれ、居するもの、膝するもの、而して見るく脱鬼の如く得たりと飛出す一、二、三、四、のあるにも不拘猶泰山の如く悠久として動かざる一兩輩あり、四面之を非難し之を冷笑す、果して笑ふものは、

第五十七回、スポン競争

み之を喜はざるを得ざるなり、宜なる哉、右に吳客を吊し左に越人を祝す其情に於て豈他あるんや、然れども之を這回の競技に於て乙伍發点半歩ならずして僵れ甲伍悠々徒に一週して獨得意あるに鑑るや頗る余輩の意に充たざるものあり而かも赴々たる撰手なりといふをや、余輩此に筆を拵けて論するは野暮かり唯夫強て之を祝せせると共に又彼を弔せず例によりて其芳名を傳ふるといふ

月桂冠は再、虎太郎牛塚氏か頭上にありける哉、

牛塚虎太郎

第五十九回、六丁競争

呼吸れ持久と、得意の健脚は終に勃々たる野心をなめて勇士を牧場に出しぬ、びに一步法あり、一足則あり、見よ、週一週して二週も將にをへて三週せんとする時、歩一步進め來りし加速度は實に彈丸銃口を離れし概、只夫抜きつ抜かれつ、狂奔數秒、足先勝線を踏むに至りては双肩天に沖して朱眼一轉滿場を雄視す亦壯ある哉、風雲爲に起らんあり、

河原 繁
森本 辰三

第六十回、二人三脚撰手競争

- 一等 伊藤 秀 二等 水野五三郎
- 三等 田中 秀 夫

第六十一回、戴囊競争

- 一等 加茂貫二郎 二等 柏木敬介
- 三等 高瀬 修 良

第六十二回、提灯競争

萬歳天に響く時、無念地に答ふるは是競技の常例又如何ともすべからざるなり、而の之を悲

- 一等 村澤錦一郎 二等 森部孝郎
- 三等 新 次 郎 四等 後藤承賢

五等 喜多川 實

斯技終るや番外として來賓の提灯競争あり、其常に天の一方に注目と大道狭ましと双肩ひねりありく有鬚の氣取屋も此技場に立ちては、さながら小路横切る貂舄の如く、左顧右盼、中腰居ゑてヨロ／＼走りも亦一笑、満場の喝采は是れ此人に聚る

二等 今村 土屋

第六十三回、學術撰手競争
疾走、潜走、是此の技の秘訣にして兩輪れ如く兩翼の如く、荷もチャンとして大チャンとして芳名夫れ傳ふへくんは此二大事を忘るゝ勿れなが、悲いりみ今度のチャン輩、見事枕を揃へて打死トニヒルにして終りぬ、いふ勿れ是れ易々たる問題のみと

第六十四回、委員餘興競歩

走るなるれ、歩じて急げと、事己に先を競ふも

此何ぞ噪急ならざるを得ん、偶左顧して敵己に踵を接して襲へるに驚けば足は既に驅て飛ぶ事十間、此の如く失敗するもの三々五々、終に長脚玉をして名をなさしむるに至る、

ユンケル氏
ハビラント氏

第六十五回、戴囊撰手競争

彼は提灯によりて狂姿を現し、此は戴囊によりて笑態を演ず、唯夫笑ひを禁ずる能はざるなり、見よ駝鳥然たる例の原田氏は一躍此度のチャンとして亦現はれぬ、然らば彼は、狂の狂たる否強の強たる笑れ笑たるもの

原田加賀之助

第六十六回、各級撰手競争

一度各級撰手れ聲あるや、漸く催しうめたる倦厭も満場の活氣とありて再現れぬ、見よ健兒か容貌を渠等銅色の双頬は落々たる雄心を包み兼

ねて満面笑泉を湛はするあふずや、夫れ然り渠等果して喜ぶの、果して笑へるか、其双肩にあされる責任を負うて教場に立つに及ひては大に同情を表すべきものありて存す、心中果して如何そや、あ、彼等當年の與一の馬上腹かき切りて再び人に面せずと神のけて誓ひし覺悟は夫れありや否しや、夫れ起て振へ、鉄脚は勝線を望んで鳴るを聞ずや、今うと待ちし轉盼爆聲破れて耳を聳するや、紛々亂れて怒濤の如く狂ひ飛びふる十有四人、彼は終に此世の者にあふざるなり、果せるのあ、一氣直往、足己に二週して桂冠は先つ此等の人の前に捧げふる、

一等 工部三年 中野 深

二等 三部二年 河原 繁

三等 醫學部 米澤 恭二

第六十七回、一哩競走

待ち焦れたる此大劇も今や廻り／＼て顔前に横

りぬ、垂髻手を拍ち手を伸ばし貴女妙齡紫傘を曇むや三々五々、唯夫れ手に唾して双拳を固むるものは勇士と同化してグラント踏む青衫一輩ある哉噫壯や盛や、矯漢登場するもの此に半百!!!雲集せる數萬の觀衆は唯仰天頻に競技を促すのみ、恰もよし機轉盼、信砲一發白烟迷ふや、雜然紛然團雲の如く彼等は勇猛猪進たり、聞け、萬雷の如き其鯨波には天柱碎け地軸も搖のんとす、一高一低今しも死したる如き満場に圓環を驅遶る己に三四週にして僅に彈身の餘勇を鼓して打續く者唯八九輩、而かも是れ心は雷漢に飛び氣は星辰を呑むの嬌兒のみ、夫然り、萬計胸に成りて五週六週、負け氣かく驅盡したる其勢、あつばれの御振舞ありしも漸く僵れ／＼て唯見る、双眼血を走らせ、口角火焰を吐きつゝ、紫電の如く空を飛び行く五彩れ冕、負けず劣す驅けに驅けて一步半歩の差を以て足先勝

線を踏み、喝采破れて乾坤此に振ふ、噫盛哉健兒、

- 一等 河原繁
- 二等 水野小三郎
- 三等 駒井定哉
- 四等 乘杉嘉壽
- 五等 中佐貞次郎

研晴ある穹窿今や漸く夜の薄衣につまされ、星花歌々旌旗に散らんとする處、勵聲一番疎響を拈つり會長北條氏言あり曰く

本日稀ある陽氣に際し無比の盛會を見るに至りしは全く、委員諸君の奮勵と幹旋の然らむる所、今や此盛會を閉つるに當り一言以て此に及ぶ、尙

兩陛下の聖壽を祈り、併本會の萬歳を祝せん諸君須く余に和せよ、と

事此に終りて會長より菓子數策を饗せらるゝあり、以て本日委員の幹旋に報ゆといふ、而して衆撤して團々以て勇士の壯舉を嘆美する時あ

り、願れば、冷氣袂に入りて夜色漸く濃に清談盡くるともあさましに起て散會を告ぐれば高吟詠歌四方に消えて古城唾頭老梟の聲すこし(夢人)

柔道場裡一大活劇

瀾氣乾坤に満ち心沈み氣高きれ時辰章健兒が肥肉の嘆は終に無聲堂裏柔道紅白勝負とありて顯はれぬ時は是金風窓を撲つ十一月十八日兩軍戦を交ゆるは將に午後三時と聞へしかば期に先ちて全校の健兒は奔々と道場指してつめかけ既に立錐の餘地なきとぞ見ゆし午下三點鐘佐藤法賢師起ちて曰く兩軍交戦の始に於て互に相搦し各自格闘の際には禮を欠く又曰く逆及横掛は勝負に於て採用せずこれ其技往々危険にして人の好まざる所より膽を練り心を鍊の目的とは云ひかたが肯て人のこゝろよとせざる所を必ず要せんやと辭畢りて審判席につくや兩軍の勇士起

て一搦す

龍騰虎踔の活劇は頓て始まるとす幾百の觀客眸を凝して手に汗を握り殺氣徐ろに無聲堂内に滿つ一聲敲鐘の下戰場に顯はれ出でたる兩軍は先陣は誰ぞ

- 紅 小泉氏
- 白 安達氏

かり一進一退一合一鬩互に挑み合ひしが安達氏の運や弱かりけん泉氏が膝車にかゝりて一撃の下に殪る劈頭一戦の勝に乗じて紅軍勇士の勇み立ちたるを物ともせずいでや其鋒先を挫がんと顯れしは骨格逞しき

降幡氏

好敵手よ一會戦せんと泉氏が隙をねらつてけたる車返は誤て敵の間に組みしかれ暫しが程は上になり下になりて争ひ互に秘術を盡して挑み合ひしが軀幹力量共に伯仲して何れ勝とも知るべらふ終に引分の匪運に遭ひしぞ是非もなき

- 紅 宇敷元氏
- 白 千代氏

顯はれ出でたる荒手の勇士やにはに組みつき機失すれば悔ゆるも及はずと挑み合ひしが終に紅の宇氏は敵の巴投に千秋の怨を呑む代つて出でたる

坂本氏

未だ戦闘からざるにはや味方の復仇もなし得ずして又千氏が得意の巴投に身は翻て堂裡に響く「一本」の聲と共に紅軍は長軀細腰ある

石原氏

を推しぬいでや來れと千氏は又巴投に功を奏せんとせしに其手は喰はぬと石氏は身を翻り相争ふこと數刻石氏が足拂に千氏は七分を利せられ其儘倒れり、つて組み合ひしが又起立して靜にかゝる千氏が膝車は見事先きの恨を晴らせしと一刹那石氏の巴投にかゝりてあはや戰場に露を消えぬ日頃鍛へに鍛へし手なみは見せんと躍り

出でたるは白軍の一壯漢

打て出でたるは短軀の

笠木氏

小幡氏

唯と一活して敵を目かけて飛びかゝる一刹那石氏の巴投は流石に元氣勃勃たる笠木を壓し得ずおし合ひもみ合ひ笠氏は遂に深手を負て倒れぬ「此時佐藤師は笠木氏の負傷の爲一時審判席を下られ伊佐氏代て其席に就き戦は前の如く續きたり」笠氏が恨のうずうしいでや晴ふさんと顯はれしは紅顔小軀の少年

山岸氏

あり石氏固より軀幹大ならずと雖も山氏に向ひてはさながら親の子に對するが如く冷然一笑力を以て制せんとするに敏捷なる山岸氏何ぞ首肯せんや見事石氏が押込を切りぬけて軀を燃てのありしも其力終に敵するを得ず石氏が小外薙に空しく恨を呑んで殪る石氏は既に數人を倒して氣豪に勇益加はるいでや其鋒先を挫がんものと

躍りかゝつて敵を制せんとするを石氏翻然とし身をうへせば幡氏益怒て突てうゝる如何に幡氏は氣に富むと雖も未だ斯道に深ならず其の相撲の手振は等しく看客の笑を催しぬしめ石氏より幡氏を凌ぐに足らず二氏茲に退く更に兩軍は

紅 根守氏

白 中村氏

を陣頭にはせ雌雄を決せしむ寔に見る此好敵一合一離虚々實々妙を盡して相争ふ技の操縦何れ勝り劣あるべしとも見えざりしが中氏の運や拙かりけん終に根氏が押込に一聲高く「切ツタ」と悲嘆す

菱川氏

は奮て起ちぬ根氏何ぞ菱氏に劣らずとはいへ前戦の疲勞は終に敵に八分の勝を譲り次て押込に首のさゝられぬ代つて突進し來りし

市川氏

軀幹短小なりと雖も勇銳騰舉見事に小外薙を以て菱氏を殺す白軍は更に

靡して振はず陣内將に亂れんとす此時陣頭に馳せ出でたる

水口氏

を以て躍起陣頭に名乗らしむ一進一退よく其度を失はずしのも市氏氣息喘々辛ふじて足拂に六分を制せしが無殘や引分の命と共に二人は果敢なく戰場を去りぬ次て表はれ出でたるは

紅 山崎氏

白 川口氏

川氏は肥滿の躰軀臂力扛鼎雲と凌がん許の勇氣いかで山氏の敵することを得ん見る／＼足拂に殪る紅軍は更に

紅 中位氏

白 手塚氏

を推す由來佐氏は斯道の熱心家技また拙からずといへども争か川氏の大力に敵することを得ん氣息喘々足並亂れ空しく手を束ねて退のんとするもの、如く終に果敢なく足拂に倒れぬ紅軍姿

佐久間氏

を推す由來佐氏は斯道の熱心家技また拙からずといへども争か川氏の大力に敵することを得ん氣息喘々足並亂れ空しく手を束ねて退のんとするもの、如く終に果敢なく足拂に倒れぬ紅軍姿

となすされど彼是各其道を同うせず流石は林氏

林氏

も中氏がはげしき山嵐に拂はれて不歸の鬼とありしぞ淺ましき林氏殫ると等しく疊を蹶て躍り出でたるは

福岡氏

なり中氏餘威に乗つて組み入りたるを福岡氏は心得たりと受けつ拂ひつ暫が程は揉み合ひしが中氏は先程より疲れて無念や体落の匪運にあひぬ福氏は又新に

鳥海氏

を迎へたり鳥氏勇悍にして善く闘ひ趨捷飛ぶが如しされど福氏の鋭鋒又當るべからずあはれ腰車にて一本鳥氏に代りて我こそはこ汗を握りて出てたるは

河原氏

にて悠然敵を眼中に措かざるものゝ如くしかも福氏まだ疲れず一倍奮闘したらんには勝敗は數まだ知るべからざるに時運あるは河原が捲

込に仆る其一刹那敏捷肥滿の壯漢

藤原氏

は濶歩戰場にのそみしが是又到底河氏の敵に非らず苦戦の極内捲込にて亦戰場に露とありぬる長體彦を誰どりなす

秋元氏

其人なりしかも氏の技未熟いかで河氏の驍勇に敵すべけん見るく短刀直入の捲込にまさこま

奥山氏

の疾風枯葉を掃ふ如き勇氣には既に數度の戦に疲れたる河氏いふんともする能はず暫くして小外蒞に刈られ果て一ぞあはれなりしもの紅軍はまだ鷲黒偉大の壯漢

原田氏

をして堂々戦陣に臨ましむ噫此時兩好漢は其腕

力共に磐石を動のすべし二離三合力餘りて共に仆れ原氏は奥氏を押込むと等しく十秒の命は下りぬ奥氏心は矢竹にはやれども終に時運盡きて萬事休す奥氏の死を見るや莞爾として濶歩顯はれたるは名に負ふ快男兒

小杉氏

あり原氏の鷲黒は紅顔青年の白軀に映し技又相敵す原氏一進一退より其技を盡せしも力終に衰へ大外蒞に僵れ勝は白面兒の手中に歸しぬ代て堂内を睨み出してしは誰ぞこれなん運動場裡驍名蹟々たる一黒面漢

榎戸氏

なり趨捷飛鳥の如く騰躍猛虎の如く其技争が杉氏の敵する所ならん戦未だ闌ならざるに榎氏が小外蒞は工に杉氏をして鏖をぬがさしめぬ敵あり

秋月氏

悠然として場に表はれたり兩雄相見て一笑し徐に疊を蹶て迫り各其妙技を盡して戦ふこと良久しかりし誰彼強かからず弱からず二氏刀を納めて別れぬ

紅石塚氏

白高田氏

は更に兩軍より顯はれたり唯見高氏は其名の如く長軀石氏は石の如く堅し兩々相對一火花を散らして相戦ふこと良久しく終に石氏が腰投に高氏は九泉の客と化し果てぬ代つて出たる白軍の驍將肥大の熱血兒

土田氏

其人あり石氏れ堅も何ぞ此大敵に向ふことを得ん見るく腰投にかゝりて石氏は仆れぬ

湯本氏

は奮て起ちぬ其軀幹を以てすれば彼は大是は小到底敵すべからざるも湯氏は敏捷容易に土氏をして勝を逞せしめんや右突左避其秘術を出すに

暇もあらざりしが悲哉湯氏は氣盡き力衰へて空しく千秋の恨を吞むて嘆聲一發倒れ伏しぬ大喝一聲此恨晴ふさんと双手を揚げて進み出てたるは無聲堂裏に驍名うまびすしき

佐々木氏

あり氏は紅軍の參謀萬目等しく氏が一身に集りぬ願れば紅軍餘す處大將一人あるのみ秋雲暮々として般雷に伴ひ殺氣堂々無聲場裡に滿つ土氏進めば佐氏退き佐氏突けば土氏避け一合一鬪流石に名將の争とぞ見ぬし密雲捲き來りて紫電閃くと見る一刹那佐氏が膝車は正しく土氏をして終に其息を絶へむ

山崎氏

は騰躍超踴目を瞋して場裡に顯はれたり偉哉豪勇なる兩雄鋒を交へて互に六分の深手を負ひしが佐氏が敏捷電れ如き腰投は誤たず山氏が首をさりぬ茲に於てか白軍れ

永江氏

吾こそは此恨晴さんと勇氣淋漓躍出せしが佐氏は猛虎れ如くたけり狂ひ屈伸自由の腰は花やのに永江氏を擔ふて地に投ず紅軍歡聲湧き白軍の寒膽益甚し看客一喜一憂息を潜めて窺ひ無聲堂裡は寂として聲なく唯殺代たる妖氣に滿ち滿ちたり折しもあれ我こそは白軍の參謀いざ尋常に勝負せんと名乗り出でたるは

有馬氏

さながら凜々しき有様いさましきんと云ふも思なり例の如く首くり足踏み張りて佐氏を目うけて飛びぬる由來勇士と勇士猛者と猛者の戦あれは進退開闔虚々實々左すれば右に避け前すれば後に逃れ勝敗傾にも決せざりければ高聲一發引分の命將に一分の中に下らんとすあはれ敵が首級を手にとるの首を彼に取らるゝに非ずば壯士いかで戦場を去らんと一心弗亂に揉み合

ひし一刹那佐氏がするどき体落に無殘や有氏は馬草に骨を裏まれて戰場一片の煙と化し果てぬる隙もなく白軍の總大將

三橋氏

一鞭席を蹴て立ち佐々木入道が手かみ今こそはみせじいざ覺悟せよと大音聲に白旗の下につき立ちたり其聲さながら猛虎の寒月に嘯き怒獅の幽谷に吼ゆるもかくやと思ひ知られけり呼び立てられたる紅軍の參謀四人切の入道は勇氣前ふ百倍し晴天好敵手咄と叫んで組みかゝりしが如何に剛の者とは云へ三人拔に四人倒せし力は失せ果て深手身に滿ち敵の大敵が腰車にあはれ勇ましき最後を遂げぬこれをみて紅軍の總大將

植村氏

少しも急かず悠然として突き起ちしが今は萬目兩雄が身邊にあつまり兩軍聲を潜めて思はず手に汗を握り今や今やと窺ひけるはさすが大將の

争とぞ見ぬにける宛もこれ兩虎深山に挑むとき鏗然として風起り双龍青潭に戦ふとき沛然として雲起るに似て雷光石火虚々實々の秘術には看る者そゝろに寒さを覺ぬの満堂聞として聲なし一步は一步より急に一動は一動より急なり白將進て紅將に迫ふんとする此時早く彼時遅く紅將が咄と突き込む掛腰にあはれ流石の白將もうへらぬ鬼となりて泉下に恨を吞み紅なせる勝旗は翻て植村大將の肩に落ちぬ嗚呼勝敗は兵家の常といふものゝ此道の蘊奥を極むるものに非ざれば何ぞ能く此に至らむ壯哉快哉柔道場裡一大活劇



其の第一は、
第二は、
第三は、

其の第一は、
第二は、
第三は、
第四は、
第五は、
第六は、
第七は、
第八は、
第九は、
第十は、